

さんばかとゆく！　へ
ルエスタ放浪記～バト
ルスピリッツ～

多田 竜一

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ここは、ヘルエスタ王国。

伝説の聖剣「ヘルエスタ・セイバー」と、それを操る王家「ヘルエスタ一族」によって治められている小さな王国。

この国には、数多くの伝承や神話などがあり、それが時に魔法となり、時に錬金術となり、時に科学となり、国民の生活を日々豊かにしている。

そしてこの国では、ひとつのゲームが、文化として根強く浸透している。

それが、バトルスピリッツ。

通称「バトスピ」と呼ばれるこのゲームは、この国では“知恵の証”として多くの国

民が嗜んでおり、娯楽として遊ぶものから、争いの解決手段にまで、数多くことに用いられている

カードを握るものはカードバトラーと呼ばれ、バトルフィールドでそのカードからスピリットを召喚し、その腕を競い合う。

「ゲートオープン！ 界放！」

今日もまた、この掛け声とともに、バトルフィールドへの扉が開かれる。

これは、馬神ダンがヘルエスタ王国を旅する物語り。

少年が世界を巡るとき、この世界の真実が暴かれる。

目次

第1話「伝説のドラゴン咆哮！ 界放せ

よ！ 太陽神星龍アポロヴルム！」

人質く錬金術師誘拐事件く 1

皇女の怒号く錬金術師の行方く

9

解放く紅のドラゴンく 16

邂逅く選ばれた少年く 22

猛攻くダークヴルムの雷く 42

絶望煌臨くその名は『レガリア』く

52

世界を照らせ！ 光を背負いし紅の龍

よ！ 62

決着く少年の名はく 76

第2話「試されるダン 煌星第一使徒ア

スガルディアの猛攻」

休息く旅の前にく 81

試される力く侵食されゆく銀世界く

99

攻防く吹雪の中で燃える炎く 120

必殺くアスガルディア出陣く 139

第3話「貪欲なる牙 全てを喰らえ！

グリードツグ！」

出立く迷いの森へく 156

強奪く放たれる三つ首く 174

窮地く地獄の牙は3度喰らうく

奪えないものゝ未来へ仕掛けた切り札

ゝ
|
197

第4話「古からの復活！ 燃え上れ！

ジークフリード・リバイバル！」

錬金ゝ再誕する紅の瞳ゝ
|
219

再誕ゝ原初の炎ゝ
|
228

激動ゝ交錯する炎ゝ
|
235

攻防ゝ龍皇の魂は潰えないゝ
|
247

絆ゝそれが彼女たちのありかたゝ

第1話 「伝説のドラゴン咆哮！ 界放せよ！ 太陽神星

龍アポロヴルム！」

人質く錬金術師誘拐事件く

「行け！ ブレイク 合体アタック！」

「俺の負けだ……引き金を引くのは、お前か」

「ありがとうございます……良かったです……良いバトルでした……」

「いやああああああ
!!!!!!」



「っー！」

目を覚ましたアンジュ・カトリーナは、まずその部屋の暗さに困惑した。

さつきまで見ていた、華やかなスピリット同士のバトルとは一転して、目の前が暗くて良く見えない。

光景が一瞬で変わったことに彼女は少し混乱するが、少し冷静になって、すぐに答えは出た。

(夢、か……)

そう考えると、彼女はとても不思議な夢を見た。バトルしていたスピリットも、カードバトルも、彼女には見覚えがないものばかり。そしてそれにしても、妙に詳細な夢の内容に、いったいどんな心理が隠れているなんて真偽が不確かな話があるが、こんな夢

普段あまり夢を見ない分、余計に不思議に感じてしまう。

——チャリ。

ふと、聞き慣れない音がアンジュの耳に入る。

鎖の音だ。しかも近い。例えば、自分の腕のすぐそばとか——。

「っ、両腕が鎖で縛られてる」

良く見てみれば、ここは自分の部屋では無かった。黒い鋼鉄で四方を囲まれ、簡素なベッドが1つだけ雑に置かれている。

そして極めつけに鉄格子ときた。

アンジュの知識が正しければ、こういうところは「牢獄」とか「牢屋」とか言われるような場所だった。

彼女の両腕は背中中で手錠に縛られていて、その手錠から鎖が壁まで伸びており、そこに杭で止めてある。

原始的で、効果的な拘束方法だ。

足が縛られてないのは唯一の救いだろうか。

しかし、足だけ動かさせたところで、出来ることなどたかが知れてはいるのだが。

「よう。目覚めたか」

男の声がした。

とつさに目を見開いて、声の方向を見た。

鉄格子の向こう側に男がいる。

整った顔立ちに気持ち悪い笑みを浮かべて、おぞましい視線をアンジュに向けている。

「アンタ……何者……?」

「俺の名はルーク。『黒竜使いのルーク』って言えば、聞いたことはあるんじゃないか?」

寒気を感じるようなねつとりとした声音に耐えながら、アンジュは自分の記憶を掘り起こした。

確かに、聞いたことがある。普段は引きこもっているアンジュが知っているほどに、ここ数年、遺跡荒らしとして良く聞く名だ。

「遺跡荒らし……ついにヘルエスタまで来たってどこか」

彼はヘルエスタの国民ではない。国外の遺跡を荒らし回るさまが世界的に語られている。そんな彼が、ヘルエスタ王国国民であるアンジュを捕らえ、監禁しているということは、つまりそういうことだろう。

ついにヘルエスタ王国が、遺跡荒らしの標的にされた。

「そこまで察してくれてるなら話は早い。アンタにはこの遺跡まで一緒に来てもらいたい」

ルークは懐から写真を一枚取り出して、そのままアンジュへ放った。

そこに写っていたのは、とても古びた神殿だった。

大きさこそあるが、手入れがまったくされてなく、壁のほとんどが植物に絡まれている、そんな神殿

アンジュは、そこがどこだか知っていた。

ヘルエスタの首都、その外れにある小さな林の奥にポツンと佇む、歴史的な価値もほとんどないような神殿。

一応、「竜が封印されている」というおとぎ話は聞いたことがあるが、その話自体あまり知られていないし、それこそ信じている人なんて皆無だろう。少なくとも、アンジュは信じていない。

「こんな寂れたところに、遺跡^ア荒らし^タみたいなのが欲しがりそうな物なんてなさそうだけど……？」

ルークは、その笑みをより不適に深めて、ねっとりとかく。

「いやあ、ある……いや、いるぜ。この俺が、喉から手が出るほどに欲しいもんがよお」
ルークはそう言うのと、鉄格子の鍵を開けて中へと入って来た。

自分が放った写真を拾い、そのまま屈んでアンジュと向き合う。

悪寒で背筋に冷や汗が滴るアンジュを無視して、ルークはそのまま話を続けた。

「すでに1回ここに立ち寄ったんだが……ここにはいるぜ。封印された伝説のドラゴンが」

……は？ いや、何を言ってるんだこの男は？

その言葉はアンジュの口から出ることはなかったが、しかしアンジュの紛れもない本心だった。

簡単に言えば、ドン引きである。

バトルフィールドから連れてきたというならまだ分からんでもないが、あんなバトスピとは関係ないような神殿に「ドラゴンがいる」という話がまず馬鹿馬鹿しいし、それを「存在することを確認してきた」なんて話は意味が分からない。

「……はは、そんなバカな。あんなの誰が作ったかも分からないおとぎ話でしょ。だい

たい、本当にドラゴンが封印されてるっていうなら、あんな人気ひとけのないところで放置されてる訳ないだろ」

常識的に考えても、論理的に考えても、そんな話はあり得ない。

だが、目の前の男は、そう伝えてもなお、言うことを変えなかつた。

「んなことあ知つたこつちやねえ。ただ、そこにはドラゴンが封印されている。それが事実だ」

マジかこの男、と、アンジユはルークから距離を置こう腰を引いた。

文化に根付いた神話を追いかけるならばともかく、あんな首都の外れにある寂れた神殿の、あまり知られていない適当に作られてそうな話を前提に話されていることに、ついていけない。

(そもそも、このルークってやつはなんで私を捕らえて——)

「俺がお前に頼みたいのは、そのドラゴンの封印解除だ。アンジユ・カトリーナ——巷では有名な錬金術師なんだろ？」

「なっ……!」

——名前を知られていたという事実には、アンジユの顔が一層強ばる。

しかも、アンジユが有名な錬金術師であることまで知っている

だとしたら。

(こいつ……「私が皇族の関係者である」ことを知った上で捕らえてんの……!?)

つまり、このルークという男は、根拠なんて無いに等しい神殿のドラゴンのために、ヘルエスタ王国の皇族を敵に回しているということになる。

——狂ってる。

「っ！……んなこと、私が言うこと聞く義理なんかないでしょ！」

思いの外震えていたアンジュの叫びに反ってきたのは、ルークの呆れたため息だった。

直後、腹部から衝撃が走った。

「アガッ——!?!」

腹を蹴られたと認識出来た頃には、アンジュは鋼鉄の壁に叩きつけられていた。遅れて、みぞおちと背中から急激に痛みが走り出す。

その痛みに悶える暇も与えず、アンジュはルークに胸ぐらを捕まれ。

「——っ！」

また一発。今度は頭突きを食らい、さらに食らった勢いでさらに後頭部を壁に打ち付けられた。

急な暴力に、認識が追いつかない。

頭が揺れているような不確かな意識の中、痛みを感じているかも分からないような状

態のアンジュの耳に、しかしルークの声がしつかりと入ってくる。

「勘違いするなよ錬金術師。お前に選択肢はない」

「ど、う………いう——」

「今、ヘルエスタ王国の第二皇女の言葉で、アンタを探すための搜索隊が動いてる。ここもそのうち見つかるだろう。当然俺は捕まりたくないから抵抗する。そうしたらどれだけの血が流れるんだろうなあ？」

思考も難しい状態だが、しかしアンジュはルークの言いたいことがなんとなく分かった。

これは人質だ。脅されている。

しかも人質は——。

「もしかしたら、助けに来た皇女様が、うっかり流れ弾に当たって死んじゃったりとか、しちやうかもしれないなあ？」

——彼女の大親友であり、幼なじみ。ヘルエスタ王国第二皇女の「リゼ・ヘルエスタ」だ。

皇女の怒号～錬金術師の行方～

「アンジュはまだ見つからないの!!!?」

王宮の一室に、リゼ・ヘルエステアの怒号が響く。

「今、捜索隊が調査を」

「その話はもう12時間前から聞いてる！ 進展は何もないのかって聞いてるの！」

なだめようとする執事——セバスの言葉も意味をなさず、彼女の怒りは、時間とともに増すばかりだった。

普段は温厚で優しい彼女は、執事を理不尽に怒鳴りつけることなど、今まで一度としてそんなことはなかった。

それほどまでに親友—アンジュ・カトリーナの失踪に、リゼの心は追い込まれていた。消息を掴めなくなったのは昨晩のこと。とりとめのない話のために連絡を取ろうとして、あらゆる通信手段を用いても反応がないことがきつかけだった。

普段夜更かしばかりしているアンジュが、夜に連絡が取れないなんてあり得ないと、リゼが直接アンジュの家を訪問して、そこで誘拐が発覚した。

家の周囲には争いの後もあり、すぐさま捜索隊を動かした。

だが、それから12時間。アンジュの行方は、いまだ掴めていない。

痕跡自体は少しずつ見つかっているのだが、どれも行方を掴む核心的なものではなく、捜索はかなり難航している。

「早くしないと、アンジュが……アンジュが……!」

親友への心配と不安と焦り。そして、何も悪くない執事に当たってしまったことへの自己嫌悪。まだ17歳になったばかりの少女から、冷静さを奪うには充分だった。

そして、自分はこの部屋の中で、ただ待つことしか出ないという無力感。

彼女の目から涙が溢れてくるのも、仕方ないことだった。

「リゼ様……」

ピピピと、彼女の様子になにも言えず立ち尽くしていた執事の通信機が鳴る。

その音に、顔を伏せていたリゼが、その顔をあげて執事の方を見る。

通信相手は。

「これは——戌亥とこ様?」

「とこちゃん!?!」

戌亥とこ。その名前を聞いて、リゼは形相を変えて急いでセバスから通信機を取り上げた。

「なっ! リゼ様!」

その通信をリゼが出る

《おおきにくセバスはん》

「とこちゃん！ アンジユ見つかったの!!!？」

《うお!! り、リゼはん？ あれ？ もしかして私、かけ間違えてもうた？》

「そんなことより、アンジユは……!」

戌亥とこ——彼女もまた、リゼの数少ない友人の1人。頭に犬耳、腰から尻尾も生えている、いわゆる獣人である戌亥は、その人間よりも優れた五感や身体能力を使って、アンジユ搜索に協力している。

そんな戌亥から連絡だ。きつとアンジユへの手がかりを見つけたに違いない。

そう思ったら、体がいつの間にかセバスから通信機を奪っていた。

《まあまあ、落ち着いてリゼはん。そんな調子やと、話もまともに聞けへんで。ほら深呼吸。いくち、にくい》

「え？ えーつと、すう……はあ……。すう……ってそうじゃなくて!」

《アハー→ やっぱりリゼはん面白いわあ》

「ちよつと、からかつてる場合じゃ」

《場合やで。一旦落ち着かんと、な?》

いわれて気づく。

深呼吸したおかげで、上がっていた心拍数が少しだけマシになった感覚がする。

それを自覚するのと同時に、焦っていた心が、少しだけ余裕を取り戻す。窓からさす光に、昨晩からの時の流れを読み取れるくらいには、冷静になれた。

「……………」

通信機にまたひとつ着信が来た。

リゼが開くと、戌亥が送った写真が画面に表示された。

《多分、アンジュはんそこにおるよ》

そこには、古びた遺跡が写っていた。

リゼもまたその神殿を知っている。

ヘルエスタの首都、その外れにある小さな林の奥にポツンと佇む、歴史的な価値もほとんどないような神殿。

「……………」

《直接見れた訳やないんよね。ただ、アンジュはんの匂いはかなり強い。もしかしたら、もうあの神殿の中ちやうんかな》

「……………」

《どうなんやろ。アンジュはんと犯人の人のつぽい足跡もあるし、捕まえて運んだというより、2人でこの中にはいいたんやないかな。アンジュはんを縛り付けとくためにこ

ここにいるのと違ちがうくて、アンジュはんにこの遺跡でなんかして欲しいことでもあるんじゃない?」

「敵の狙いはアンジュ自身……ってことは、アンジュは無事かもしれない!」

《少なくとも、死んでへんやろうな》

リゼの涙は、もう消えていた。

「セバス! 飛行船を出して!」

「は? そ、それはどういう……」

急いで外出の身支度を始めるリゼに、執事が困惑の表情を示す。

まさかと思うが。と、リゼの意図を察した執事の心を呼んだかのように、リゼが強く

宣言する。

「私も、アンジュのところへ行く!」

「な、なりませんリゼ様! 相手はあの天才錬金術師アンジュ・カトリーナを生きて捕らえたような連中です。

危険過ぎます! リゼ様に何かあってからじゃ遅いのです!」

制止の言葉に、しかしリゼは意に介さない。

「もちろん護衛隊はつれてくし、向こうにはとこちゃんだっている。だから心配しない

で」

「しかし!」

「それに!!」

執事の言葉を遮って、リゼが執事と向き合う。

「私は、『親友のピンチに、引きこもって何もしなかつた皇女』になんて、なりたくない!」

先ほどまで涙を浮かべていた目は今、とても決意に満ちていた。

何があつても、アンジュ・カトリーナを助け出す。

きつと、そんな覚悟がリゼの中にあるのだろう。

「……分かりました。飛行船ふいねを手配します。」

その決意に、氣迫に、執事は負けた。

「護衛は私が直接声かけてくるから、そんじや、行ってくるねセバス!」

「……はい。お気を付けて」

ドタバタと走って部屋をリゼを見送って、執事はリゼに奪われていた通信機を拾う。

《セバスはんも大変やねえ》

通話は、まだ繋がっていた。

「いえ。……戌亥様に比べたら、これ程度なんでもございません」

《うん……うん?》

「とぼけなくても良いですよ」

通信機を耳に当てながら、セバスもまた部屋を出る。

「例の遺跡があるところは、戌亥様が最初に捜索に向かった方向とは真反対の場所にあります。半日で首都の端から端まで探しきるとは、頭が上がりません」

《ああ、そういうことな》

通話しながら、セバスは廊下を歩きつつ、手元の書類を眺めている。

アンジュの捜索班の報告書だ。どれもめぼしい情報は書いていない。強いて上げるなら、これが失踪事件ではなく誘拐事件であることを突き止めたことくらいだろう。

戌亥はリゼやアンジュととても仲良くしているが、正式にはヘルエスタに籍を置いている訳ではない。言ってしまうえば部外者だ。

そんな部外者の情報に頼らざるを得ない状況は、国の人間として恥を感じてしまう。

《ええよ気にせんで。アンジュはんが心配なおんなんは私も同じやし》

「そう言ってくださるとこちらもありがたいです」

《ほな、リゼはんが出る時にまた連絡してや》

「了解です。リゼ様をよろしくお願ひします、戌亥様」

《おおきにな》

解放く紅のドラゴン

信じがたい光景を前にして、アンジュは開いた口が塞がらなかった。

ルークに連れられてやって来た例の遺跡。その中の、以前来た時には全く気が付かなかった隠し通路を通され、今はその奥にあるひとつの地下空間にいる。

そこには、光る赤い水晶があった。

光の届かない地下空間を明るく照らす水晶には、信じられないことにドラゴンが埋まっていた。

「言つたらう。これが事実だ」

その言葉で、呆けていた心が現実に戻ってくる。

なるほど。確かにルークの言つた通りだ。

このドラゴン、確かにこの水晶の中で生きているし、確かに封印されている。

錬金術師としての知識と経験が、そう確信している。

この水晶は、おそらく物理的に破壊することは不可能だろうし、破壊できたとしても、そんなことをすれば中のドラゴンごと木っ端微塵だ。

これが錬金術によるものなのかは定かではないが、少なくとも封印を解くのに知識と

知恵が必要なのは間違いない。

それが、天才錬金術師「アンジュ・カトリーナ」がここへ連れてこられた理由だ。

ふと、アンジュの手錠が外された。

「一応言っておくが、無駄な抵抗はするなよ」

(そんな力、残ってないっての……)

牢屋の中で殴られた痛みが、まだ身体中にジンジンと響いている。動けないほどではないが、まともに走ることも出来なさそうだ。こんな状態じゃ、ルークから逃げ切ることは不可能だろう。

——やるしかない。

アンジュは水晶に近づいて、それを調べ始めた。

(……相当古いなあこれ。目算でも何百年は前のものだって分かる。それなのに中はキレイに透き通っている……それほど強固でデキの良い封印なんだ)

本当に数百年このドラゴンが封印されていたとするならば、この封印の物理的な硬さは相当なものだ。水晶の表面は傷こそ目立つが、経年劣化すら起こしていない。

しかし。

(封印の仕組み自体は単純だ。確かに一般人に解除は無理だろうけど、知識さえあれば簡単に解ける原始的な封印だ)

少なくとも、アンジュには可能だ。

「どうだ？ 封印は解けそうか？」

答えは yes だ。ただ。

「……ひとつ、聞いて良い？」

アンジュにはひとつ、懸念がある。

「なんだ」

「このドラゴンの封印をここで解いたとして、ここで暴れられたら私らヤバいんじゃないの？」

この封印の仕組みは単純だが、とても強固なものもまた事実だ。

つまりこのドラゴンの封印は、それほど強固である必要があつたということになる。

もはや、どれほどに危険なものか想像すら出来ない。

そんなものの封印を急に解いて、もし暴れでもしたら、目の前にいるアンジュとルークはアリのごとくアツサリと潰れてしまうだろう。

「お前に選択肢なんてないだろう」

だが、そんなアンジュの考えは、杞憂だった。

「仮に俺が、そのドラゴンを手懐ける方法を持つてなかつたとしてだ。お前からしたら、

そのドラゴンに潰されると、俺に逆らって俺に殺されるとじゃ、どっちも結果は変わらないだろ？」

「ハハ……いえてる……」

乾いた笑いの後に、アンジュの錬金術は発動した。

両手を「パン！」と叩いた後に、その両手を地面へ叩きつける。

封印の構造を解析——完了。

封印の分解を開始——成功。

「おおー」

アンジュを中心に風が起こり、そしてみるみるうちに水晶の光が強くなっていく。

第1ロック——解除。

第2ロック——解除。

「来た来たキタあー！」

その光に溶けるように、赤い水晶が消滅していく。

そして——。

（最終ロック——解けた！）

最後に、その光が地下空間の全てを飲み込む。あまりの眩しさに、2人の視界は一時的に奪われた。



「おおきにな〜」

通話を切つて、戌亥は顔を上げた。

ここは林の中。例の古い神殿から遠く離れたところにある高い木のひとつの枝に、彼女は座っている。

ここは、神殿からは肉眼では戌亥を確認できず、しかし、戌亥の視力なら神殿が良く見える良い場所だ。

数分前、通話を始める少し前から、ここに来て神殿を見張っている。

その神殿の中からは、アンジュの匂いと、とう一人の人間の匂いがあった。おそらく、アンジュと彼女をさらった犯人は、あの神殿の中にいる。

(それにしても……)

戌亥には、少し引つ掛かることがあった。

匂いを確認するために神殿へ近寄った時、違和感があったのだ。

(あの神殿、あんな変な匂いしとつたかな)

あの神殿には、数ヶ月前にリゼとアンジュと戌亥の3人で悪ノリで遊びに行ったこと

がある。

ただ、その時はただの石の建造物。それ以外の匂いなんてなかったと記憶している。とはいえ、危ない匂いでもなかった。

本当に、ただただ変な匂いがあるだけ。それだけだ。

(気のせいとか杞憂やとええんやけど)

——その瞬間、遺跡が光に包まれる。

「えっ!?! 何!?!」

その光は強く、強く天まで登って行き、そして数秒もしないうちに消えてしまった。「なんや……何があつたん……?」

目を凝らして、遺跡の方を良く見る。

しかし、外見では変化はなさそうだった。

——プツ。

《はい、セバスです。どうされました戌亥様?》

「なあ、セバスはん」

《……?》

「なんか、遺跡光つたんやけど」

《……はい?》

邂逅く選ばれた少年く

——ここは、どこだ。

不思議な浮遊感の中で、少年は重い瞼をゆっくりと開いた。

ひたすらに白い空間だった。しかし、白一色ではない。様々な色が白の上にうつすらと浮いている。そんな空間。

——おれは、だれだ。

思い出せない。寝起きのような微睡みの中から抜け出すことが出来ず、それがより少年から自己を奪っていく。

そんな中で——少年を呼ぶ咆哮がした。

——誰だ。

音が鳴った訳ではない。しかし、少年は確かにその咆哮に呼ばれた。呼ばれた方に目を向ける。

そこにあつたのは、赤い光だった。

「——お前か」

その光を見ていると、不思議と意識がハッキリとしてきた。

様々な色が白に溶けていくこの空間で、その光は、確かに赤く光っている。呼ばれるままに、少年はその光に手を伸ばす。

そして、その光を掴んだ時、少年は全てを思い出した。

苦い思い出と、勝利への覚悟と、そして大切な人。

それら全てを胸に秘め、少年は強く決意する。

その決意に応えるように、赤い光は、その少年を飲み込んだ。

その少年の名は――。



光が晴れた時、そこには何もなかった。

さつきまであったはずの水晶も、その中にいたドラゴンも、跡形も無く消えていた。

残ったのは、淡い光だけ。それが、この地下空間の光源となって、目の前に何も無い

ことを突き付けていた。

「おい、錬金術師」

「うそ………いったいどうなって………」

「あのドラゴンをどこへやった!？」

ルークが、アンジュの胸ぐらを荒く掴む。

「ちよつと待つて！ 私にもなにがなんだk」

言い切るよりも早く、アンジュの腹部に膝蹴りが襲ってきた。

「アガツ——！」

胸ぐらを離されて、痛みに膝をついて、お腹を抱えてうずくまる。

「もう一度聞く。ドラゴンをどこへやった？」

「だか、ら……私は知ら——」

今度は、顔を蹴られた。

完全に地面へ倒れこんで、もはや悲鳴も出なかった。

「これが最後だ。あのドラゴンをどこへやった」

本当に、アンジュにも分からなかった。

光に包まれて視界を失い、光が晴れたと思ったら、すでにそこにはドラゴンはいなかった。

もうダメだ。

目の前の男は、アンジュが何を言っても信じないだろう。この状況を解決する手段が、何もない。

(ああ、死ぬんだ……)

アンジュの目から、もう光は失われていた。

「答えないか……なら——」

——アンタが欲しいのはこれだろ。

「なっ!」

ルークが振り替えると、そこには1人の少年が立っていた。

そこは、さつきまでドラゴンが封印されていた場所。そこに、赤髪に赤い服を来た、そんな少年が立っていたのだ。

そしてその手には、1枚のバトスピカードが握られている。

「キサマ……それは……!」

そこに刻まれた名は——太陽神星龍 アポロ・ヴルム。

描かれている姿は正しく、先ほどまで水晶の中にいた、赤のドラゴンそのものだった。

「おいガキ。キサマいつからそこにいた」

「このドラゴンに呼ばれて来た」

「どうやって来やがった。この地下空間までは一本道。足音も良く響く。キサマがここに来るのに気付けない訳がねえ」

「俺は別の世界からやってきた」

「……ふざけるなガキが！ 寝言は寝て言え！」

問答無用と、ルークはその少年に襲いかかり、そして一直線にアポロ・ヴルムのカードに手を伸ばす。

しかしその手は、見えない力に弾かれた。

「なっ！」

触れることすら叶わず、ルークは一步交代する。

それは、明らかな拒絶。

「どうやらこのカードは、アンタに使われたくないらしいな」

不適に笑う少年に、ルークの怒りが煽られる。

殺気に満ちた瞳で睨まれた少年はしかし、その殺意を気にせず後ろのアンジュへと目をやった。

そして、痛みにうずくまる彼女と目が合う。

「きみ、は……」

声を出すこともままならない。そんな激痛の中で、彼女の顔は助けを求めていなかった。

むしろ、少年に逃げて欲しいと、そう訴えているようにすら見える。

その顔見て、少年は目線をアンジュからルークに戻した。

「俺とバトルしろ」

「はあ？」

少年は、ルークの腰に付いたホルダーを指した。

ちようどバトル・スピリッツのデッキがひとつ入りそうなホルダーと、彼がアポロ・ヴ
ルムのカードを求めているところから、少年はルークがカードバトルであるとは見抜い
たのだ。

「俺が勝つたら、彼女とこのカードから手を引け」

「俺が勝つたら？」

「このカードはアンタにやるよ」

「そのカードは俺を拒絶してるんじゃないのか？」

「このドラゴンが求めているのは強いカードバトルだ。俺より強いことを証明できれ
ば、アンタを拒絶する理由もなくなる」

「フツ——良いだろう！」

少年の提案を飲み、ルークはホルダーからデッキを取り出し少年に向ける。

少年もまた自らのデッキを取り出し、そしてアポロ・ヴルムのカードをそのデッキへ
挿入する。

「キサマ、異世界から来たと言ったな！ 扉の開き方は知ってるか！」

「この世界にもあるんだな——バトルフィールドが」

「知ってるなら話が早い！ 行くぞ！」

「ゲートオープン！ 界放！」

その掛け声とともに、異界の門が開く。

——バトルフィールド。

スピリットが実際に召喚され、ライフの減少に痛みを伴う。正に、スピリットとカードバトラーが共に戦うスタジアム。

そこで、2人のカードバトラーが向かい合う。

その身につけられた専用のバトルアーマーには、ライフとなる「コア」が備わっている。

ライフは5つ。ライフが減り、そのコアが砕ける度に、バトルアーマーは装着者へ痛みを与える。これによりバトル・スピリッツは、ただのボードゲームから争いへと姿を変える。

そしてこのバトルフィールドには、観客席というものが存在する。

そこに、アンジュは座っていた。

「いつ……」

お腹を支えながら、バトルの様子を見るべく目を凝らしている。

(黒竜使いのルーク……かなり強いつて聞くけど、あの子は大丈夫かな……)

自分を庇って、ルークにバトルを仕掛けた少年は、

外見では14〜16歳のように見える。少なくともアンジュよりも若いのは間違いないだろう。

そんな子供に現状を託すしかないことに、アンジュには少なからず無力感があつた。

——と、心配で少年を見ていたアンジュが、気付く。

(あの子まさか……)

——ブレイク
合体アタック!

(今朝の夢の……!)

アンジュの頭の中で、夢の内容がフラッシュバックした。

間違いない。

見れば見るほどに、あそこに立っている少年は、今朝、アンジュが見た夢の中で、バトルしていた少年だった。

(もう、わけわからん……!)

急に知らない男に監禁されるし、殴れるし、ドラゴンの封印を解けとか言われるし、マジでドラゴンがいたし、封印を解いたと思ったら消えるし、夢に見た少年がいきなり現

れるし。

と、アンジュは思考を放棄した。

「先攻は譲るよガキ。かかってこい」

「……俺のターン。スタートステップ」

そして、バトルは始まった。

少年の第1ターン。

「ドローステップ」

少年はデッキから1枚ドローして、それを手札に加える。

その後、5枚になった手札を見て、少年は考え出す。

第1ターン。それは相手よりも先にカードを使える唯一のターン。コアステップやアタックステップは無いが、それでもなお、先にカードを使えることのアドバンテージは大きい。

故に、ここで使うカードは重要となる。

もしもここで出したスピリットが、相手によって無駄に破壊されてしまうようなら、先攻の優位性を一気に失いかねない。

だからこそ、ここで使うカードは慎重に決めなければならない。

——ならないのだが。

「おい。どうした?」

いつまで経ってもカードを使おうとしない少年に、ルークがしびれを切らして問いかける。

バトルフィールドは、スピリットが十分に暴れられるほどに広く、カードバトラーは、その端と端でカードを捌く。

すなわち、両者の間には相当な距離があるのだが、この空間では、何故かカードバトラーは相手の声を聞き漏らすことはない。

ルークの問いに、少年は手札から目を話、ルークの方へ顔を上げた。

「いや……なんでもない。初めて見るカードばかりだったから、少し効果を確認していただけた」

「——はあ?」

「嘘でしょ!? マジで言ってるのあの子……!?!」

ルークとアンジュは、少年の言葉が信じられなかった。

これは、ただのゲームではない。賭けを背負った戦いだ。そしてそれを仕掛けたのは少年のほう。

だというのに、その戦いにあの少年は今、初めて使うデッキを握っているというのだ。

「おいガキ。自分のデッキはねえのか」

「ああ。どうやら前の世界に置いてきたらしい」

「じゃあそのデッキはなんだ」

「アポロ・ヴルムが俺に託したデッキだ」

抑揚のない少年の返答に、手札を握るルークの手に力が入る。

（スピリットに託されたデッキだと……？ いやそんなことよりも、このバトルフィールドに使ったことのないデッキで入ってくるのが許せねえ……！）

バトル・スピリッツでの強さとは、それはすなわち”知恵の証”である。

バトスピで勝ったものが優れていて、負けたものが劣っている。

ここは、自らの価値を証明する場でもあるのだ。

少年の行動は、そんな場所に侮辱しているようなもの。

アンジユを躊躇いなく殴り蹴ったようなルークにも、カードバトラーとしての誇りがある。そんな誇りを、無造作に汚されたかのような怒りが、ルークの中で沸き上がるのも当然である。

「……バトルを始めるぞ」

そんなルークに気付いてないのか、はたまた無視か。

少年は効果を確認し終わると「メインステップ」と宣言し、その手札から一枚のカードをフィールドへ出した。

『ゴッドシーカー アルファレジオン』をレベル1で召喚」

フィールドに、バトスピの赤属性を象徴するシンボルが現れる。それが砕けると共に、緑の鱗に紅い装甲を纏ったスピリット『アルファレジオン』が召喚される。

『アルファレジオン』はLv1であり、BPは3000。

『アルファレジオン』の召喚時効果を発揮。デッキを上から3枚オープン。その中の系統：『界渡』／『化神』を持つ赤のスピリットカード1枚を手札に加える」

少年のデッキの上から3枚がめくられる。

めくれたカードは『煌星竜スピキュールドラゴン』／『シャーマニックドロ』／『太陽皇ヘリオスファイア・ドラゴン』の3枚。

その中で系統：『界渡』を持つスピリットは『ヘリオスファイア・ドラゴン』のみ。

『太陽皇ヘリオスファイア・ドラゴン』を手札に加え、残ったカードはデッキの下に戻す。ターンエンドだ」

「ちっ………舐めるなよガキが！ スタートステップ！」

ルークの第2ターン。

コアステップでリザーブにコアが増え、ドローステップで1枚引き、流れるようにメインステップ。

『ガスミミズク』、『シキツル』をそれぞれレベル1で召喚！」

ルーク側のフィールドにバトスピの紫を象徴するシンボルが2つ現れ、割れる。現れたのは、紅い目をした不気味なフクロウ『『ガスマミミズク』』と、紫色の折り紙で作られた折鶴の『『シキツル』』だ。

「『シキツル』の召喚時効果、デッキからカードを1枚ドローする」

ルークはドローしたカードを手札に加えると、それとは違うカード1枚を握った。

「そして『バースト』をセット。——アタックステップ！」

そのカードをそのまま裏向きでフィールドへ置く。

2体のスピリットはLv1で共にBPは1000。少年の場の『アルファレジオン』のBP3000に劣っている。

しかし。

「『ガスマミミズク』！ まずはお前からだ！」

そんなことはお構い無しに、ルークはスピリットに攻撃を命じた。

ルークが場に置かれた『ガスマミミズク』のカードを横向きにすると、それを受けてバトルフィールドの『ガスマミミズク』が羽ばたき、少年に向かって突進を始める。

フィールドに召喚されたスピリットは、それを横向きに倒して（疲労させることで）、相手プレイヤーのライフを攻撃できる。

攻撃を受けたプレイヤーは、自分のスピリットを疲労させることで、代わりにそのス

ピリットで攻撃をブロックすることが出来る。

スピリットでブロックしたならば、スピリット同士は「バトル」を行い、BPが低いスピリットは破壊される。

つまり、少年は『ガスマミズク』のアタックを、『アルファレジオン』でブロックできる。

そうすれば、少年はライフを守れることに加え、BP3000の『アルファレジオン』がBP1000の『ガスマミズク』を破壊してくれる。

——だが。

「ライフで受ける！」

即決。

『ガスマミズク』は『アルファレジオン』の横を素通りし、真っ直ぐ少年に突っ込んで行く。

『ガスマミズク』の攻撃が届く直前、少年の前に紫色のバリアが現れ、それが『ガスマミズク』の突進を受けた。『ガスマミズク』の攻撃の衝撃は、バリアを経由して、少年のバトルアーマーのコアを1つ——すなわち、ライフを1つ破壊した。

少年の残りライフ——4。

「ほう……」

自分のもとへ帰ってきてその羽を休めている『ガスマミズク』を横目に、ルークは少年のプレイに感心していた。

そしてそれは、観客席のアンジュも同じだった。

『ガスマミズク』には破壊時効果がある。『バースト』もあることを考えると、今の『ガスマミズク』のアタックは無闇にブロックするよりも、ライフで受けるのが最善手ではある。だけど……)

外野から、最善手を考察するのは簡単だ。

しかし、バトルフィールドに立ったカードバトルラーにとって、それはとてつもなく難しい。

現実にはいないモンスターが急に現れ、自分を襲いかかってきて、ライフが減れば痛みを伴う。

バトルフィールドが作ってくれるバリアが守ってくれることを知っていたとしても、スピリットが直接襲いかかってくる様はカードバトルラーの恐怖心を煽り、冷静な判断力を奪うには充分だ。

しかし、少年はまったく動揺しなかった。

スピリットに襲われることに動じず、最善手を一瞬で見極め、判断した。

「キサマ、バトル慣れはしているようだな？」

「ふ………どうかな？」

不適に笑う少年を見て、ルークは確信した。

少年は、相当な場数を踏んでいる。

それを理解し、怒りが溢れ返っていたルークの心が急激に冷静さを取り戻していく。デツキは初めて触るものかもしれない。しかし、少年の腕は確かであり、ともすれば、『アルファレジオン』やオープンされたカードを見る限りデツキ自体の完成度も低くない。

つまり、油断すれば、ルークが負ける可能性も充分にありえる。

「ターンエンドだ。見せてみる……キサマの実力を……！」

「良いだろう。スタートステップ……！」

少年の第3ターン。

コア、ドロロー、リフレッシュとステップを重ね、そして。

「メインステップ。『ホワイトホール・ドラゴン』をL Vで召喚」

赤のシンボルが現れ砕ける。そこに現れたのは蒼き翼に白く染まった身体が美しい4足立ちのドラゴン。

そして、少年がさらにカードを握る

「このスピリットは、系統：『星竜』を持つスピリットが召喚された時、コスト4のスピ

リットとして召喚できる」

ホワイトホール・ドラゴンは系統：『星竜』を持っている。すなわち、その条件を満たしている。

『太陽皇ヘリオスファイア・ドラゴン』——Lv1で召喚。不足コストは、『ホワイトホール・ドラゴン』確保。よって消滅する」

スピリットを召喚する時、召喚コストとは別に、その上に最低1個をコアを乗せなければならぬが、『太陽皇ヘリオスファイア・ドラゴン』を召喚するのに、上に乗せるコアが1つ足りていない。

少年は、その不足したコアを召喚したばかりの『ホワイトホール・ドラゴン』のコア使うことで確保する。コアを全て取り除かれた『ホワイトホール・ドラゴン』は、光と成ってフィールドから消えた。

現れた赤のシンボルが砕けた時、そこに召喚されたのは、太陽のような金色の炎。それを中心に、腕が、足が、そして翼が姿を見せる。

一見すればロボットに見違えるようなメカメカしい武装をした『ヘリオスファイア・ドラゴン』が、咆哮と共にこの地へ降り立った。

「アタックステップ。『ヘリオスファイア・ドラゴン』の効果発揮。アタックステップ開始時、トラッシュにあるソウルコア以外のコアを好きな数このスピリットに乗せる」

この効果で、少年はトラッシュのコアを全て『ヘリオスファイア・ドラゴン』へ乗せた。Lv1で召喚された『ヘリオスファイア・ドラゴン』は、コアが増え、そのレベルを2へと上げる。そのBPは8000。

「そしてアタックだ。『ヘリオスファイア・ドラゴン』」

少年がそのカードを横に倒し、『ヘリオスファイア・ドラゴン』がその翼で飛翔する。

「『ヘリオスファイア・ドラゴン』のアタック時効果。『シキツル』を破壊する」

ルークへと向かう突進の最中、目の前にいた『シキツル』をその腕で払い、そのままフィールドの外へと吹き飛ばした。

「ちっ……ブロッカーは許さないってか」

太陽皇『ヘリオスファイア・ドラゴン』、Lv2以上の時のアタック時効果。『ヘリオスファイア・ドラゴン』よりもBPが低い相手スピリット1体を破壊できる。

『ヘリオスファイア・ドラゴン』のBPは8000。従って、BP1000の『シキツル』が破壊された。

これにより、ルークの場には疲労状態の『ガスマミズク』のみ。ブロックは不可能。すなわち。

「ライフで受ける!」

ルークの前に赤いバリアが展開され、それに向かって『ヘリオスファイア・ドラゴン』が

殴りかかる。

「っ——！」

その衝撃が、痛みを伴ってルークのライフを破壊する。

『『アルファレジオン』。お前もアタック』

「……来い。ライフで受ける！」

『『アルファレジオン』』がその口から火を吹き、バリアを伝ってルークのライフを砕く。

ルークのライフは、残り3つ。

「クク……フルアタックたあ威勢が良いなあ」

バトルスーツの砕かれたライフのあった部分、そこ手で抑え、ルークはニヤリと笑っ

ていた。

「……随分と嬉しそうだな」

「そりやそうさ……砕かれたライフはリザーブに送られ、次のスピリット召喚の糧となる！ コアの砕かれる音は、敗北の兆しであると同時に、俺のキースピリットがこの地に向かう足音なのさ！」

ルークは笑う。

それは、勝利を愛し、敗北を憎み、強くなることに全てを賭けたもの特有の狂気。

こういう男が欲しいものは、安心安全の勝利ではない。

最後の最後までどちらが勝つか分からない。それ故に、ひとつのミスが敗北を生む、極限の勝負。

熾烈な読み合い、それを制した時の勝利こそ、この狂気を満たせる快感になる。負けたくない。

だからこそ、敗北が近づくほどに——ライフが減ることに、勝利への思考が冴えていく。

ルークはそういう男だった。

そしてそれは、彼もまた——。

「……………ターンエンドだ」

猛攻くダークヴルムの雷く

ルークの第4ターン。

「メイנסステップ！ 『クリスタニードル』をLv1で召喚！」

新たに現れた紫のシンボル。それが割れ、現れたのは宙を漂う紫の蛇だ。東洋の竜のように、蛇のような体躯に取って付けたような翼で宙に浮いて、その身体をくねらせている。

『クリスタニードル』Lv1のBPは1000。今フィールドにあるスピリットの中では、文句なしに最弱のステータス。

だが、バトル・スピリッツのカードは、フィールドにある同じ色のカードの数だけコストが下がる。

つまり、この『クリスタニードル』は、次に召喚するスピリットの布石。

ルークは、満を持したと言わんばかりに、手札1枚を高く掲げる。

「そして現れろ！ 『魔界竜鬼ダークヴルム』！ Lv2で召喚！」

その声に呼応して、フィールドの空が突如、暗雲に覆われる。

「っ———！」

「な、なにになに!? なんなの!？」

その暗雲から、暗黒の雷がフィールド全域に降り注ぐ中、その中の一つがバトルフィールドのルーク側のフィールドに落ちる。

その雷は砂塵を巻き上げ、そこに一体の竜を呼ぶ。

黒き雷を纏ったその翼が砂塵を払い、その奥で碧の瞳が強く光る。

『魔界竜鬼ダークヴルム』——その竜の咆哮と共にフィールドは再び光を取り戻した。

「『ダークヴルム』……か」

「なんだ? 『ダークヴルム』を知っているのか?」

「……そのスピリットは知らない。だが、」 『ダークヴルム』 ” の名を冠したスピリットには、少し因縁がある」

「ほう……そいつは面白い事を聞いた」

ルークがフィールドに現れた『ダークヴルム』に目を向けると、それと同じタイミングで『ダークヴルム』もまた、ルークへとその顔を向けた。

「こいつは俺がバトスピを始めた時からの古い付き合いでな。俺のバトルは、常にこのドラゴンと共にあった」

そう語るルークの瞳は、先ほどとは違ってかわって穏やかなものになっていた。

——しかし。

「だからこそ！ 『ダークヴルム』には俺の魂を賭ける価値がある！」

直後、ルークの瞳に狂気が戻り、それと同時に『ダークヴルム』がルーク目掛けて飛びかかる。

「っ!?!」

「『ダークヴルム』の召喚時効果！ 俺のライフを1つ、トラッシュへ送る！」

『ダークヴルム』は、その口から黒い雷のブレスをルークに放ち、ルークはそれと両腕を広げ向かい合う。紫のバリアが展開され、そこから伝わる衝撃が、ルークのライフを1つ破壊する。

これにより、ルークのライフは残り2つ。5つから始まったライフが半分を切った。

「自分のスピリットに自分を攻撃させるって……ホントなんなのアイツ……!?!」

「……スーサイド戦法か」

「これにより！ 俺はカードを2枚ドロウする！」

スーサイドとは「自殺」という意味の英単語。すなわちスーサイド戦法とは、敗北に直結するほどの重いコストを払う必要がある、強力な効果を持つカードを使う戦法のこと。

『ダークヴルム』はコスト4のスピリットだが、このコストのスピリットが召喚するだ

けで2枚ドロー出来る効果を持っているのは、ことバトスピにおいては破格の性能になる。

だからこそ、ルークはその効果に、5つしかないライフの1つ差し出す価値があると、そう信じている。

——しかも、ルークの展開はこれで終わらない。

「さらに！ ライフ減少で【バースト】発動！」

その宣言と共に、前のターンにルークの場に伏せていたカードがその姿を露にする。

「っ——!?!」

『選ばれし探索者アレックス』の【バースト】効果で、『アレックス』自身をノーコストで召喚する！」

フィールドが霧に包まれる。白い霧は、徐々に赤、紫、緑、黄、青と色を帯びていく。6色に彩られた霧の向こう。そこにいるのは一人の少女。

『選ばれし探索者アレックス』——その美しい姿がフィールドに現れる。

『アレックス』はその【バースト】効果で、ボイドからコアを1つリザーブに置くか、1枚ドローすることが出来る」

「コアブーストか手札補充か」

「俺はコアブーストを選択！ そのコアで『アレックス』をLv2にアップ！」

『アレックス』Lv2のBPは8000。そして並び立つルークのスピリットたちは、『ダークヴルム』Lv2/BP4000、『クリスタニードル』Lv1/BP1000、『ガスマミズク』Lv1/BP1000の3体。『アレックス』と合わせて4体。

「アタックステップ！ 行くぞ！ 『ダークヴルム』！」

ルークが盤面の『ダークヴルム』のカードを横に倒し、フィールドの『ダークヴルム』が雄叫びとともに飛び上がる。

「『ダークヴルム』Lv2のアタック時！ 相手スピリットのコア一つをリザーブへ送る！ 『アルファレジオン』を指定！」

飛び上がった『ダークヴルム』の翼から、紫の雷撃が放たれる。その雷撃はアルファレジオンを容赦なく貫き、『アルファレジオン』はその場で膝をつき、消えた。

消滅。

バトスピでは、召喚されたスピリットにコアが置かれる。このコアが多く置かれるほどに、そのスピリットそのLvは上がっていく。逆に、コアが一つもなくなつたスピリットは、フィールドに存在できずにトラッシュ送られる。これが消滅。

今回の場合、『ダークヴルム』の効果によって『アルファレジオン』のコアが強制的に1つ取り除かれ、0にされてしまったため消滅した。

この『ダークヴルム』の効果こそ、ルークが使う「紫」のカードの得意とする効果。

相手のスピリットを、まるで毒で弱らせるようにコアを取り除き、やがて消滅させていく戦術「コアシユート」だ。

そして得意とする効果はもちろん、少年の使う「赤」のカードにも存在する。

「フラッシュタイムニング! マジック『フレイムスパーク』を使用。不足コストは、『ヘリオスファイア・ドラゴン』から確保。よってL V Iにダウン」

マジック『フレイムスパーク』はコスト5のカード。場にセイントフレイムと同じ色であるカードが1枚、『太陽皇ヘリオスファイア・ドラゴン』が存在しているので、コストが1つ軽減されて4コストになる。

少年は、『ヘリオスファイア・ドラゴン』にコア2つのみを残し、それ以外のコアをコストに『フレイムスパーク』を使った。

「合計BP5000分の相手スピリットを破壊する。BP1000のガスミミズクとクリスタニードルの2体を破壊」

少年の背後から、赤い炎が2つ、飛び這うようにフィールドを駆ける。飛んでいた『ダークヴルム』とすれ違った直後、その炎は少年の指定した2体を貫いた。

「チツ——!」

これが、少年の使う赤のカードの特性。相手スピリットのBPを参照し破壊して行く。条件さえそろえば何体でも同時に破壊する制圧力。

炎に貫かれた2体のスピリットが、爆発し、破壊される。

さらに、フレイムスパークには、この効果でスピリットを破壊した時、自分のトラッシュから好きなスピリットを手札に戻す効果も付いている。少年はこの効果で、『ダークヴルム』によって除去された『アルファレジオン』を回収した。

それを、ルークは意に介さず、

「だが『ダークヴルム』は破壊されていない！ こいつのアタックはまだ終わってないぜ！」

2体が破壊された爆風の向こう、『ダークヴルム』は飛翔を続け、すでに少年の目の前までたどりついていた

だがやはり、少年は動じることもなく。

「ライフで受ける！」

飛翔してきた『ダークヴルム』はそのまま少年めがけてダイブした。目の前に紫色のバリアが展開され、そのバリアに、サークヴルムが衝突する。その衝撃が、バリアを通して、少年のライフを1つ砕く。

少年のライフは、残り3。

ルークの場には、まだアタックができる『アレックス』。対し少年にブロックできるスピリットはいない。ルークにとっては、絶好の攻撃のチャンス。

そのチャンスをと、ルークは逃さない。

『アレックス』！ お前もやれ！』

ルークの声を受けて、『アレックス』がその手に持つ杖を構える。

「ライフで受ける！」

その杖から、6色に輝くビームが放たれ、少年の目の前に展開されたバリアに衝突する。

その衝撃が、さらに少年のライフを砕く。

これで、少年のライフは残り2つ。

フィールドにいるスピリットによるフルアタック。それにより、残りライフを2つにまで追い込まれる。奇しくも、前の少年のターンと同じだった。

「はっ！ 似ているなあ俺たちは！」

「……なんの話だ」

まだ痛む胸元を撫でる少年の反応に、ルークは構わず語り続ける。

「バトルスタイルの話さ！ ブロツカーを残さずに臆せず攻めるフルアタック！ だが

その裏には！」

「……相手の攻撃を誘う意味がある」

「それはカウンターを狙うだけではなく！」

「ライフを打たせ、コアを貯めるため。ふっ……なるほど。確かに似てるかもないな」
その2人の会話を聞いて、アンジュは。

「なんか私、忘れられてない?」

少し落ち込みながら、フィールド全体を見渡していた。

立つのも苦しいほどに痛みがまだ残っているが、せれでも、気になってしまふのだ。

封印されていたドラゴン、そしてそのドラゴンが選んだという夢に出てきた少年。それらが織り成すバトルの結果が。

「状況は、あの子が有利」

ルークのターンが終わり、一時の静寂を手に入れた戦況を見る。

次のターン、回収した『アルファレジオン』を召喚すれば、すでに場にある『ヘリオスファイア・ドラゴン』と2体で攻撃して、残りライフ2つのルークを倒すことができる。そしてルークは、さっきのフルアタックでブロッカーがいらない。あの子の攻撃を止める手段は今、盤面にはない。

だが。

「そんなことはルークも分かっているはず。分かっているはずなのに、あえてブロッカーを残さなかった。それはつまり——」

——攻撃を、誘っている。

「これは恐らく、攻撃を誘って、フラッシュユタイミングでカウンターを決めるための罠。そしてそれは、多分あの子も分かっているし、あの子が気付いていることも、ルークは分かかってやっている」

つまり、駆け引きだ。

お互いが、お互いの狙いに気付いた上で、どう行動するかなのか、どう行動させるのか、の、駆け引き。

その、勝敗を決するほどに熾烈な、少年の第5ダウンが。

「スタートステップ」

今、始まる。

絶望煌臨くその名は『レガリア』

「スタートステップ」

少年の、第5ターン。

「メインステップ。『ヘリオスファイア・ドラゴン』を再びLv2にアップ。そして『アルファレジオン』をLv1で再び召喚」

アルファレジオンの召喚時効果により、再び少年はデッキの上から3枚を公開する。

「『シャーマント・ヒビ』を手札に加え、そのままLv1で召喚」

赤のシンボルが現れ砕ける。現れたのは、民族衣装を纏うサル。『シャーマント・ヒビ』はその地に降り立つと、ウツキー！ っとめいっばいの威嚇を放って見せた。

これで、スピリットは3体。ブロッカーのいないルークでは、残り2つのライフは守れない。

「アタックステップ。『ヘリオスファイア・ドラゴン』の効果により、トラッシュにあるコアを全てこのスピリットの上に置く」

コアが増え、『ヘリオスファイア・ドラゴン』のLvがLv3（BP12000）へと上昇する。

「『ヘリオスファイア・ドラゴン』でアタック」

少年がカードを横に倒し、命令を受けた『ヘリオスファイア・ドラゴン』が飛翔する。

「Lv2, 3のアタック時効果により、このスピリットよりBPの低い相手スピリット1体を破壊する。『ヘリオスファイア・ドラゴン』のBPは12000。よって、BP8000の『アレックス』を破壊する」

はるか上空へと飛翔した『ヘリオスファイア・ドラゴン』は、その上空から一直線に地上に向かって降下する。バトルフィールドに当たろうというギリギリのラインで急旋回。再び上昇を始め、そしてその勢いに任せて『アレックス』へ突進し、そのまま破壊して見せた。

「そしてこれがメインのアタックだ」

上昇した『ヘリオスファイア・ドラゴン』は、ルークの目の前で止まると、その胸元のコアになる部分へ炎のエネルギーを貯め始めた。

まずは1つ。

ルークのライフを狙う、その炎は。

——ニヤリ。

「フラッシュタイミング！ マジック『シヴァカタストロフィー』を使用！」

届かなかった。

ルークの右手に握られてた1枚のカード。そこから発せらる紫のオーラによってその炎が吹き飛ばされる。それは『ヘリオスファイア・ドラゴン』をも吹き飛ばし、バトルフィールドの少年の方へまで後退させた。

『シヴァアカタストロファイ』の効果発揮により、貴様のスピリット全てのコアを、1つになるまでリザーブへ送る。せつかくトラッシュから戻したコアだが、全部消えな！』そのオーラは、少年の場にいたスピリットも巻き込む。

しかし、『アルファレジオン』と『シャーマント・ヒビ』の2体はもともとコアが1つしか置かれていないLv1のスピリット。被害がでたのは、Lv3(BP12000)からLv1(BP5000)へと下がった『ヘリオスファイア・ドラゴン』だけだ。

そして何より、

「でも『ヘリオスファイア・ドラゴン』は破壊されたわけじゃない……まだ攻撃は残ってる……！」

アンジュの言う通り。スピリットのレベルが下がったところで、攻撃が止まるわけじゃない。まだ、『ヘリオスファイア・ドラゴン』の攻撃はルークのライフを狙っている。だが、

「テメエのフラッシュがねえなら……続けてフラッシュタイミング！」

ルークがその手札から1枚カードを取り出す。それに呼応して、場の『ダークヴルム』

が飛び上がった。

「——っ！」

「このスピリットは、俺のソウルコアを1つリザーブに送ることで、コスト3以上の紫か赤のスピリットの上に重ねるようにして、コストを支払わずに場に出せる！」

その声に呼応して、暗雲がバトルフィールドを包む。その雲の中で、徐々に力を貯めるように、ゴロゴロと雷の音が鳴り続ける。

「暗黒を貫く雷よ！^{いかずち} 今こそ玉座より姿を現し、齒向かう魂を殲滅せよ！」

その暗雲を背に、『ダークヴルム』がフィールドを、少年とそのスピリットたちを見下ろした。

瞬間。

暗雲に溜まった紫の雷が、束となって『ダークヴルム』に振ってきた。一瞬で、その姿が光の中へと消える。

『魔界皇龍ダークヴルム・レガリア』！ 『魔界竜鬼ダークヴルム』に、『煌臨』だあ！」

その光が消えた時、そこにいたのは魔界竜鬼ではなかった。

荒々しくフィールドを飛び回る姿はそこにはなく、あるのは静かに佇む王の姿。

優雅に腕を組みながら、『ダークヴルム・レガリア』がフィールドに煌臨した。

「それがお前のキースピリットか」

『ダークヴルム・レガリア』の煌臨時効果!」

組んでいた腕をほだき、『ダークヴルム・レガリア』は、その右手に持った杖を横に一振りした。直後、それをなぞるように紫色の衝撃波が生じ、次の瞬間には。

「っ——!」

「ぜ、全滅……!?!」

少年にフィールドに、スピリットは残っていなかった。

『ダークヴルム・レガリア』は煌臨したとき、コアを1つしか持たない相手スピリットを全て破壊する。今貴様のフィールドは、俺が使った『シヴァカタストロフィー』の効果で全てのスピリットの持つコアが1つとなつている。つまり——全滅だ!」

そして『ダークヴルム・レガリア』には更に、この効果で破壊したスピリットの数だけドローする効果もついている。

今回、少年のフィールドにいたスピリットは3体。よつて、ルークは3枚ドローした。少年は3体のスピリット全てを失い、ルークは新たに3枚の手札を手に入れた。

圧倒的アドバンテージ。しかも、少年の場には次のターンの攻撃を防ぐスピリットもない。残り少ないライフ2つが、無防備に晒されてしまつている。

拮抗していたはずのバトルが、一気にルークへ傾いた。

そして、スピリットを全て失つた少年は、もうアタックを続けることは出来ない。ア

タックが出来なくなつたカードバトラーが取れる選択肢は、たった1つ。

「……ターンエンド」

少年の勝機は消え、そして絶望のターンが始まる。

「スタートお……ステツプう！」

ルークの、第6ターン。

「メインステツプ！ 神銃ブレイヴ——『天冥銃アーミラリー・スフィア』を召喚！」

紫のシンボルが現れ砕かれる。現れたのは、中央に小さな点球技を備えた黄金の拳銃。姿を見せた『アーミラリー・スフィア』は、上空へ投げ出されており、そのまま回転しながら落下していく。

「『アーミラリー・スフィア』を『ダークヴルム・レガリア』に、ブレイヴ合体！」

右手に持った杖を放り投げ、『ダークヴルム・レガリア』は落ちてきたその銃を掴む。

「打ちぬくぞ！ ブレイヴ合体スピリット！」

「つ——」

ブレイヴの召喚により、『ダークヴルム・レガリア』は『アーミラリー・スフィア』のコスト、効果、色、そしてシンボルが加えられる。さらに、リザーブのコアが全て置かれ、『ダークヴルム・レガリア』はLv3 (BP14000)。

「【バースト】をセットしてアタックステツプ！ 行くぞ！ ブレイヴ合体スピリット！お！」

合体した『ダークヴルム・レガリア』が、その銃を少年に向けて構える。中央に備え付けられた点球技が発光・回転して、そのエネルギーが銃口へ溜まっていく。

「合体スピリットのシンボルは、元となったスピリットとブレイヴの両方のシンボルを合計したものを参照する。すなわち、合体スピリットはダブルシンボル——残り2つのライフを一撃で砕く！ 何も無えならこれで終わりだあ！」

その引き金が、引かれた。『アーミラリー・スファイア』の銃口に貯められたエネルギーが一直線に少年へ向かう。

一撃で、少年の残りライフを吹き飛ばす必殺の弾丸。プロツカーのいない少年にこれを止める手段はない。

フィールドにはない。だが。

「フラツシュタイミング——」

手札は別だ。

「——マジック『マグネティックフレイム』を使用。シンボル2つ以上の相手スピリット1体を破壊する」

少年の目の前に、黒い球体が現れ、それを覆うように炎が燃え盛る。その炎は、少年に迫っていた弾丸を弾き、そのまま黒い球体と共に『ダークヴルム・レガリア』に襲い掛かる。

炎は『ダークヴルム・レガリア』を包み込むと、締め付けながらそれを炙り上げる。苦しむ最中、『ダークヴルム・レガリア』は最後の力を振り絞り、持つていた『アーミラリースフィア』を少年に向けて投げつけ、破壊された。

「よし！ ルークのキースピリットを破壊した！」

合体スピリットは破壊された場合、ブレイヴのみをフィールドに残すことが出来る。つまり、『アーミラリースフィア』はいまだフィールドに残り続け、少年に向けてアタックを続けている。

「ハッ！ やはり一筋縄じゃいかねえなあ！ だが！」

ルークが一枚、手札からカードを取り出す。

それと同時に、ルークの伏せた「バースト」に、ピリつと電流が走る。

「自分の紫のスピリットが破壊されたとき！ コイツは手札からノーコストで召喚できる！ Lv2で来い！ 『幽騎士ナイトライダー』！」

炎が引いた頃、そこにあつた『ダークヴルム・レガリア』の魂の残滓が再び集まるように、黒い靄がそこに溜まり始める。それが徐々に大きくなり、それを覆うほどの大きさになった時、一気に弾けた。

紫の甲冑に身を包む馬と騎士。『幽騎士ナイトライダー』Lv2（BP6000）が召喚される。

「つ——」

「そんな……このタイミングで新たなアタッカー!?」

「それだけじゃねえ! 俺が伏せたこの『バースト』は『幻影氷結晶』! テメエがたつた今破壊した『レガリア』をすぐに回収できる!」

さらに、ルークの場にある『アーミラリー・スファイア』には【装填^{リロード}】という効果がある。本来『ダークヴルム・レガリア』の持つ【煌臨】の効果では、今の『アーミラリー・スファイア』のようなスピリット状態のブレイヴには乗せることが出来ない。だが、【装填^{リロード}】を持つブレイヴには、そのルールを無視して【煌臨】することが出来る。しかも、【装填^{リロード}】を持つブレイヴは、そのまま【煌臨】したスピリットに直接合体^{ブレイヴ}することが出来る。

そして。

「俺はまだフラッシュの権利を使っていない! すでにマグネティックフレイルムでフラッシュタイムिंगの権利を使ったテメエには! この【煌臨】は止められない!」

そうなれば、再びダブルシンボルの攻撃が少年を襲うことになる。

通つてしまえば今度こそ敗北、しかし止める手立てがない。

「そんなつ——!」

アンジュは、無意識に名前も知らない少年に手を伸ばしていた。

しかし、そんなことをしても意味はない。観客の彼女にはどうしようもなかった。
「これで終わりだあ！」

ルークが、その「バースト」に手をかけた――。

世界を照らせ！ 光を背負いし紅の龍よ！

「これで終わりだあー！」

ルークが、そのバーストに手をかけた――。

その瞬間。

――カキン

「……へ？」

「……な、なんだ？」

甲高い音がバトルフィールドに鳴り響く。音源は……少年に向かって放り投げられた『アーミラリー・スフィア』だった。

「なっ……！」

投げ飛ばされていたはずの『アーミラリー・スフィア』が、宙で停止していた。よく見れば、そこに何か刺さっている。

炎の矢だ。炎で出来た矢が『アーミラリー・スフィア』を貫いている。
直後。

「……な、なんだこりゃあ!!」

フィールド全域に、炎の矢が雨のごとく降り注ぐ。これによって他のスピリットが破壊されることはなかったが、降り止んだ頃には、『アーミラー・スフィア』は破壊されていた。

「貴様かああ!」

「お前が『ナイトライダー』を召喚した時、マジック『クエーサーレイン』を使用した」マジック『クエーサーレイン』は、相手のスピリットが効果によって召喚されたときに、その瞬間に効果を発揮できるマジックカード。フラッシュタイミングの権利に関係なく使用出来るカードだ。

「BP10000以下の相手スピリット1体を破壊する効果で、お前の『アーミラー・スフィア』を破壊した」

「チ……バースト発動。『幻影氷結晶』のバースト効果により、破壊された『ダークヴルム・レガリア』を手札に戻す」

「ふ……『ナイトライダー』に【煌臨】するか?」

「こんの……黙れクソガキがあ!」

今、ルークの場には『ナイトライダー』のみ。このスピリット1体のアタックでは、残りライフ2つの少年を倒すことは出来ない。『ナイトライダー』に『ダークヴルム・レガリア』を【煌臨】しても、与えるダメージは何も変わらない。つまり、【煌臨】しても意

味はない。

煽りだ。

ルークの調子を狂わせるための口車。だから、そんな誘いには乗ってはいけない。

「……ターンエンドだ」

アタックしても勝てるわけじゃない。なら、『ナイトライダー』はプロツカーとして残す方が賢明な判断だろう。

少年は、絶望のターンを、潜り抜けたのだ。

「す、すごい……」

あまりの攻防に、アンジユは開いた口が塞がらなかった。

彼女もまたカードバトラーではあるが、あの激しい攻防に、ついていけない。

特に先ほどの攻防。少年のプレイング。

前のターンで、スピリットを全滅させられたと思えないほどに、冷静な対処。相手のキースピリットに臆せず、不足な事態を分析し、見事ピンチ脱して見せた。

並みのバトラーではない。しかも、今日初めて使うというデッキでそれをしてみせている。

もはや、すごいとしか言えない。それ以外の言葉が出てこない。

「あの『黒龍使い』のルークにここまで……まさかあの子、本当に勝てる?」

「いいや、あのガキは勝てねえよアンジュ・カトリーナ」

意外にも、アンジュに言葉を返したのはルークだった。

「それってどういう……!」

「どうもこうもねえよ。今あいつは、『アポロヴルム』を持っていない」

「なっ……!?!」

「……」

なんでそんなことが分かるんだ、という言葉が出る前に、ルークが少年を指さして言い放つ。

「何故なら、もしも手札にすでにいたのなら、前のターンに出さない理由がないからだ」

前のターンとはすなわち、ルークのブロッカーが1体も存在せず、絶好の攻撃のチャンスだった、第5ターン。

「確かに俺がカウンターを……『レガリア』を構えていたことをこのガキは察していただろうがな……いや、察していたからこそ、あのターンは攻撃に手を抜けるターンじゃない。あの時俺はライフ2つと追い込まれていた訳だが、ライフが残り2つなのはあのガキも変わらない。仕留め損なえば、追い込まれるのはやつのはうだ」

故に、攻めには全力を尽くさなければならぬ。中途半端な攻めは自分の首を絞めることになる、そういうターンだった。

事実、少年は『アポロヴルム』を出さなかったし、少年の攻撃は見事にカウンターされ、先ほども敗北一歩手前まで追い込まれた。

「切り札無しに勝てるほど俺は甘くねえ。『アポロヴルム』のない貴様に、俺は倒せない。お前は、勝てねえんだよ！」

これは、ハツタリなどではない。ルークのカードバトラーとしての勘が、この状況を冷静に分析して出した確固たる予測。

「そんな……」

「……スタートステップ」

そんなルークの態度を意に介すことなく、少年は第7ターンを開始した。

「いや、まだガキにも勝ち目はあるかもな？」

「え？」

「コアステップ」

「なんせ、まだこのターンのドローステップがある。ここで引けたら、もしかするかもしれないねえなあ？」

少年が、デッキに右手を添える。

「さあ引けよ！ 運命のドロ―ってやつさ！ テメエが『アポロヴルム』に選ばれたってんなら、引けねえことないと思うがよ。もしも引けねえんなら――」

「——ドローステップ」

添えた手で、1枚引く。

そして、引いたカードを確認する。

「ひ、引けたの……?」

アンジュが固唾を飲んで見守る中——少年は、引いたカードを手札に収めた。

「……リフレッシュステップ」

「ハッ！ どうやら引けなかったようだなあ！ 『選ばれた』なんて言葉が聞いて呆れる

ぜ！」

「アンタの間違いは2つある」

「——あ？」

少年は、なおも動じず、まっすぐルークを見据えていた。

ルークの言葉に心を動かされることもなく、しかし、その言葉に異を唱える。

「1つは、俺は勝つということ。俺を選んだ『アポロヴルム』のためにも……そして何よ

り、俺自身のためにも、こんなところで負けるわけにはいかない」

「テメエ何言って」

「そしてもう1つは……」

引いたカードを手札に収めたその手で、少年は、初手から持っていたカードを掴む。

「なっ、なんだと……!?!」

少年はそのカードを手に取り、自らの顔の前まで持つてくると、そのカードを翻した。「切り札はすでに、俺の手の中にある——」

少年の持つ、そのカードの名は——。

「——世界を照らせ。光を背負いし紅の龍よ! 『太陽神星龍アポロヴルム』! Lv 2で召喚!」

少年の背後、バトルフィールドでは何も無いはずのそこから炎が沸き上がる。

その炎を背に、這い上がる龍が1体。

その翼の一振りで背後の炎を消し去り、『太陽神星龍アポロヴルム』は、けたたましい咆哮を伴ってバトルフィールドに君臨した。

「あ、あれは! 確かにあそこに封印されてた遺跡のドラゴン……!?!」

「バカな! 貴様! 俺相手にキースピリットを出し惜しみしていたとでも言うのか!」

「出し惜しみじゃない。温存していたんだ。実際、前のターンに出していたら、お前の『ダークヴルム・レガリア』に破壊されていた」

「クソっ……このガキがあ!」

「バーストをセットしてアタックステップ! 初陣だ。『アポロヴルム』!」

少年が『アポロヴルム』のカードを横に倒し、そして『アポロヴルム』が天高く舞い上がる。

『アポロヴルム』Lv2のアタック時効果！ B Pの最も高い相手のスピリット1体を破壊する」

その標的は、ルークの場に1体しかいないスピリット——『ナイトライダー』。『アポロヴルム』は、その口に炎のエネルギーを貯めると、それを圧縮し、それを放った。放たれた紅の力は、目にもとまらぬ速さで駆け、次の瞬間には『ナイトライダー』を貫き、破壊していた。

「さらに、『アポロヴルム』のアタック時効果「解放」を發揮。アポロヴルムをLv3にアップさせ、回復させる」

「なんっ——!?!」

『アポロヴルム』の「解放」の効果。それは、トラッシュにあるコアを2つこのスピリットに戻すことで、『アポロヴルム』自身を回復させる効果。

通常、アタックしたスピリットはその瞬間に疲労状態になり、次のリフレッシュで回復しない限り次のアタックやブロックが出来ない。

しかし今、『アポロヴルム』は自らの効果により、アタックした瞬間に即座に回復した。すなわち、連続アタックが可能。

「ライフで受ける！」

天空からルークの目の前まで降り立った『アポロヴルム』はその背に浮かんでいる翡翠の刃を無数にルークへ向ける。

ルークの前に赤いバリアが張られるのとほぼ同時に、その刃がルークを襲い、バリア越しにその衝撃がルークのライフを砕く。

ルークの残りライフは1つ。そして、『アポロヴルム』は連続アタックが可能。

「再び羽ばたけ！ 『アポロヴルム』！」

【界放】の効果により、『アポロヴルム』は再び回復する。

ルークの最後のライフへ、『アポロヴルム』が襲い掛かる。

このライフを失えば、ルークは負ける——！

「舐めるなよクソガキがあ！」

ルークは、ライフを砕かれた痛みを無視して、手札からカードを2枚盤面に投げる。

「フラッシュタイミング！ マジック『ネクロリバーズ』を使用！ トラッシュユにあるコスト3以下の紫のスピリットをノーコストで召喚する！ 甦れ『シキツル』！」

フィールドの1部分に黒い靄が現れ、それが張れるのと同時に、そこに『シキツル』が現れる。

「さらにフラッシュタイミング！ マジック『シヴァアカタストロフィー』を使用！」

「なっ！ 2枚目!？」

「アポロヴルムをL V1までダウンだあ！」

ルークがその場で右手を振るうと、その軌跡を追うように紫の衝撃波が生まれる。それが空を駆ける『アポロヴルム』をとらえ、『アポロヴルム』がそれを受けた時、その衝撃でバトルフィールドに墜落する。

本来、ルークがマジックを使つたなら、その次にマジックを使う権利は少年に移る。しかし、少年に動く気配はない。

「ハッ！ さっきのカウンターで万策尽きたか！ 何もねえならぶつ潰れるお！ フラッシュタイミング！」

ルークが、その手札にある『ダークヴルム・レガリア』のカードを手取る。

今、ルークの使えるコアは、シキツルに乗るソウルコア1つしかない。【煌臨】を使うためにはソウルコアをトラッシュに送る必要があり、使えるコアがソウルコアしかない現状では、本来【煌臨】は出来ない。

しかし、『ダークヴルム・レガリア』は違う。このスピリットには、コスト3または4のスピリットに【煌臨】するときに、ソウルコアを使わずに【煌臨】することが出来る効果がある。

すなわち、ルークの切り札は、いまだ健在。

「再び我が戦場に【煌臨】せよ！ 『魔界皇龍ダークヴルム・レガリア』 あ！」

墜落し、バトルフィールドに横たわっている『アポロヴルム』の側に、その影は現れた。

墜落時の粉塵を振り払い、『ダークヴルム・レガリア』がその瞳で『アポロヴルム』をとらえる。

「煌臨時効果……テメエの攻撃はここで終わりだあ！」

杖を持ったその腕は、すでに振り上げられていた。次の瞬間、『レガリア』の杖が『アポロヴルム』の肩を貫き、『アポロヴルム』は瞬く間に弾け飛んだ。それは爆発を生み、爆風がフィールドを包む。『レガリア』はその爆発に巻き込まれることなく、ルークの傍まで後退した。

前のターン、少年のスピリットを全滅させた『レガリア』と『シヴァカタストロフィー』のコンボが再び決まった。

少年の『アポロヴルム』にこれを凌ぐ手立てはなかった。

「なーにが『負けるわけにはいかない』だ」

爆風が両者の視界を遮っているが、構わずルークは語り続ける。

「『アポロヴルム』を隠し持っていることには少しビビったが、それだけだ。結局俺の『レガリア』には敵わない。テメエの負けだクソガキ」

その爆風の向こう。

「いいや——」

そこに、二対の瞳が輝く。

「——俺の勝ちだ」

『アポロヴルム』の咆哮が、その爆風を吹き飛ばした。

「な……はあ？」

破壊されたはずの『アポロヴルム』はしかし、未だフィールドに健在だった。

しかも。

「レベル……3だと……？ 何が起こっていやがる……？ 『シヴァカタストロフィー』

は？ 俺の『レガリア』は!？」

その答えは、少年の盤面にあった。

アタック前に伏せたバースト。それが、翻っていたのだ。

「マジック『ライジングフレイム』のバースト効果だ。破壊された系統：『星竜』を持つ

スピリットを、1コスト払って召喚する」

「バカな……？ 破壊時バースト……？ 俺の『レガリア』を読んだのか？ 俺の場に煌臨

元は無かったって言うのに……！ 全部……全部テメエの掌の上だったって言うのか

!？」

「再び行け！ 『アポロヴルム』！」

その声に応え、『アポロヴルム』が地面を蹴る。

地面とすれすれを飛行し、一直線にむかう、その先は——。

『『アポロヴルム』のアタック時効果。『ダークヴルム・レガリア』を破壊する』

首根つこを掴まんとする『アポロヴルム』の手を、『レガリア』は杖で受け止めた。

だが、それ程度で勢いが止まるわけもなく、そのまま上空へと押し上げられる。

ある程度押し上げられてから、『レガリア』がその腕を払う。そしてそのままその口に黒い雷のエネルギーを溜める。それを見てか否かか、『アポロヴルム』もまたその口に赤い炎のエネルギーを溜める。

それをお互いに放ったのは同時。お互いのエネルギーがつばぜり合い、反発を起こして火花が起こる。それらがお互い消滅して爆発したのは、数秒後のことだった。

爆風に覆われ、『アポロヴルム』を見失った『レガリア』は、視線をあちこちへと向ける。だが、その甲斐虚しく、『レガリア』の背後から無数の翡翠の刃が突き刺さる。

翼を切られ、その場から落下した『レガリア』は奇しくも爆風から解放された。が、もはや彼の龍に抵抗する力はない。目の前に現れた『アポロヴルム』のブレスを、『レガリア』は無抵抗に受けた。

炎を浴びながら吹き飛ばされる。下へ、下へと押し込まれ——ルークの姿とすれ違

う。

それは、ルークの背後で爆発した。『レガリア』の断末魔が耳に届くが、ルークは振り返れなかった。

すでに目の前に——『アポロヴルム』がいる！

「そしてこれがメインのアタックだ」

その背後にはすでに無数の翡翠の刃が構えられていた。

フィールドにカードはなく、残されたコアはソウルコア1つのみ。

この状況で、ルークがこの攻撃を防ぐ手段は、ない。

「ああそうかよ……」

それでも、ルークは逃げるつもりはなかった。

その場で、両腕を大きく広げる。

この一撃から、敗北から、いやバトルから、決して逃げることはしない。

それがルークの、バトルスピリッツに賭けてきた誇りだった。

「行け！ 『アポロヴルム』！」

「来い！ ライフで受ける！」

その刃が、赤いバリアへ届き、ルークの最後のライフは砕かれた。

決着く少年の名はく

「俺の勝ちだ」

遺跡の地下。アポロ・ヴルムが封印されていた部屋に、ルークは横たわっている。

「約束通り、彼女からは手を引いてもらうぞ」

少年は、そのルークを見下ろして、そばに立っていた。

ルークは、少年に目を合わせず立ち上がり、一言。

「……ああ、わかってる」

それだけを呟いて、服をはたいて埃を落とす。

その様子を見て、思わずキョトンと、少年は抜けた表情を示した。

「……随分と素直なんだな」

「あ？ お前、俺が賭けを守る確証も無しにバトルを仕掛けたのか？」

「まあな。信じてはいたが、確証は無かったよ」

「……チツ！」

舌打ちをして、直後、ルークが少年の胸ぐらを掴む。

特に動揺を示さない少年に、ルークは一方的に怒りを浴びせた。

「いいか！ 良く聞けクソガキ！ お前の世界じゃどうだったか知らねえがな！ この世界でのバトスピは『知恵の証』だ！ 負けたやつ言葉は愚者の遠吠え……なんの価値もねえんだよ！」

その怒りをただ受け止めて、少年が返したのは、一言だけだった。

「だとしても、アンタのカードバトラーとしての誇りに、感謝するよ」

柔らかい、子供をあやすような笑み。その見た目には似つかわしくない余裕に、ルークは呆れて胸ぐらを掴んだ手を放した。

「……ルークだ」

「……？ 何だ？」

「俺は『黒龍使いのルーク』だ。お前の名前はなんだ？」

「ああ、そういうことか……」

名前を問われた少年は、少しうつむいて、右手を見た。

そこには『太陽神星龍アポロヴルム』のカードが握られている。

まるで、自分の存在を確かめるように、じっくりと見ていた。

少年自身、自分の身に何が起こっているのか良く分かっていなかった。下手に名乗るのも良くないのかもしれない。異世界人である自分が、この世界にどれだけの悪影響をもたらすか分かったものではない。混乱を避けるなら、名乗らずにここから去るのも良

いだろう。

だが。

「――」

そこまで考えて、少年は自分の世界のことを思い出す。

そして決心する。自分は元の世界に帰らないといけないと。

そしてそのためには、隠れている訳にはいかないと。

この世界の人に、どれだけ迷惑をかけるか分からない。しかし、それでも。

世界を巡る覚悟が、決まった。

「馬神 弾。異世界から来たカードバトラーだ」

「そうか、バシン ダンか……」

ルークはそれだけ確認すると、少年に背を向けて歩き出した。

「っ。おい」

「ヘルエスタの捜索隊が恐らくすぐ近くまで来てる。捕まりたくないんでな。さっさと
とんずらさせてもらうぜ」

「……」

「バシン ダン……ああ、覚えてたぜ、その名前。今日のところは諦めるが、貴様も覚えて
いろ。『アポロヴルム』は、必ず俺が手に入れる……い」

「……ああ、覚えておくよ、ルーク。あんたほどのカードバトラー、そうそう忘れることはないさ」

「ハッ！ その女、運べるようならこの部屋から出してあげ。俺を追ってる捜索隊に渡せば、どこよりも安全だろうよ。じゃあな！」

そこまで言ってから、ルークはこの場から走り去った。

すぐに見えなくなつて、少年「馬神 弾」は、壁にもたれて座っているアンジュへと駆け寄つた。

とても弱つていた。だが、まだ意識はある。

「おいアンタ。大丈夫か」

「ハハ……ちよつと大丈夫じゃないかも……いてて」

腹部を押さえながら立ち上がろうとするアンジュの肩を、少年が掴んで静止する。

「ルークの言うことが本当なら、もうすぐ捜索隊が来るらしい。アンタの仲間なんだろう？ なら仲間が来るまでは安静にした方がいい」

「ちよつと……そういう訳にもいかなくてさ……」

アンジュは、ルークが走り去つていった通路の方へ視線を向けた。

「ここは、隠し部屋なんだ……。見つけるのに相当、時間がかかると思う……。あんまりここに止まつてたら、それこそ私の傷が手遅れになるかも……」

「そうか」

それを聞いて、弾は無言で彼女に手を差し伸べた。

「……へ？」

「肩を貸すよ」

「いや、良いよ。ルークから助けてもらってそこまでしてもらおう訳には……異世界人とか言ってたし、君も君で何かやらんきやいけないことがあるんじゃないの？」

「ああ。だが、アンタを見捨てないといけないほど、急ぎでもないさ」

いつまで経っても手を取られなかった弾は、有無を言わさぬと言った様子で、腕を彼女の肩に回して、彼女を立ち上げさせた。

「……ありがとう」

2人はゆつくり、1歩ずつ、歩き出した。

「そういえば、ええつと……馬神 弾くん……だっけ？」

「ダンでいいよ。アンタの方が年上だろ？」

「じゃあ私もアンジュでいいよ。アンジュ・カトリーナ。よろしくね」

「ああ。よろしく、アンジュ」

第2話 「試されるダン 煌星第一使徒アスガルディアの

猛攻」

休息～旅の前に～

薄く心地のいいまどろみの中、自分の意識が覚醒していくことを自覚した。

普段目覚めの悪い彼女にとっては、珍しく気分がいい。軽くなつた瞼を持ち上げて、最初に目に入ったのは——知らない白い天井だった。

「はっ!？」

布団をどけて、アンジュ・カトリーナは跳ね起きた。

つかんだ布団も、心当たりがない。なんなら、今自分が身に着けている衣服も初めて見る。

ここはどこだ。いまはいつか。自分に何があつたのか。状況がわからないまま混乱する寝起きの頭に、最初に入ってきた刺激は。

「おはよう、アンジュ」

馬神 ダンの声だった。

咄嗟に声の方へ振り向くと、彼はこちらを向いてはいなかった。

椅子に座り、備え付けのテーブルで、バトル・スピリッツのカードを広げている。デッキの練り直し……というよりもこれは。

「……何してるの？」

「1人回しだ」

「……なんで？」

「まだこのデツキと出会って間もないからな。回すのに早く慣れたいんだ」

「いや別にここじゃなくても良くない!？」

あまりに素つ頓狂な彼の言葉に、思わず体に力が入って、そして微かな痛みがアンジュの全身を走る。

その痛みで、思い出した。

気を失う直前、盗賊に誘拐され、暴行を食らい、ドラゴンの封印を解かされ、そして。
(そうだ、私は——)

——目の前の少年に、助けられたんだ。

色々と思ひ出そうとしているうちに、いつの間にか頭を抱えていた。そのまま、カードを弄る彼に話しかける。

「……ハイハイ」

「ヘルエスタ城の医務室、つて言えば伝わるか？ 俺も詳しくはわからない」

「今は、いつ？」

「日付はわからないけど、アンタはあれから丸三日寝てた。今はちようど昼過ぎくらいかな」

「ルークは？」

「逃げたよ。この城の人たちが搜索してるみたいだけど、見失ったらしい」

「そっか……」

冷静で分かりやすい回答になんだか調子を狂う感覚を感じるが、自分の体調や、ここがヘルエスタ城——つまり、この国の中心地であることを考えると、とりあえずは「助かった」ということだろうか。

顔をあげると、ダンはテーブルに広げていたカードをすでに片付けていて、彼女のほうを向いていた。

だから、ふと目が合った。

合ってしまった。

「あー、えつと、馬神 ダンくん、だっけ？」

「ダンでいいよ」

「えつと、私の名前、知ってたんだね？」

「氣を失う前にアンタが教えてくれた。『アンジユ』と呼んでほしいって言われたからこう呼んだが、嫌だったか？」

「え？ あーいや別に」

「そっか」

……氣まずい。

助けてくれたとはいえ、初対面の人間と二人きり、しかも相手は男で、リゼと同じかそれよりも年齢が低そうな子供。何を話したらいいのか全くわからない。

（どうしよ……急すぎて会話デツキなんてないんだけど……。でもここは年上の私がリードするべきだよなあ。ああほらこの子の表情やばいって、詰まんなそうにしてるもん。もしかして私起きない方が良かった？ そのまま一人回してたかったよね……。じゃなくて！）

故郷でも尋ねてみようか、そう思い立った時、ハッキリとしない記憶の中、彼とルークの会話、思い出す。

——このドラゴンに呼ばれて来た。

——俺は別の世界からやってきた。

「ねえ、ダン」

混乱した思考が、切り替わった。

この少年には、聞かなければならないことがたくさんある。

ドラゴンに呼ばれたとはどういうことか、別の世界とはなにか、そもそも何者なのか。気まづいとか言ってる場合じゃない。

人知れず封印されていたドラゴンに、異世界の少年。明らかに異常事態だ。錬金術師として、放っておくわけにはいかない。

「君はいつたい——」

ウィーンと、自動ドアが開く音で会話が遮られた。

ダンとアンジュが二人してドアのほうを向くと。

「——アンジュ！」

「リゼ!? ちょ、ちょっとまって! ぼふっ!」

次の瞬間には、涙目のリゼが、アンジュに抱き着いていた。

「アンジュのバカ!」

リゼが放った小荷物を、ダンが落ちる前に何とか掴む。そんな様子に目もくれず、リゼはただ、アンジュを強く、強く抱きしめる。

もう、離れないように。

もう、なくさないように。

もう、後悔しないように。

「ずっと起きないから、もう会えないかと……!」

「り、リゼ! 痛い! 落ち着いて! 私まだ怪我が治ってイッタア!」

「なんでアンジュはいつもいつも……私は、ずっとアンジュと一緒にいたいだけなのに……!」

「わかった! 私が悪かった! ずっと一緒にいるから頼むから力緩めてウギヤアアア!」

ダンは、掴んだ小荷物をそっとテーブルに置くと、そのまま静かに部屋を後にした。



——3日前。

アンジュを助けたダンは、リゼや戌亥、そして捜索隊の人々と合流した後、ヘルエスタ城の地下にある牢屋の中にいた。

右手にのみ手錠がかけられ、それは壁に打ち付けられた杭へと繋がっている。デッキはとりあげられているが、当の本人はとも落ち着いている。

鉄格子の向こうには、男が一人、椅子に腰かけていた。

「悪いな。こんな汚い場所に押し込んじゃって。本当なら事件を解決してくれた恩人に

は、高級ホテルにでも案内してやりたいところなんだがな」

「……わかつてる。ヘルエスタ王国からしたら、俺を信用出来ないのは理解してるつもりだ」

「ハハっ。随分とお利口なこつて」

男は、このヘルエスタ王国の第1皇子。リゼの兄だ。

現状、馬身ダンの身柄を任せられている。

「まあそれでも一応話すが、俺たちヘルエスタ王国……というより、ヘルエスタ家はお前を信用しきれていない。妹の親友であるアンジュ・カトリーナを追いかけた結果、現場にいたのはボロボロになって気絶したアンジュとお前。状況証拠的にはお前は怪しい。そこでお前の証言を聞いたら、『黒龍使いのルークから彼女を救った』って言いやる」

確かに、彼の遺跡荒らしがこの国へ向かっていてという情報はあるが、それ自体は有名な話だ。自分の罪を擦り付けるための言い訳にも聞こえる。

「だが、俺はアンタらに抵抗しなかった。人知れず彼女を誘拐してあの瞬間までみつからなかった人間が、あんなタイミングで捕まりにくい意味はない」

「ああ。だからお前の言葉にも耳を貸そうとお前に出身から聞いていこうとしたわけだが」

返ってきた答えが「異世界人」ときた。

「そんな世迷言をいうやつを、証拠もなしに信用は出来ないわけだ。せめて前の世界の身分証明でもあれば少しはマシだったが」

「俺の手持ちはあのデッキだけだ。あのデッキも前の世界から持ってきたものじゃない」

「なんで手ぶらで異世界に来るかねえ」

「俺にも分からない。気づいたらこうなっていたんだ」

「ドラゴンと呼ばれたって話は？」

「俺をこの世界に呼んだのは確かに『アポロ・ヴルム』だ。だがその理由も、そもそも俺が『何故異世界を渡れたのか』も、全く分からない」

「ダンは嘘をついていない、と、彼は思っている。嘘ならもつと論理的に現状を説明できるものを用意するだろう。少なくとも「自分は異世界人だ」というのが嘘ならば、そんなくだらない嘘をつくような馬鹿には見えないのだ。」

「だが、話があまりにも突拍子もない。ダンが誠実な男だろうというのと、話すことの胡散臭さは話が別だ。」

「彼はダンのことを信用している。だが、その信用を他人に説明できるほどの材料がない。」

「一国の王子としては、とても悩ましいことだった。」

「なあ。なんかこう、もうちょっとないか？ さすがにこの話じゃ、俺が納得しても他の奴が納得しないっていうかさあ」

「分かってる。だが、俺が話せることは、もう話し切ったと思う……うん？」

「あ？ なんだ？」

不意に、足音が響いているのに、2人は気が付いた。

音の方を向くと、近づいてきたのは。

「り、リゼ!？」

焦った様子で、彼が立ち上がる。

「お疲れ様です、お兄様」

リゼは、険しい表情で、自らの兄を見上げていた。

「お前、学校は!？」 今日には普通に授業あるだろ？」

「休みました。アンジュがこんな時に、学業に専念する余裕は、私にはありません」

「は、はあ、そうか」

まったく、と眩きながら、彼はまた椅子に腰かけた。ダンから見ると感じは、とてもリラックスしているように見える。家族と……妹と話しているからだろう。この様子を見る限りだと、仲睦まじい兄妹に見える。

だがリゼの方は、まだ機嫌が悪そうだった。

「……で、なんの用だ？」

「医務室から連絡がありました。アンジュの意識レベルが規定値を超えたそうです」

「お、マジか！ 思ってたより早かったな！」

「アンジュが目覚めたのか？」

その会話に、ダンが入り込んだ。

その声に、リゼがダンの方を向き直って答えた。

「いえ……ただ、もうすぐ目覚めそう、という感じですよ。完全に峠は越えました」

「そうか……それは良かった」

「……」

ダンの微笑む様子を見て、リゼはまた、兄の方へ向き直る。

兄が椅子に座ったことで、今度は見下ろして。

「それで、アンジュの記憶の一部解析が完了しました」

「はあ!? アイツの記憶覗いたのか!？」

「はい。あの意識レベルになったなら、うちで雇っている錬金術師なら余裕でした」

「い、いや！ そうじゃないだろ！ なんがあるだろう、ほら……プライバシーとかさ

！」

「彼の……馬神ダンのことは、我々よりも彼女の方が知っています。彼の信憑性を確か

めるためにも必要だと判断しました必要以上は解析していません」

「いや、そういう問題じゃあ……ああ、もういいや。で、何か分かったのか？」

「馬神ダンの言うことは全て本当でした」

「おお、そいつは良かった。この面倒な仕事も長く続かなそうで何よりだ」

兄はリゼから目を離して、ダンの方を向いて、思いつきり伸びをしてみせた。

「ふう……まあ本当だったつつつても問題は山積みだわなあ。こいつには戸籍はねえし、異世界つてのも良く分かんねえし」

そう言つて椅子の背もたれに寄りかかる兄に、リゼが1歩近づいた。

「うん？　なんだ？　まだ何かあるのかリゼ？」

とてもリラックスした様子で、手元にあつたコップから何かを飲み始める。

そして。

「馬神ダンを、ここから出したいんだけど」

盛大にぶちまけた。

香りからして、どうやらコーヒーのようだ。

「ゲホ、ゲホ……いい、いや！　ちよつと待て！　お前覗いた記憶でコイツを出す気か？

公的書類にそんなの書けるわけないだろ！」

「責任なら私に取ります。すでに各方面に話は通してもいますし」

「お前なあ！ あんまり身勝手にするにもいい加減に——！」

「兄さん！」

「つ……………」

そのあまりの気迫で見下ろしてくる目に、兄の頬に冷や汗が流れる。

普段は言いつけを守る礼儀正しい妹が、ここが牢屋であるとはいえ、他人の前で口調が砕けた。

しかも、その表情は、今までに見たこともないほどに真剣で。

「私、親友を助けてくれた人を牢屋に叩き込んでおくような皇女に、なりたくないんだけど」

というか何より、〃女は怒らせると怖い〃のだ。

ここまでできて初めて彼は、リゼが心底怒っていることに気が付いた。

「……………はあ。分かった分かった。好きなどころに連れてけ」

「うん！ ありがとう！ 兄さん！」

急に満面な笑顔を見せたりゼは、そのまま急ぎ足で牢屋の扉に向かい、懐から鍵を取り出して扉を開ける。

「ああ、女って怖え……………」

「なんか言った？」

「いいや。なんでもない」

「そう。……あ、手錠開いた」

自分の妹が着実に大人になっていることを、思わぬ形で痛感した兄だった。



「ごめんね。色々騒がしくて」

「いや。事情はなんとなく分かってる。謝ることはないさ」

牢屋から出たダンは、リゼに案内されるままに、城の廊下を歩いていった。

「それでも、さ。会った時の約束、時間かかっちゃった」

2人が出会ったとき、つまり、ダンがアンジュを連れて、遺跡から出た時のことだった。

遺跡から出た直後に、武装した搜索隊に囲まれ、半ば脅すような形でアンジュを彼らに渡したことをダンは思い出していた。

そのまま手荒に拘束しようとした搜索隊を止めたのは、リゼの静止の声だった。

「異世界人だっという俺の話を通じてくれただけでも有難かつたさ。自分で言うのもなんだけど、俺が信用できないのは当たり前前の状況だったんだ」

「そんなことない！」

リゼがダンと交わした約束。それは「必ず自由にする」というものだった。

「あの時アンジュは重症だったけど、まだ意識はあった。だから、アンジュがあなたの肩を借りて歩いていたのは、アンジュがあなたを信じてたから！」

歩いているダンの前に出て、リゼがダンと向かい合う。

「それに、さ。アンジュって結構コミュ障っていうか……あんま人のこと頼らないっていうかさ……そんなアンジュが頼った人だし、悪い人なわけないって思ってた。何より、アンジュが目覚めた時に、『命の恩人を牢屋に閉じ込めてる』なんて、言いたくないし！」

「……そうか」

向かい合ったリゼに、ダンが手を差し出した。

「え？」

「俺は馬神ダン。異世界のカードバトラーだ」

ああ、そういう。と呟いて、彼女もまた手を出して、その手を掴んだ。

「私はリゼ・ヘルエスタ。ヘルエスタ王国の第二皇女。ここには家族もいるから、性じゃなくて名前で呼んで欲しいな」

「じゃあ俺もダンでいいよ。よろしく、リゼ」

「うん！ よろしく！ ダンくん！」



というのが3日前。

この3日間は、リゼが学校に行っている時間帯にアンジュの様子を見て、リゼが帰ってきたらヘルエスタ王国のことを聞いて、時間は流れていった。

先ほどの出来事は、リゼが帰ってきて、アンジュのお見舞いにやってきた時にアンジュが起きていて……というところ。

2人が親友だということも聞いていたダンは、彼女たちの時間のために何も言うことなく部屋から出て、どうやって時間を潰そうかと考えていたところだった。

「まあ、そろそろここは出ないとか」

アンジュも目を覚まし、ヘルエスタ王国のこと——この世界のこともなんとなく把握した。『アポロヴルム』が何故ダンを呼んだのかは未だに謎だし、元の世界に帰る方法も検討がつかないが、ここにずっとお世話になるわけにもいかない。

傾合いを見て、この城から出てこの世界を旅しようとは考えていた。

その傾合いは、おそらく今だ。

（とはいえ、焦っても仕方ない、か。この世界のお金とかもないし、あまり無計画に一人旅も出来ないだろう）

今後の方針を考えつつ、3日前に与えられた自分の部屋へと歩いていき。

「……？」

少年が、廊下の道を塞ぐように立っていた。

年はダンよりも1つか2つほど幼いが、その目は、確かにダンを見つめ——いや、敵視していた。

「誰だ」

敵意に負けず、ダンもまた敵意で返した。

「ヘルエスタ王国の第三皇子。リゼお姉さまの弟です」

「……そうか」

リゼの弟と聞いて、少し警戒心を解く。

とはいえ、むこうは敵意を収める様子はないようだった。

「で、その第三皇子が何の用だ」

「……お姉さまが、あなたの旅に同行しようとしているのは、知っていますか」

「……初耳だ」

第三皇子は、語った。

曰く、戸籍もない少年を一人で出歩かせるわけにはいかない。

曰く、アンジュを助けてくれた恩を、しっかり返したい。

曰く、自らもまた、王族の人間として世界を巡り、この目で国を見たい。

「アンジュさんも一緒に連れていくそうです。公には、第二皇女の旅行に、付き人兼護衛としてあなたとアンジュさんを連れていく形になります」

「そうか……」

そこまでしなくても、という言葉は飲み込んだ。

自分を牢屋から出そうとした時の彼女の目、あれは1度決めたら行っても聞かないタイプの目なのを、ダンには知っていた。

実際、行く当てもなければ一文無しなわけで、皇女様が国を案内してくれるのなら、こんなに頼もしいことはないだろう。

ダンとしては、快くその提案を受けたかった。

だが。

「それで、その敵意は結局なんだ」

この弟は、納得いってなさそうだった。

「僕と、バトルしてください」

「……ふ、なるほど」

その言葉を聞いて、ダンは懐からデツキを取り出した。

「俺のことが信用できないということか」

「当たり前です。昨日今日出会ったばかりの男に、お姉さまを任せる訳にはいかない」

「俺の言うことは嘘じゃない、ということと話が通つたと聞いたんだがな」

「そうじゃありません。あなたの身元の問題じゃない。あなたの力の問題だ！」

第三皇子の手にもすでに、デツキが握られている。

「あの『黒龍使いのルーク』を退けたなどという話、僕はまだ信じていない！ 弱いカードバトラーなら、姉さんを任せる訳にはいかない！ あなたの力、ここで試させてもらいます！」

「良いだろう。来い——！」

「ゲートオープン！ 解放！」

試される力～侵食されゆく銀世界～

「先攻はお譲りします」

「なら行くぞ。スタートステップ」

先攻は、ダン。

「ドローステップ。メインステップ。マジック『シャーマニックドロー』を使用。デッキから2枚ドロー。その後、デッキから3枚をオープン」

捲られたカードは『太陽皇ヘリオスファイア・ドラゴン』『ゴッドシーカー・アルファレジオン』『クエーサーレイン』の3枚。

「系統『界渡』／『化身』を持つスピリットカード1枚を手札に加える。『ヘリオスファイア・ドラゴン』を手札へ。ターンエンド」

『ヘリオスファイア・ドラゴン』……ルークとのバトルで使っていましたね」
乾いた風が、2人の髪を撫でた。

手札を見ていたダンが、顔をあげる。

「なんだ、知っているのか」

「あなたの証言の真偽を確かめるために、アンジュさんの記憶を除いたことは知ってい

ますよね。その時に、あなたがバトルしている様子も確認できました」

「そうか。ならルークに勝ったというのも、信用してくれても良いんじゃないか？」

「バトスピの実力は、そんな簡単な話ではありません」

その敵意は、未だにダンに向けられている。

「勝負は時の運……どれだけ実力があっても、引きの噛み合いで負けることなんて日常茶飯事です。僕が知りたいのは、『勝利』という結果ではなく、『強さ』という過程です」

「なるほどな……お前のターンだ」

「ええ。スタートステップ」

第三皇子の第2ターン。



アンジュ「あれ？　そういえばダンは？」

リゼ「へ？　ダンくんいたの？」

アンジュ「いや回り見なさすぎでしょ……気使わせちゃったかな」

リゼ「ダンくん、ここで何してたの？」

アンジュ「一人回しだつてさ」

リゼ「ええ……」

アンジュ「なんで私をそんな目で見るの!? おかしくない!」

◇◇◇◇◇

「メインステップ。ネクサス『侵食されゆく銀世界』を配置!」

フィールドに、吹雪が舞う。

その雪は瞬く間にフィールドを埋め尽くし、正しく『銀世界』へと姿を変えた。

「白のネクサスか」

「これのみで、僕のターンは終了します。これが、あなたを試すフィールドです」

「なるほど……このネクサスがキーカードということか」

キーカード。すなわち、デッキの中心となつているカード。第三皇子は、この『侵食されゆく銀世界』のカードを心臓としてデッキを組んでいるということ。

すでにこのフィールドは、第三皇子の独壇場。

主導権は彼が握つた。あとは、ダンがその主導権を奪えるのか、そういう駆け引きが始まる。

ダンの第3ターン。

「スタートステップ」

コアステップ、ドローステップ、リフレッシュステップとステップを重ね、ダンは自分の手札を確認する。

今、第三皇子の場には『侵食されゆく銀世界』が1つのみ。コアは、それを配置するために使い切っている。これからのターンはどうなるか分からないが、少なくともこのターンは完全な無防備。

今攻めない選択肢は、ない。

「メインステップ。『レイニードル（R）』『煌星竜コメットヴルム』を共にLv1で召喚」
赤いシンボルが2つ、現れ砕かれる。出現したのは、空中を這う蒼い蛇……いや竜。そして、黄金の身に白銀のブースターを背負ったドラゴン。

『レイニードル』はその場に浮かび、『コメットヴルム』はその『ヴルム』独特の瞳で敵を見据える。

「これは……『レイニードル』の効果ですか」

本来、『レイニードル』と『コメットヴルム』は、今ダンの持つコアでは同時に召喚出来ない。このターンに使えるダンのコア5個では、2体を召喚するコストが足りないからだ。

2体のスピリットのコストはそれぞれ1と4。そしてバトルスピリッツでは、召喚したスピリットにコアを1つ置かなければならない。

例えば、『レイニードル』から召喚したなら、召喚コストを1コア払い、『レイニードル』に1コアを乗せる。これでコアを2つ使い残り3つ。次に、バトルスピでは、フィールドの同じ色のカードの数だけ使うカードのコストを軽減するルールがある。赤のスピリット『コメットヴルム』を召喚する時のコストは4だが、場にすでに赤のカード『レイニードル』があるので、コストが1軽減されて3コストになる。なので、残り3個のコアを使ってこのコストを払う。

すると、残りのコアは0個になる。バトルスピリッツでは、召喚したスピリットにコアを1つ置かなければならないので、つまりコアが1つ足りないのだ。

これは、召喚の順番が逆だったとしても全く同じで、コアは1個足りなくなる。

しかし、ここで『レイニードル』効果が生きてくる。

『レイニードル』には場にある間、カード名に『ヴルム』を含むスピリットを召喚する瞬間にだけ、そのシンボルを1つ増やすことが出来る。

シンボルは、スピリットがライフを攻撃するときの攻撃力であるのと同時に、別の用途がある。

実は、「フィールドの同じ色のカードの数だけ使うカードのコストを軽減するルール」

における、「同じ色のカードの数」とは、詳しく言うと「同じ色のシンボルの数」のことなのだ。

すなわち、シンボルが増えると、コストがより多く軽減される。

『レイニードル』の増えたシンボルを参照して『ヴルム』である『コメットヴルム』を召喚したんですね。それでちょうどコアを使い切る」

カード裁きが上手いと、第三皇子がまた強く気を張った。

3日前に初めて触ったデツキとは思えないほどに、使いこなしている。もはや「慣れないデツキ」という不利はダンにはない。

「そこまで工夫してスピリットを並べたということは——」

「——ああ。攻めさせてもらうぞ。アタックステップ！」

ステップ以降を宣言し、場に出したスピリットに手をかける。

——その時。

「っ!？」

急に、バトルフィールドの吹雪が激しくなる。

これは、第三皇子が配置した『侵食されゆく銀世界』の吹雪。

それが荒れるということは、これは——。

「お前のネクサスか——」

「ネクサス『侵食されゆく銀世界』の持つ『相手のアタックステップ開始時』の効果です。僕のトラッシュにあるコアを全てリザーブに戻す！」

「——っ！」

その効果を聞いて、自分のスピリットにかけようとしていたダン手が一瞬止まる。使ったはずのコアが、全て戻った。すなわち、トラッシュにあったはずの彼の5つのコアが、再び使用可能になった。

つまり。

「……カウンターか」

「無防備に見えたなら残念でしたね。むしろ、攻撃を迎え撃つ態勢は万全だ。悪いけどあなたの攻撃は簡単に「行け！ 『コメットヴルム』！」——何?！」

『『コメットヴルム』のアタック時効果！ デッキの上から3枚オープンし、その中の系統：『星竜』を持つスピリットカードを手札に加える！』

捲られたのは、『ミラージユ・ワイバーン』『スターリードロー』『太陽皇ヘリオスファイア・ドラゴン』

の3枚。ダンはそのうち、『ミラージユ・ワイバーン』を手札に加え、それ以外を破棄する。

「そしてこれがメインのアタック！」

「…………っ!？」

(カウンターの存在に気付いたにも関わらず、ノータイムでアタックしてきた!? 『コメットヴルム』での手札補充が狙いか!?)

その背負ったブースターを吹かせ、『コメットヴルム』が第三皇子へ突撃する。

急激に迫る竜の姿に。

(…………いや!?)

第三皇子の腕は、咄嗟に動いていた。

「フラッシュタイミング! 『サンダー・Z・ヒポグリフォ』の『アクセル』を發揮! BP5000以下のスピリット2体を破壊する!」

カードを目の前にかざした時、どこからともなく青い雷がフィールドに走り、それが一つの獣の姿を描く。

「【アクセル】…………」

雷が輪郭を描いたのみの透ける『サンダー・Z・ヒポグリフォ』が吠え、そして消える。否、高速で動き、全ての者の視界から消える。

直後。

「BP3000の『コメットヴルム』及びBP1000の『レイニードル』を破壊する!」
青の雷が2体の星竜を貫き、再び透けた『サンダー・Z・ヒポグリフォ』が現れた時、

その2体は破壊された。

「【アクセル】を發揮したカードはその後、公開され手元に置かれます」

役目を終えた『サンダー・Z・ヒポグリフォ』は第三皇子の元へと駆ける。その雷が、その手に持つ『サンダー・Z・ヒポグリフォ』のカードに収まった後に、第三皇子は、そのカードを盤面に置いた。

「ターンエンドだ」

（何が狙いだ……馬神ダン！）

警戒と敵意に、眉間にしわを寄せた第三皇子が見たのは、掴みどころのない無表情のダンの姿だけだった。



リゼ「出歩いて本当に大丈夫なの？」

アンジュ「まあね。さすがに走ったりとかはまずいだろうけど、歩くくらいなら問題ないでしょ」

リゼ「そっか。それにしてもダンくんどこ行っただんらうね」

アンジュ「そんな遠くには行ってないとは思うけど……ていうか、ダンと親しくなっ

てたの？」

リゼ「親しくっていうか、まあアンジュの命の恩人だしね。私が出れることはやってあげようかなって」

アンジュ「へえ……」

リゼ「え、何その顔」

アンジュ「べつにつに？　ただあんなに小っちゃかったりゼも、もう春が来たんだなあと思うとなんかエモくて……」

リゼ「いや！　そんなんじゃないから！」

アンジュ「異世界人相手じゃ苦労もあるだろうけど、がんばり！」

リゼ「も〜！　話を聞け〜！」



第三皇子の第4ターン。

「メインステップ！　手元より『サンダー・Z・ヒポグリフォ』をLv2で召喚！」

赤のシンボルが現れ砕ける。蒼の体毛に、白いたてがみを携えたヒポグリフォの姿。その驚の口から、甲高い鳴き声を上げて、フィールドに現れる。

「アタックスステップ！ 『サンダー・Z・ヒポグリフオ』でアタック！」

その足で大地を蹴り、『サンダー・Z・ヒポグリフオ』が飛翔する。

このスピリットにはアタック時、BP5000以下の相手スピリットを破壊しつつ、デッキから1枚ドロウする効果がある。

今回、ダンの中にはスピリットがいないため破壊効果は不発に終わるが、ドロウ効果は有効。第三皇子はその効果でカードを1枚ドロウする。

「ライフで受ける！」

飛翔した『サンダー・Z・ヒポグリフオ』がダンを捉えると、そのくちばしの前に青い雷球を生成した。

ダンの目の前に赤いバリアが展開され、『サンダー・Z・ヒポグリフオ』はそのバリアに雷球を叩きつける。

「っ——！」

衝撃が、ダンのバトルアーマーのライフを砕いた。

「ターンエンドです」

ダンのライフは、残り4つ。

衝撃で体制を崩したダンがそれを立て直すのを見て、第三皇子は次のプランを考えていく。

(とりあえず、相手のライフを4つに追い込むのには成功したけど……もしも僕の読み通りなら、次もカウンターを気にせず……いや、カウンターを受けるために攻撃してくるはずだ)

だとすれば、ダンのアタックには必ず、意味がある、勝利へとつながる布石が隠れているはずなのだ。第三皇子は、それを見逃すわけにはいかない。

(バトルの主導権は完全に握った。けれど馬神ダン——彼が企んでいることを暴かなければ、一瞬の隙に僕の戦術が瓦解しかねない)

故に、読みは外せない。

幸い、彼には「アンジュの記憶」というアドバンテージがある。冷静に分析し、対処すれば、この優位は崩れることはないだろう。

そしてバトルは、ダンの第5ターンに移る。

「メイנסテップ。『ミラージュ・ワイバーン』並びに『太陽皇ヘリオスファイア・ドラゴン』を共にLv1で召喚」

赤のシンボルが2つ。現れ砕ける。

先に現れたのは翡翠の翼を持った翼竜のような竜『ミラージュ・ワイバーン』。

次いで現れたのは太陽のような金色の炎。それを中心に、腕が、足が、そして翼が姿を見せる。

一見すればロボットに見違えるようなメカメカしい武装をした『ヘリオスファイア・ドラゴン』が、咆哮と共にこの地へ降り立った。

(やはり、スピリットを展開してきた！)

「【バースト】をセットしてアタックステップ！」

「ネクサス『侵食されゆく銀世界』の効果により、トラッシュのコアを全てリザーブに戻します！」

「こちらも『ヘリオスファイア・ドラゴン』の効果を發揮。トラッシュにあるコアを全てこのスピリットに乗せる」

コアを乗せたことにより、『ヘリオスファイア・ドラゴン』はLv3 (BP12000) へと上昇する。

さらに。

「この効果により5つ以上のコアを乗せた時、BP10000以下の相手スピリット1体を破壊する」

「っ！」

ダンはこのターン、『ミラージュ・ワイバーン』を召喚するのに2個、『ヘリオスファイア・ドラゴン』を召喚するのに3個のコアを使った。故に、トラッシュにあったコアは5つ。それら全てが『ヘリオスファイア・ドラゴン』へ置かれたので、条件は満たしてい

る。

その胸元に輝く金色の炎が脈動を始める。集まったエネルギーに『ヘリオスファイア・ドラゴン』がその手をかざすと、そこに炎の球体が生成される。ある程度の大きさになったところで、『ヘリオスファイア・ドラゴン』はその炎球を掴み、そして。

「BP6000の『サンダー・Z・ヒポグリフォ』を破壊する」

それを思いっきり『サンダー・Z・ヒポグリフォ』へと投げつける。

豪速で投げられたそれは、『サンダー・Z・ヒポグリフォ』を抵抗も許さず破壊する。爆風に煽られ、第三皇子の服がなびく。

（コア回収にスピリット破壊……強力な効果だ。しかも、アンジュさんの記憶では、彼はかなりフラッシュユタイミングでマジックを多用する。戦術と使うカードの効果が完璧に噛み合っている……やはりこの人は強い！ なら……！）

「行くぞ。『ミラーージュ・ワイバーン』でアタック！」

（このアタックにも、必ず意図がある！）

ダンの声を受けて、『ミラーージュ・ワイバーン』が飛び立ち、一直線に第三皇子へむかう。

「フラッシュユタイミング！ 『三十三代目風魔頭首ヤタガライ』の『アクセル』を發揮！」

「やはり『アクセル』か……！」

「相手スピリット3体を疲労させます！ 『ヘリオスファイア・ドラゴン』を指定！」

フィールドに緑の風が吹く。それは1つに集約していき、1体のスピリットを象る。

風で出来た半透明の『ヤタガライ』が、『ヘリオスファイア・ドラゴン』の前に現れる。その風が輪郭を崩し『ヘリオスファイア・ドラゴン』を包むと、その炎のエネルギーを吸い上げる。

力を奪われ『ヘリオスファイア・ドラゴン』が疲労したのち、『ヤタガライ』は第三皇子の持つそのカードへと戻り、彼はそのカードを盤面に置く。

「だが『ミラージュ・ワイバーン』のアタックは有効だ！」

「ライフで受けます！」

第三皇子の目の前に赤のバリアが展開され、突撃した『ミラージュ・ワイバーン』のくちばしとそのバリアに衝突する。

その衝撃が、第三皇子のライフを砕く

「つ！ ……ライフ減少で「バースト」オープン！」

盤面に伏せられていたカードが勢いよく翻る。

『フアントマギアハミットリッター』
『幻 惑の隠者騎士バジャーダレス』の「バースト」効果により、コア3個以下の相手スピリット1体を破壊する！ 『ミラージュ・ワイバーン』を指定！」

攻撃を終えた『ミラージュ・ワイバーン』がダンの元へ帰るよりも先に紫の霧に包ま

れる。それにより、『ミラージュ・ワイバーン』がもたえ苦しみ始めた。その霧が離れた時、『ミラージュ・ワイバーン』はすでにピクリとも動かなくなり、フィールドから消え去った。

そして、離れた紫の霧が第三皇子のフィールドでより濃くなり、実態を作り出す。

「この効果でスピリットを破壊した時、2枚ドロ。さらに、『バジャーダレス』自身を【バースト】召喚！」

現れた実態は、杖と甲冑を携えた、騎士ともマジシャンとも言えない奇妙なスピリット。その甲冑の内側で紫の霧を漂わせ、『バジャーダレス』はフィールドに降り立った。直後、ダンの【バースト】もまた、開かれる。

「スピリット破壊により【バースト】発動」

「なっ!？」

「マジック『双光気弾』の【バースト】効果により、デッキから2枚ドロ。さらコストを払いフラッシュ効果を発揮——相手のネクサス1つを破壊する」

コスト確保のため、『ヘリオスファイア・ドラゴン』のレベルが2へと下がり、その横を、2つの光が走る。

フィールドを覆っていた雪が、その光に溶かされていく。螺旋を描いて動き回る2つの光が消えた時、溶けた雪が、キラキラと空気を彩っていた。

「『侵食されゆく銀世界』は破壊だ」

「つ……やはり、赤デツキにネクサスは長く持ちませんでしたか」

ダンの使う赤属性のカードの中には、ネクサスを破壊するカードが豊富に存在する。むしろ、ここまで破壊されなかったのは運がいい方だろう。

「君のようなデツキの、カウンター用のコアを常に供給するそのネクサスを野放しにすれば、俺の攻撃はいつまで経っても通らなくなるからな」

「やはり、僕のデツキの戦術は、すでに見抜かれていましたか……」

その時、バトルフィールドの観客席。そこに2人、観客が現れた。

「あー！ いたー！」

「ちよ、ちよっと！ 何してんの2人ともー！」

それは、アンジュとリゼ。2人は、いなくなったダンを追って、このバトルフィールドにたどり着いたのだ。

「アンジュか。もう怪我は大丈夫なのか？」

「まあ、お陰様で……じゃなくて！ アンタたち何してんのさー！」

「何って、バトルですが……」

「そうじゃない！」

思いのほか元気そうなアンジュの姿に、ダンと第三皇子は、自然と笑みを浮かべてい

た。

大声でツツコミを入れるアンジュの肩を叩き、リゼがアンジュを制止した。そして、自らの弟と、その対戦相手に問い詰める。

「もう一回聞くけどさ。2人とも、何してるの?」

「弟から聞いたよ。リゼ、俺の旅を手伝う気なんだろう?」

「え? ええ、まあ」

「そうだったら、いざという時に姉さんを守るのは、この馬神ダンということになる。そして僕は、まだ彼を信用したわけではありませんでした」

「だから、このバトルを通して、俺の力を試したいそうだ」

「はあ? い、いや、あのさあ」

思わず頭に手をやるリゼは、いったい何に呆れたのだろうか。気の抜けた声で、しかなおも弟への問いは止めなかった。

「ねえ。私説明したよね」

「ええ。しましたね。彼の信用性と、旅の重要性は、この3日間飽きるほど聞きました」

「だったら——」

「違う、リゼ。そうじゃない」

意外にも、姉弟のすれ違いを止めたのはダンだった。

「彼が信じられなかったのは、俺の言葉ではなく強さ——俺の真意ではなく、俺の実力のほうだ」

「うーん????」

いや、????? どうやら止められてはいないようだ。

「ちよつと待つて、アンタ、ダンくんが弱いつて思つてるの?」

「いえ、弱いとまでは……。ただ、姉さんを任せられるほどかどうかは、また話は別ですから」

「それはちよつと言い過ぎじゃない?」

次に割つて入つてきたのは、アンジユだった。

アンジユもなんだかんで、10年ほどヘルエスタ家と付き合つてきている。もちろん、この姉弟のすれ違いを見たのも1度や2度ではない。

アンジユはその経験から、いつものように第三皇子へ語る。

「改めて私の口から言うけど、ダンが『黒龍使いのルーク』に勝つたのは本当だよ。しかも私が見る限りだと、ダンの完全な勝利。強さを疑うことなんて、私にはないと思うけど」

「いや、俺の強さならもう示せたと思うぞ」

「んんんんん????」

まあ、出会ったばかりの男の子に関しては、彼女の知る由ではないが。

「ええ。勝負は時の運。故にこそ、カードバトルの実力は結果ではなく過程にこそ現れる。馬神ダンはそういう意味では、すでに僕の想像を超える強さを示してくれました」

「え、じゃあ2人は何を賭けてバトルしてんの？」

「え、いや、何も賭けてはいませんが」

「????」

聞けば聞くほど、リゼとアンジュは置いて行かれるようだった。

「じゃ、じゃあ！ なんでこのバトルを続けるのさ！ ライフ減るとか痛いでしょ！

もう用が済んだなら別に続ける必要なんて！」

「姉さん。そんな無粋なこと聞かないでくださいよ」

「そうだな……カードバトルがバトルを続ける理由なんて、1つしかないさ」

まるで、もう何年も同じ時を過ごしたかのように、ダンと第三皇子の息が合う。

共に、不敵な笑みを、お互いに向けて。

「目の前の相手に勝ちたい。負けたくない。1度始めた勝負を、譲るわけにはいかない

！」

「……ああ、そう」

言葉が出たのはリゼだけだったが、アンジュも概ね、リゼと同じ感想を抱いていた。

——男って、めんどくせえ。

「さあ、バトルを続けましょう、馬神ダン。一応、まだあなたのアタックステップです」
「そうだったな。ターンエンド」

そして、ターンは移る。

ここからは、力を試すとか、姉を任せるだとか、そういった盤外の都合は、もうない。
純粹に、負けず嫌いの男の子の、意地の張り合いが、始まる。

攻防く吹雪の中で燃える炎く

第三皇子の第6ターン。

彼のフィールドには、Lv1（BP6000）の『ファンタマギア 幻ハミットリッター 惑の隠者騎士バジャーダレス』が1体のみ。手札は7枚。使えるコアは8個。

対するダンのフィールドには、疲労状態の『太陽皇ヘリオスファイア・ドラゴン』Lv2が1体のみ。手札は5枚。使えるコアは『ヘリオスファイア・ドラゴン』の上に乗っているコア5つ。

（前のターン、馬神ダンは『双光気弾』をセットして使ってきた。僕のネクサス『侵食されゆく銀世界』を破壊するだけなら、手札から普通に使うこともできたはず……）

第三皇子の使っていたネクサス『侵食されゆく銀世界』は、アタックステップの開始時にトラッシュのコアを全て回収する効果がある。つまり、このネクサスを破壊するだけならば、アタックステップに入る前に破壊するのベストのはずだった。

（しかし、彼はそれでも「バースト」として発動してきた。僕にカウンターを食らうことを覚悟して、『双光気弾』の「バースト」効果を狙った……）

違和感のあるプレイだった。

現状の手札では攻め手に欠けているのか、それとも他に求めているカードがあるのか。

なんにしても、第三皇子のカウンターを食らうリスクに見合っているリターンには思えなかった。

(やはりまだ、彼の狙いは読めない……まだ準備も整ってないし、慎重にプレイしなければ……)

「メインステップ、手元より『三十三代目風魔頭首ヤタガライ』を召喚！」

緑のシンボルが現れ砕ける。姿を見せたのは刀を携えたシノビの鳥。誇りある佇まいでもって、フィールドに降り立つ。

「召喚時効果。ボイドからコアを2個自分のスピリットに置きます」

その効果により、第三皇子は新たなコアを2つ得て、それを『ヤタガライ』の上に乗せる。それにより『ヤタガライ』はLv2へと上昇するが、第三皇子はただちにそのコアを取り除き、次のカードを使用する。

「続いて、『スコルピード』をLv1で召喚。召喚コスト確保のため、『ヤタガライ』のコアを全て外します」

静かに消えた『ヤタガライ』の横で、緑のシンボルが現れ砕ける。現れたのは、白と紫の甲殻に覆われた奇妙なサソリ。その尻尾は、3つに分かれており、それら1つ1つ

の先端に、目のような赤い模様がついていた。

「召喚時効果。トラツシユより緑、または白のネクサス1つをノーコストで配置します」
今、第三皇子のトラツシユにあるネクサスは、1つ。

「ネクサス『侵食されゆく銀世界』を再び配置！」

『スコルピード』の3本の尻尾、その先端の赤い模様が怪しく光った時、すでにフィードは、先ほどと同じ吹雪に覆われていた。

雪を伴った強風が、ダンの髪を煽る。

「やはり、1度破壊した程度ではすぐに立て直されるな」

「当然です。いまだ15にも満たない身ですが、このデツキには僕のバトスピ人生の全てを賭けています。そう易々と崩される訳にはいきません。ターンエンドです」

第三皇子のターンが終わる。

吹雪になびく髪や衣服を意に介さず、ダンは自分のデツキへ手をやった。

「スタートステップ」



アンジュ「あれ、アタックしないんだ。ダンの場にはブロッカーいないし、

『侵食されゆく銀世界』で防御も出来てるから、フルアタックしても良さそう
だけど」

リゼ「ああ、あれはね。もう必要ないって感じなんだよね」

アンジュ「必要ない……？　そういえば第三皇子あの子のバトルって

ちゃんと見たことなかったけど、どんなバトルするの？」

リゼ「うーん、まあ。典型的なコントロールドッキリかな。」

相手の動きをフラッシュタイムで全て受け止めて、

パーツが揃うまでひたすらに耐え続ける。

そして、パーツが手札に揃った瞬間に、

一気に相手のライフを削り切る——ワンショットキルを狙うデツキ」

アンジュ「うわあ。見かけによらずえぐいデツキ使うねえ」

リゼ「ダンくんはその戦術にすでに気付いてるっばいよね。」

『侵食されゆく銀世界』を積極的に破壊したみたいだし、

カウンターが来ることを分かかってて絶え間なく攻撃を仕掛けてるっばいしね」

アンジュ「パーツが揃う前に倒しちゃおうってこと？」

トラッシュを見る限りだと、それにしても無茶な攻め方してるっばいけ

リゼ「みたいだね……焦ってるのかな？」

アンジュ「いや、多分……」



（アタックは無し……やはり狙いは、キースピリットによるワンショットキルか）

ダンの読みでは、第三皇子のデッキには、1ターンでダンの残りライフ4つを砕くコンボがある。故に、必要以上に相手にコアを与えるアタックを、第三皇子は仕掛けてこない。

だとすれば、やはり時間をかければ負けるのはダンの方だろう。

——別の狙いも、結局ワンショットキルされたのでは意味がない。

「メインステップ。『ヘリオスファイア・ドラゴン』をLv1にダウン。続けて『ホワイトホール・ドラゴン』『ファルスクロス・ドラゴン』をLv1で召喚」

赤のシンボルが2つ、現れ砕ける。そこに現れたのは蒼き翼に白く染まった身体が美しい4足立ちのドラゴンと、燃え盛るほどの赤で染まった肌の人型の竜。

「さらにマジック『ジュライドロー』を使用。デッキから2枚ドロー」

（手札補充……『双光気弾』といい、やはり何かを引こうとしている……！）

「アタックステップ！ 『ヘリオスファイア・ドラゴン』の効果によりトラッシュのコアを

全て『ヘリオスファイア・ドラゴン』に乗せLv3にアップ！」

「こちらにもネクサス『侵食されゆく銀世界』の効果により、トラッシュのコアを全てリザーブへ！」

勢いを増す吹雪を、『ヘリオスファイア・ドラゴン』の炎のエネルギーが跳ね返す。

「さらに、コアを5つ戻したことにより、BP10000以下の相手スピリット1体を破壊する。BP6000の『バジャーダレス』を破壊！」

その炎が、『ヘリオスファイア・ドラゴン』の掌へ収束していく。それが球状の塊に安定した時、『ヘリオスファイア・ドラゴン』はそれを前方に向けて投げつけた。

荒ぶる吹雪をもろともせず、その炎球は一直線に『バジャーダレス』にむかい、そして、その胸を貫いた。破壊され、爆風が起こるが、それは『侵食されゆく銀世界』の吹雪の中へと消える。

「そして『ヘリオスファイア・ドラゴン』でアタック！」

その溢れる炎をフィールドに撒き散らし、『ヘリオスファイア・ドラゴン』が飛翔する。「アタック時効果。『ヘリオスファイア・ドラゴン』よりもBPの低いスピリット1体を破壊する。『スコルピード』を破壊！」

地面すれすれを飛ぶ『ヘリオスファイア・ドラゴン』が、勢いのまま『スコルピード』を掴んで天空へ上がる。足掻きもがく『スコルピード』に、抵抗も許さず炎のブレスをゼ

口距離でぶちまける。数舜ののちに、『スコルピード』は無残に焼け消えた。

手ぶらになつた『ヘリオスファイア・ドラゴン』の瞳が、第三皇子を捉える。
だが。

「フラツシユタイミング！ マジック『白晶防壁』を使用！」

吹雪が、より強くなる。

それは渦を巻き、白い竜巻となつて『ヘリオスファイア・ドラゴン』を包み始める。
「相手スピリット1体を手札に戻します！」

その竜巻は、徐々に小さく、強靱になつていく。まるで『ヘリオスファイア・ドラゴン』を絞め殺すかのように、その勢いは小さくなるほどに増していく。

だが、白い風の向こう側、瞳が赤く輝く。

直後、耳を割かんほどの雄叫びを伴つて、竜巻が一気に吹き飛び消えた。

そこにいた『ヘリオスファイア・ドラゴン』は、赤いオーラを纏っていた。

そして、そのオーラは、ダンの他のスピリットからも出ている。

『ホワイトホール・ドラゴン』の効果。俺の赤のスピリットは、相手の効果でフィールドから手札／デッキに戻らない。『白晶防壁』の効果は不発だ！

そのオーラは、『ホワイトホール・ドラゴン』の効果によるもの。

それが、『白晶防壁』の竜巻から『ヘリオスファイア・ドラゴン』を、そしてダンのスピ

リットを守っていた。

しかし、『白晶防壁』の効果はまだ続く。

第三皇子の盤面、そのトラッシュで、ソウルコアがほのかに輝いていた。

「いえ、『白晶防壁』の追加効果はすでに発揮しました」

その輝きは第三皇子の前に、クリスタルの防壁を築き上げていく。まるで、徐々に水が凍りにつくように、地面からクリスタルが生え上がっていく。

それを認識して、『ヘリオスファイア・ドラゴン』が急加速して第三皇子に迫る。

氷の防壁が出来上がるよりもはやく、すれすれで懐に入った『ヘリオスファイア・ドラゴン』が、その拳を振り上げた。

「ライフで受けるー」

赤いバリアを殴りつけて、第三皇子のライフを砕く。

直後、氷の防壁に閉じ込められるよりも早く上空へ駆けあがり、素早くダンの元へと戻っていく。

その防壁は、完全に第三皇子を覆い、決して砕けることのない白晶の城として聳え立っていた。

「ソウルコアを使用して『白晶防壁』を使ったターン、僕のライフは1つしか減らない。これ以上のアタックは無意味です」

「防御マジック……。ターンエンド」
「くっ。スタートステップ！」



リゼ「今のつて、ダンが攻撃を防がれたんじやないの？

なんでうちの弟が悔しがってるんだろ」

アンジュ「いや……。あれは防がれたんじやなくて、使わせたんじやないかな」

リゼ「使わせた？ 『白晶防壁』を？」

アンジュ「うん。確実に攻撃を防げる『白晶防壁』みたいな白マジックは、

まさに生き残るための切り札。

それを使わないといけないほどに、あの子は追い詰められてるし、

ダンは追い込んだことを確信したんだと思う」

リゼ「はあ、なるほどねえ。そう考えると、

あんなに手札あるのに『白晶防壁』でしか防げなかったというのもちよつと変な

話かも？」

アンジュ「まあ、あの手札全部がカウンターってことはないだろうしね。

さもだし」
さつき言ってたワンショットキルするためのコンボパーツがかさばってる



第三皇子の第8ターン。

「コアステップ。ドローステップ……っ！」

(来た!? あとは、次のターンを耐えるだけだ……!)

「メイנסテップ! マジック『リバイヴドロー』を使用! トラツシユから『サンダー・

乙・ヒポグリフォ』を手札に戻します! 続いて、『英雄獣 老将タイガー・ネストール』を召喚!」

緑のシンボルが現れ砕ける。現れたのは、白いスカーフとエメラルドが埋め込まれた装甲を所々に身に着けた、髭の生えた虎だった。その虎はフィールドに降り立つと、ダンを真つすぐに見据えて咆哮を放つ。

「召喚時効果! ボイドからコアを2個このスピリットに置きます!」

コアが増えたことにより、『ネストール』はLv2へアップする。

そしてその咆哮は、衝撃となってフィールドを走り、ダンの所にたどり着くと、その

ままとラッシュのカードを巻き上げた。

「っ……っ！」

「さらに！ 相手のトラッシュのカード全てを除外し、その中のスピリットカード3枚につき1体、相手スピリットを重疲労させます！」

巻き上げられたカードが次々と消失していき、そして、その中の『レイニードル』『コメットヴルム』『ミラージュ・ワイバーン』のカードが光となって、操られるようにフィールドへ向かう。

「除外されたスピリットは3枚。従って、『ヘリオスファイア・ドラゴン』1体を重疲労です！」

その光は、緑の風となって膝を付いていた『ヘリオスファイア・ドラゴン』を覆い、それに力を奪われるように、『ヘリオスファイア・ドラゴン』は倒れてしまった。

重疲労——スピリットはアタックやブロックをすると「疲労」し、次の行動が不可能になるが、重疲労は疲労よりも、さらに一段階強く疲労する。

1部のカードが持つ特殊な効果によって発生するその状態になったカードは、盤面で逆さまとなり、2度回復しなければ次の行動が行えなくなる。

重疲労とは、フィールドからスピリットを除去することなくそのスピリットを機能不全にさせる、緑のカードがもつ厄介な効果なのだ。

(ゲームから除外に重疲労……これが、この世界のバトスピか)

「ターン終了! さあ、あなたのターンです! 馬神ダン!」

「……スタートステップ」

ダンの第9ターン。

ダンは、スタートステップからステップを重ねていき、リフレッシュステップでフィールドの『ヘリオスファイア・ドラゴン』を回復させる。

だが、重疲労状態であった『ヘリオスファイア・ドラゴン』は、1度の回復では回復しきらない。盤面では逆さまの状態から横向きの「疲労状態」へと変わり、フィールドの『ヘリオスファイア・ドラゴン』は、倒れたところから何とか立ち上がり、膝を付いてうつぶわいていた。

その様子を見て、ダンはふと、先日リゼとした、何気ない雑談を思い出した。



リゼ「ダンの世界にも、やっぱりバトスピがあつたんだよね?」
ダン「ああ。この世界と同じようにバトルフィールドがあつて、

そこで行われたバトルは絶対だったよ」

リゼ「じゃあさ。向こうの世界のバトスピってどんな感じだったの？

やっぱり使われてるカードとか違う感じ？ それともあんまり変わんないのか

な？」

ダン「あんまり面白い話にはならないと思う。

向こうの世界には、『バースト』も『煌臨』もなかったしな」

リゼ「うそ!？」

ダン「カードプール自体はこの世界の方が多いと思う。

だからまあ、俺の世界のバトスピの話をして、

この世界にとっては昔話を聞いているみたいになるんじゃないかな」

リゼ「へえ。ああ、でもそうになると、ダンは『バースト』や『煌臨』が

よく分からないままあのルークに勝てたってこと？ それってめっちゃくちやす

くない？」

ダン「いや……」

リゼ「……?？」

ダン「知ってたんだ。『バースト』も、『煌臨』も、他のギミックも。

この世界に来た時に、いつの間にか知っていたんだ」

リゼ「な、なにそれ……」

ダン「俺にも分からない。多分『アポロヴルム』が教えてくれたんだと思うけど……

結局俺は、自分自身に何が起きているのか何も理解していないんだ」

リゼ「ダン……」

ダン「そう。俺は何も分かってない。何故呼ばれたのかも、ここで俺が何をすべきなのかも、そして、元の世界へ帰る方法も。だから——」

◇◇◇◇◇

(だから、一人で旅に出てみるって、その時に言ったんだっけな)

ダンの瞳は、無意識に観客席にいるリゼに向いていた。

一人ですると決めた旅。しかし、あそこで彼らのバトルを見る皇女様は、どうやらダンの旅に付いてくるらしい。

この世界に来て、まだ3日しか経っていないが、仲間仲間は、すでに出来ていたらしい。

(いや、考えてもみれば……)

「へ？ な、なに？」

グラン・ロロの時は、1日で仲間が出来たなあと。

昔のことを思い出し、懐かしみ——そして今一度、決意する。

その瞳を、第三皇子の方へ戻す。

(俺は帰る……必ず元の世界に帰る！ だから俺は、この世界でも負けるわけにはいかない！)

故に、その力を示す。

第三皇子に、ではない。

自らに対して、その強さを示すために、このバトルに勝つ。

ここで負けるようなやつに、世界を渡るなんて不可能だと、自分を鼓舞するために。

「メインステップ！ 『ヘリオスファイア・ドラゴン』をLv1にダウン。続いて『太陽の守護者オーレオール・ドラゴン』を召喚！」

赤のシンボルが現れ砕け、姿を見せたのは白い鎧を身に着けた竜の騎士。右手に剣、左手に盾を構え、誇りある姿勢でフィールドに立つ。

「さらにマジック『ジュライドロー』を使用。場に赤のシンボルが4つ以上あるので、デッキから3枚ドロウ。そして、『ミラージュ・ワイバーン』を召喚！ 不足コストは『ファルスクロス・ドラゴン』から確保し消滅させる」

さらに赤のシンボルが現れ、そこから『ミラージュ・ワイバーン』が出現するとともに『ファルスクロス・ドラゴン』が消える。

これで、ダンのアタッカーは3体。

フルアタックで、残りライフ3つの第三皇子を倒せる——射程圏内に、入れた。
しかも。

(耐性持ちのスピリットで並べてきた……！)

新たに召喚された『オーレオール・ドラゴン』には、コスト3以下のスピリットが破壊された時、その破壊されたスピリットを疲労状態で残す効果がある。

手札やデッキに戻すのは『ホワイトホール・ドラゴン』で防がれ、破壊するのも『オーレオール・ドラゴン』に止められている……明らかに、第三皇子のカウンターを牽制している。

(この布陣……このターンで攻め切るつもりですか!?)

「アタックステップ! 『ヘリオスファイア・ドラゴン』の効果! トラツシユにある5つのコア全てをこのスピリットに乗せ、BP10000以下の相手スピリット1体を破壊する。BP9000の『ネストール』を指定!」

「くっ! こちらも『侵食されゆく銀世界』の効果! トラツシユのコア全てをリザーブへ!」

荒れ狂う吹雪の中、『ヘリオスファイア・ドラゴン』がその胸元のコアから炎を掌に集めてそれを投げつける。

その炎が『ネストール』を焼き尽くし起きた爆発は、徐々に強くなる吹雪に飲まれた。

『ミラー・ジュ・ワイバーン』！ 行け！」

ダンが盤面の『ミラー・ジュ・ワイバーン』のカードを横に倒し、吹雪の中を『ミラー・ジュ・ワイバーン』が飛翔する。

「破壊されず、手札に戻らないスピリットのアタックだ。『サンダー・Z・ヒポグリフオ』では防げないぞ」

勢いを増していく吹雪に負けることなく、ブロッカーのいない第三皇子に一直線に向かつていく。

「いえ——」

第三皇子は、ゆっくりとその1枚を手取る。

それは、この攻めを一気に治めるカウンターであり。

「——フラッシュ・タイムニング！」

彼の、切り札——。

『煌星第一使徒アスガルディア』の「アクセル」を發揮！ B P 1 2 0 0 0 以下の相手スピリット全てを破壊します！」

フィールドを覆っていた吹雪が、一瞬にして獄炎にかき消される。

一瞬でこの地を全てを包み込んだその炎は、一気にダンのスピリットたちを破壊していく。

ダンの場にいる『オーレオール・ドラゴン』による破壊耐性をも焼き尽くし、ダンのドラゴンたちが次々と消えていく。

「っ！ 何……!?!」

『『アスガルディア』のアクセルで破壊したスピリットの効果は発揮されません。『オーレオール・ドラゴン』の破壊耐性は、この炎に耐えられない!』

『オーレオール・ドラゴン』の効果は、コスト3以下の自分のスピリットすべては、相手の効果で破壊されたとき、疲労状態でフィールドに残ることができるといふもの。つまり、一度破壊されてから場に甦る効果ということ。破壊されたあとの効果は、『アスガルディア』のこの効果で封殺される。

ダンのスピリットを全て破壊したその炎は、第三皇子の持つ『アスガルディア』のカードへ吸収されていく。

第三皇子がそのカードを手元に置いた時、残っていたのは吹雪が舞うだけでスピリットのいないフィールドだった。

「……それが、キースピリットか」

「そうです。そして——必殺のコンボはすでに揃った!」

「っ!」

第三皇子が吹雪の向こう、そこにいるダンを指差し、高らかに宣言した。

「次のターン『アスガルディア』が、あなたのライフを燃やし尽くします！」

必殺～アスガルディア出陣～

「次のターン『アスガルディア』が、あなたのライフを燃やし尽くします！」

「……ターンエンド」

ダンの第9ターンが終わる。

彼の手札は7枚あるが、フィールドにはカードはなく、「バースト」もない。

必殺のコンボを揃えたという第三皇子の攻撃を迎え撃つには、あまりにも無防備。

「行きます！ メインステップ！」

第三皇子の第10ターン。

「まずは1枚目！ 『サンダー・Z・ヒポグリフォ』！ Lv2で召喚！」

赤のシンボルが現れ砕ける。再び召喚された『サンダー・Z・ヒポグリフォ』を横目に、第三皇子はさらなるカードを紡ぐ。

「2枚目！ ブレイヴ『飛甲虫イットウカプト』を召喚！ 『サンダー・Z・ヒポグリフォ』
ダイレクトブレイヴに直接合体！」

緑のシンボルが現れ砕ける。召喚されたのは、角が刃になっている巨大なカプトムシ。

それは召喚されるすぐに『サンダー・Z・ヒポグリフォ』へと向かい、衝突する。1つになるべく光を放ち、光が晴れてそこにいたのは、青かった翼を緑に染めた『サンダー・Z・ヒポグリフォ』であり、そのくちばしには、『イットウカブト』の角にあった刃が加えられている。

「3枚目！ マジック『インビンシブルシールド』を『サンダー・Z・ヒポグリフォ』を対象に使用！ このターン、『サンダー・Z・ヒポグリフォ』は【装甲・赤／紫／緑／青】を得る！」

フィールドの『サンダー・Z・ヒポグリフォ』が、白いオーラを纏い鳴く。

【装甲】とは、白属性のカードが得意とする、相手の効果に対する防御能力。【装甲・赤／紫／緑／青】とはすなわち、相手の【赤／紫／緑／青】の色のカードのスピリット／マジック／ネクサスの効果を受けないということ。

「これにより、あなたの赤のカードの効果が、僕のスピリットに触れることはなくなつた！」

「っ……」

「アタックステップ！ ブレイク合体スピリットでアタック！ 『サンダー・Z・ヒポグリフォ』のアタック時効果により1枚ドロ！」

その緑になった翼をはためかせて、『サンダー・Z・ヒポグリフォ』が飛翔する。

『『イットウカプト』の合体アタック時効果！ 最初のアタックのみ、このスピリットは回復する！』

だが、その向かう先は、ダンではなく、はるか上空。

「そして——これが最後の1枚！」

第三皇子は、盤面から1枚取り出し、

「本来【煌臨】は、手札からでのみ可能であり、手元のカードは【煌臨】できません。ですが、このカードは、自身の効果により手元からの【煌臨】が可能！」

それを、天高くかざす。

瞬間、その手に持つカードから炎の竜巻がいくつも出現する。

「フラッシュタイムィング！ 星の光をその身に乘せて、我が勝利のためにその剣を振るえー！」

その炎の竜巻は、瞬く間に上空にいた『サンダー・Z・ヒポグリフォ』を目掛けて伸び、『サンダー・Z・ヒポグリフォ』もまた、抵抗することなくその炎を受け入れた。完全に炎に包まれ、その炎がまるで小さな太陽のように球体をかたどる。

『『煌星第一使徒アスガルディア』！ 『サンダー・Z・ヒポグリフォ』に【煌臨】せよ！』

その球体が徐々に小さくなっていき、そして、明らかにそこにいるはずの『サンダー・Z・ヒポグリフォ』より小さくなった時、その炎が急激な膨張を起こし、爆発する。

フィールドを荒らす吹雪を吹き飛ばし、そこにいたのは、人型の竜。

白いメカメカしい装甲に身を包み、右手には赤い両刃剣、左手にはイットウカブトの角で作られたような両刃剣を携え、『煌星第一使徒アスガルディア』はフィールドに【煌臨】した。

「これにより、僕の必殺のコンボは今、完成した！」

【煌臨】とは、ソウルコアをトラッシュに送り、場にある条件に合ったスピリットの上に重ねて乗せることで、ノーコストでフィールドに出現する能力。

その特徴の1つとして、【煌臨】したスピリットは、【煌臨】する前のスピリットの状態を全て引き継ぐことが挙げられる。

例えば、回復状態のスピリットに【煌臨】すれば回復状態で場に出るし、アタック中ならばそのアタックを受け継ぎ、何かしらの効果を受けていたならばそれも引き継ぐ。

そして、『アスガルディア』はダブルシンボルのスピリット。

すなわち、『サンダー・Z・ヒポグリフォ』から【煌臨】した現在の『アスガルディア』の状態とは。

ダブルシンボルでアタック中であり、

『イットウカブト』により回復しているので連続アタックが可能であり、

『インビンシブルシールド』により赤のカードの効果を受けない。

つまり。

「馬神ダン！ 残りライフ4つのあなたに、ダブルシンボルのアタック2回を受けきることは不可能！ これで終わりです！ 行け！ 『アスガルディア』！」

その両手にもった刃を構え、『アスガルディア』がダンへと突撃を始める。

「ライフで受ける！」

その刃が、ダンの目の前に展開されたバリアを二度斬りつけ、そのライフを2つ奪う。

『アスガルディア』は1度引き、第三皇子のフィールドへ戻る。

「『アスガルディア』！ もう1度アタック！」

そして、再びダンへと向かい飛び掛かる。

視界を塞ぐ吹雪をもろともせず、まっすぐ迷わず刃を振るう。

赤属性のカードを主軸に戦うダンのデッキにとって、「装甲・赤」を持つスピリットの

攻撃を防ぐことは不可能。

そう、3日前、この世界に来たばかりの彼には不可能だった

だが、デッキとは、日々変化を続けるもの。

「フラッシュタイプミング——」

3日という時間は、『アポロヴルム』に渡されたデッキを、彼好みにチューニングするには、あまりにも充分すぎた。

「マジック『リミテッドバリア』を使用」

ダンの目の前に、いつもの赤のバリアが展開され、さらにその目の前に一回り大きな白い障壁が展開される。

「ば、バカな!?! 白のマジックだつて!?!」

「合体スピリットのアタックはライフで受ける!」

その障壁にむけて、『アスガルディア』は全力の力を込めて刃を振り下ろしたが、ダンのライフを砕く事は叶わなかった。

「このターンの間、コスト4以上のスピリット／アルティメットのアタックでは、俺のライフは減らされない」

『アスガルディア』の攻撃は——第三皇子の必殺のコンボは、ダンに届くことはなかった。

そして、それだけではない。

ダンのトラッシュ——リミテッドバリア発動のために使ったソウルコアが、薄く輝いている。

「さらに、コストにソウルコアを使用したことにより、相手のネクサス一つを手札に戻す」

その瞬間に、第三皇子のネクサス『侵食されゆく銀世界』が、盤面から弾き出される。

フィールドからは吹雪が消え、弾かれたネクサスをキャッチした第三皇子の表情は、動揺を隠せていなかった。

「な、何故!? 情報では赤のカードしか使っていないはず! あなたは徹底した赤使いではなかったのですか!」

「デッキは常に変化を続ける。このデッキはもう、『アポロヴルム』に渡されただけの借り物ではない。俺のデッキだ」

「デッキを改良していたと言うのですか! あなたは他のカードを持っていなかったはず……いったいどこから改良のためのカードを……ハッ!」

思い立って、第三皇子は咄嗟に顔をあげた。

視線の先——観客席にいる自らの姉は。

「ああ、なんていうか、ね? ダンくんのデッキと一緒にこれ言うの楽しくなっちゃって、さ」

頬をかいて、弟から目を逸らしていた。

「姉さん……まさかそこまで馬神ダンに……」

「君の口からアンジュの話が出た時に、思ったことがある」

「……なに?」

他所に向いた意識を自身に戻させるように、ダンが第三皇子へ語りだす。

「もしあのバトルを見ていたのだとしたら、俺のデッキに赤以外のカードが入ってないと勘違いしてるかもしれないってな」

そこで、彼のバトルの方針は決まった。

「もしもそうなら、君は必ず勝負所を見誤る。白の防御マジックを警戒していたのならまずありえない、『早期の決着』を狙い、そしてそこに隙が生まれる」

「それが……今だということですか……」

ダンはこのバトルの中で、序盤のうちに第三皇子のデッキタイプ——つまり、キースピリットでワンショットキルを狙っていることは見極めていた。そして、ワンショットキルを狙うデッキならば本来、『リミテッドバリア』や『白晶防壁』などの『確実に生き残ることのできる防御マジック』は天敵であり、最も警戒すべきカードなのだ。

しかし、第三皇子はそれがダンのデッキにはないだろうと勘違いした……それこそが、ダンの狙った隙だ。

結果だけ見れば、ブロッカーは存在せず、コアもほとんど使ってしまい、『侵食されゆく銀世界』は処理された。次のダンの攻撃に対して、あまりにも無防備すぎる。

「っ！しかし！　後がないのはあなたも同じ！　次のターンで僕が生き残るようなことがあれば、今度こそ逃しはしない！　あなたがそうやって搦んだ薄い勝ち筋は、この1ターンだけ！」

「ああ。だから示すのさ。このターンで、俺の強さを」

「っ!？」

「スタートステップ」

ダンの第1ターン。

「コアステップ」

バトスピで勝つことに必要なことは2つ。

運と、実力だ。

この状況を作り出したこと。これは間違いないダンの実力。

だが、これではまだ足りていなかった。

勝つために必要な、あと1つ。

「ドローステップ」

それがその手に来た時に、彼は決まっそう言う。

「……カードたちよ。今度は俺が応える番だ」

ダンは引いたカードを確認すると、迷いなくそれを使用する。

「メインステップ——世界を照らせ。光を背負いし紅の龍よ! 『太陽神星龍アポロ

ヴルム』! Lv3で召喚!」

少年の背後、バトルフィールドでは何も無いはずのそこから炎が沸き上がる。

その炎を背に、這い上がる龍が1体。

その翼の一振りで背後の炎を消し去り、『太陽神星龍アポロヴルム』は、けたたましい咆哮を伴ってバトルフィールドに君臨した。

「っ!? このタイミングで『アポロヴルム』だつて!？」

「アタックステップ! 行くぞ! 『アポロヴルム』!」

その声に咆哮で応え、『アポロヴルム』が天高く舞い上がる。

「Lv2, 3のアタック時効果。相手の最もBPの高いスピリット1体を破壊する。『アスガルディア』を指定!」

上空から、『アポロヴルム』がその背後に構える無数の刃のうち1つを、『アスガルディア』に向けて放り投げる。

『アスガルディア』はその手に持つ日本の刃でそれを弾き、すかさずその場から飛び上がった。

自身に一直線に向かってくる『アスガルディア』に、『アポロヴルム』は無数の刃を次々と放つが、その悉くを『アスガルディア』は弾き、またはかわして『アポロヴルム』に迫る。

そして、『アポロヴルム』が『アスガルディア』の刃の間合いに完全に入った瞬間に、『アスガルディア』は両手の刃を同時に突き刺す。

だが。

その両方を、『アポロヴルム』は両手で掴んで見せた。

完全に抑えられ、刃を取り戻そうともがく『アスガルディア』に向けて、『アポロヴルム』はその口から炎を吐き出した。

抵抗の一切を許さず、『アスガルディア』その炎に飲み込まれ、後に爆発を起こし破壊される。その爆発からかろうじて逃れるように、合体フレイグしていた『イットウカブト』がそこから飛び立つ。

「『アスガルディア』！」

「さらに、『アポロヴルム』の【界放】の効果。トラッシュのコア2つをこのスピリット戻すことで、『アポロヴルム』は回復する」

その爆風を突っ切って、『アポロヴルム』が第三皇子へと迫っていく。

「くっ！ ライフで受ける！」

赤いバリアが展開され、そこに『アポロヴルム』がゼロ距離で炎を放つ。

その炎が、バリアを通して衝撃となり、第三皇子のライフを砕く。

残りライフが2つとなり、その衝撃で1歩たじろぐ第三皇子に、しかし休む暇はない。

『アポロヴルム』は、【界放】の効果で回復している。

「『アポロヴルム』！ 続けてアタック！」

そのアタック時効果により、通りすがりに『イットウカブト』を破壊し、そして【界放】の効果で再び回復する。

トラッシュにコアがある限り何度でもアタックする『アポロヴルム』の前では、もはやライフなどいくつあろうと無いも同然。

「ライフで受ける！」

再び赤いバリアが展開され、そこに次は刃でもって衝撃が加わる。

そのライフが砕かれ、そして、残りライフは1つ。

「これで最後だ！」

ダンが『アポロヴルム』のカードを倒し、そして『アポロヴルム』の最後の攻撃。

これが通れば、第三皇子の負けが決まる。

それを迎える第三皇子はしかし、まだ闘志を消していない。

ライフを砕かれたことで、使えるコアが増えたのだ。

かろうじてまだ1発、抗える。

「フラッシュタイミング！ マジック『リミテッドバリア』を使用！」

それは、奇しくもダンの使った防御マジックと同じカード。

その効果が発揮されれば、ダンの攻撃を完全に止められる。

「このターンコスト4以上のアタックでは——っ!？」

だが——消えた。

第三皇子の手に持っていた『リミテッドバリア』に、緑の光が集まったかと思えば、次の瞬間には、『リミテッドバリア』のカードが消えていたのだ。

消えた緑の光の向こう側、何が起きたのか理解できない第三皇子がとらえたものは、ダンが1枚のカードを持った姿だった。

「マジック『リーフジャマー』を使用。不足コストは『アポロヴルム』から確保。よつてLv2にダウン」

「……、今度は緑のマジック!?!」

「相手がマジックを使用した時、手札からこのカードをコストを払って破棄することに
より、ただちにその効果を無効にする」

ダンの手に持った『リーフジャマー』が、緑の光に包まれて消えた。

それは、『リミテッドバリア』を消した光と同じ。

すなわちその効果で、第三皇子の唯一の抗いは、費えた。

「——っ!?!」

咆哮と共に、すでに『アポロヴルム』は第三皇子の目の前に陣取っていた。

その手には刃が握られ、すでにもう振り上げられている。

「……——ライフで受ける!」

バリアが展開され、直後にその刃が、第三皇子の最後のライフを砕いた。



「ありがとうございます！ いいバトルでした！」

「ああ。こちらこそ。いいバトルだった」

バトルフィールドから戻ってきて、ダンが最初に目にしたのは、とても目を輝かせた第三皇子の姿だった。

先ほどまで「あなたの力、ここで試させてもらいます！」と言っていた敵意剥き出しの姿の面影はなく、ただバトルを楽しんだカードバトラーの笑顔だけが残っていた。

「僕もまだまだですね。まさかあそこまで完敗するとは思ってませんでした」

「いや、十分強かったよ。俺の『リミテッドバリア』を警戒されていたら、勝てるか分からなかったしな」

熱い握手を交わして、2人はバトルの感想戦に入っていた。

そんな男子の熱い語らいを横目に立ち話をするのは、リゼとアンジュの2人。

「なんか、私がダンくんの旅に同行したいって話のはずなのに、この疎外感は何？」

「まあまあ、楽しそうだし良いんじゃない？ ……っというか！ そんなことより！

私の記憶を覗いたって何!？」

「へ!? あ、いや、ダンくんを解放するのに必要だったっていうか……いや! 必要以上には見てないから!」

「そういう問題じゃないじゃん! 勝手に日記とか見られるのとか嫌じゃん! 部屋に入られるの嫌じゃん! あゝ知らない人に私の記憶が……」

「い、一応秘匿情報にはしてるし、そんな広まることはないはずだって」

「見られたことそのものがダメなんだってばゝ! もう無理死ぬんだあゝ……」

執事のセバスがここを通るまで、しばらくこの場が賑わっていたのは、また別の話。



月夜のそこは、殺風景な湖だった。

ヘルエスタのはずれにある森の奥、人が一人として住んでいない、自然のみが栄えた大きな湖。

夜な夜なそんな大自然に囲まれた中で、あまりに文明的な格好をした少女が一人。

ラフなTシャツと短めのスカートに黒いブーツ。とても森の奥にいるとは思えない格好だったが、不思議とこの空間に溶け込んでいた。むしろ、彼女の存在でもって、こ

の空間は完成しているとさえ、錯覚してしまう。

そんな彼女は、岸の大きめの岩に座って、釣りをしていた。そばにはバケツが置いてあるが、中身がない。どうやら、特に何か釣れたようではないらしい。

「〜♪　〜♪」

何がそんなに気に入っているのだろうか、聞き惚れてしまうほどの彼女の鼻歌には、とても陽気な印象がある。

そんな彼女に、近づいてくる影が、2つ。

全身が黒い体毛に覆われた大型犬だった。2匹とも、夜に溶け込むように静かに彼女に近づいたが、彼女はそれにすぐに気付く。

やってきた2匹のうち1匹が、白い手紙をくわえていた。どうやら、これを彼女に届けに来たらしい。

彼女は2匹に笑いかけ、優しく頭を撫でて、その手紙を受け取った。

読み始めてすぐに、上機嫌だった先ほどまでの表情が、慈愛を帯びたものに変わっていく。

「アンジュはん、目え覚めたんやね。よかったよかった」

そのお尻から生えた黒い尻尾が、上機嫌に左右に触れる。

「あ、こっち来るんか……旅かあ。ええなあ」

読み終えて、大事そうに手紙を懐にしまう。
何を用意しようかとウキウキに考えながら、彼女はまた、釣れない釣りを再開した。

第3話「貪欲なる牙 全てを喰らえ！ グリードツグ！」 出立く迷いの森へく

リゼに案内されてやってきた場所にあったのは、巨大な船だった。

「うおくすつげえく。やつば皇族のプライベートシップは豪華だなあ」
「そうだな……さすがにここまで大きいとは思わなかった」

船と言いつても、海などの水の上を渡るものではない。ここには水は一滴も存在しないし、この外には水辺もないことをダンとアンジュは知っている。

この船は、空を飛ぶ。

「なくにいつてんのよー！」

パシン、と、2人はリゼに軽く肩を叩かれる。

「民間で売ってるもんでしょ。なんならレンタルで使えたりするじゃない」

「いやいや……民間人はそんな贅沢しないって。リゼってたまに金銭感覚おかしいんだよなあ」

「ええ、そうかな」

「まあそれにしても、3人でこの大きさはちよつと広過ぎるかもな」

余裕で一戸建ての民間住宅よりも大きいそれを、3人で並んで見上げている。

「大きいって言っても、この体積のほとんどは駆動力とか浮力とか発電システムとか、その他もろもろの機能のために使ってるから、実質的な広さは普通の住宅と大差ないと思うけど」

「いやだから！ 船が家と同じ広さなのがおかしいんだって！ 目立たないように特注のやつじゃなくて民間のシップを使うって言ってたけど、これじゃ結局目立つんじゃないの!?!」

「も〜。あんまりうるさいと置いてくよ?」

言いながらリゼは歩き出しており、ダンもすでにそれに続いていた。

「え!? ちよ、待ってよ2人とも!」



「ここがダンくんの部屋ね」

と言われて案内された部屋は、とても簡素なものだった。

まあ、今のダンには私物がないので、簡素なのは当たり前と言えば当たり前だろう。簡単なデスクとベッド、そしてクローゼットがある、そんな部屋だ。

一息ついて、ダンはベッドに腰かけた。

「空を飛ぶ船、か……」

なんだか、いつもそういうのに乗っているなど、少し乾いた笑いが出してしまう。

前の世界でも、この船に負けずとも劣らないほどに大きな船で旅をしていた。

そこでも、こんな簡素な部屋で生活していたのだ。

ただ、前の時と違うことがあるとすれば。

「……俺はまだ、やるべきことを理解していない」

それを見つげるための旅ではあるのだが、やはり、心が浮足立つというか、妙な焦燥感というか、地に足がついていないような感覚がとても落ち着かない。

目的は明確だ。元の世界に帰ること。

だが、そのために何をしたらいいのか、見当が付いていない。

(この世界でも「神々の砲台」を引けば、帰れるんだろうか)

あるかもわからない物を思い起こして、冗談交じりの思考が過る。

その時。

コンコン、とノックの鳴る音がした。

「誰だ」

「僕です！ 第三皇子です！ 渡したいものがあつて来ました！」

「ああ……今開けるよ」

ここ数日ですっかり聞きなれた声に応えて、リゼに渡されたりモコンのボタンを押す。

ウイーンという典型的な機械音を立てて開いたスライド式の扉の向こうに、第三皇子は立っていた。

「失礼します。どうです？ 部屋の居心地は？」

「ああ、悪くない」

その笑顔には、初対面の時に向けてきた敵意は微塵もない。彼の人懐っこい笑顔にも、ここ数日ですっかり慣れてしまった。

「あと3日ほどで出発だそうですよ」

「3日？ この船を動かすのにそんなにかかるのか？」

「ああいえ、リゼ姉さまとアンジュさんの荷物が、特にアンジュさんの荷物が多いようですね」

「ああ……」

そこまで聞いて、腑に落ちたように相槌をうつ。

女の子の荷物は多くなりがちなのはどこの世界でも変わらないのだろう。それに。

「確か錬金術師、だっけか？」

「ええ。自宅から研究道具を持ってくるらしく、それを運ぶのに時間がかかりそうです」
「なるほど」

そういえば錬金術のことを詳しく聞いてないな、とふと思い起こす。

人の記憶を覗いたり、『アポロヴルム』の封印を解いたり、この世界では錬金術で出来ることは多岐に渡りそうだった。

だが、それとは別に科学技術は十分に進歩もしている。この船も、通常の電力で動いているようだし、この部屋を照らす明かりも、電気で動いている。

科学とは別に錬金術もある。とても不思議な世界だ。

(まあ、グラン・ロロに比べたらそうでもないか……)

「そういえば、渡したいものって？」

「ああそうでした！ これを是非受け取って欲しいと思ってます！」

そういつて第三皇子が懐から取り出したのは、1枚のバトスピカードだった。

第三皇子はそれを、表をダンに見せるように差し出す。

「これは……」

それを、ダンはずぐには受け取れなかった。

何故ならそれは——。

「『煌星第一使徒アスガルディア』——受け取ってくれませんか？」

彼の、第三皇子の切り札だったからだ。

「良いのか？ お前のキースピリットだろ？」

「ええ。キースピリットだから、貴方に託したいのです」

カードバトラーにとつて、キースピリット——すなわちデツキの中心となる切り札とは、いわば分身と言つても過言ではない。それは、自らの体の一部と同義なのだ。

体の一部を差し出しているのだというのに、第三皇子の言葉には動揺などはなく、その口から出てきたのは、迷いのない覚悟の言葉だった。

「僕は今回、この旅に同行できません。非番が許されたのはリゼ姉さまだけです、皇族が2人も城を離れるのは、色々と問題がありますから」

けれど、と続ける第三皇子は、まっすぐにダンを見据えている。

「僕も、姉さんの力になりたいんです。幸い、『アスガルディア』はダンさんのデツキとも相性がいいですから……だから、姉さんを守るためのバトルで、僕のカードを使っていただけないでしょうか？」

「……そうか」

自然と、笑みを浮かべてしまった。

これまで、何度かカードを託されることはあつたし、それこそ仲間からキースピリットを預かったこともある。

だが、これほどまでに暖かい思いを託されたのは、初めてのことだった。「……分かった」

差し出されたカードを、丁寧に掴む。

「このカードに誓って、リゼは必ず俺が守る」

「はい！ よろしくお願ひします！」

◇◇◇◇◇

暗い、森の中にいた。

今は昼間のはずなのに、日の光が届かないほどに生い茂った木々が、暗闇の森林を作り上げている。

そこをひたすら、歩き続ける。

止まるわけにはいかなかった。

先ほども通ったような、見たこのない道が続く。

森から抜けるために。

歩みを止めるわけにはいかなかった。



数日後。

「よし！ みんな準備は大丈夫!？」

部屋中に響いたのは、リゼの掛け声だった。

その方に可愛いヒヨコのぬいぐるみを起用に乗せて、ビシッと胸を張って、ダンとアンジユの前に立っている。

諸々の準備が終わり、リゼとアンジユ、そしてダンは、この船の最も重要な部屋「管制室」に集まっていた。

ここでは、主に船の操縦が行われるらしい。

操縦と言っても、基本的には手動ではなく自動操縦らしく、操縦桿のようなものは存在しない。デスクに直接埋め込まれたコンピューターがいくつか存在するのみだった。

「ああ、問題ない」

「こつちも平気。待たせてごめんね」

リゼが中央に立っていて、それに向かい合うように、アンジユとダンが並んで立っている。

「よし！ これより10分後に離陸します！ 目的地は『迷いの森』！ その中心地の

湖！　まずはそこを目指します！」

「迷いの森……？」

「そっか。ダンには知らないよね」

そこから、迷いの森についてアンジュに説明された。

迷いの森とは、読んで字のごとく、入った人を迷わせ、その中に閉じ込めてしまう森のことだという。

ある程度の対策を用意しなければ、抜け出すことは不可能だと。

「あの森は綺麗な真円を描いてる。自然界でそういうことは普通起こらないけど、その森は奇跡的に真円を描いた。それが地脈に流れる魔力に反応して、簡単な魔法陣として機能してしまった。それがあの森が『迷いの森』になってしまった経緯かな」

つまり「入ったものを迷わせ、外へと出さない結界のような魔法」が常にかかっている森ということらしい。

何故そんなところに、というダンの問いにはリゼが応えた。

「これから、とこちゃんを迎えに行くの」

とこちゃんとは、『戌亥とこ』という獣人のことだ。

ダンも1度だけ会ったことがある。アンジュを助けた時に、リゼとともに遺跡で出会っている。その時は切羽詰まっていたし、すぐに捜索隊に拘束されたのでまともな会

話はしなかったが、ダンには彼女のことを覚えていた。

「その人が迷いの森の湖にいるってことか」

「そういうこと。入ったら迷うって言っても、空からなら問題ないからね。だからとこちやんのところにはこの船で行くよ！」

「なるほどな」

確認事は、いったん終わり。

ならば、のんびりする理由がある者は、この場にはいなかった。

「それじゃ！ しゅっぱーっ！」

かくして、馬神ダン一行の「ヘルエスタ放浪記」は、幕を開けたのだった。



迷いの静寂の中、ふと物音がする。

茂みの向こうだ。

歩みを止めて、茂みを凝視する。

警戒と緊張、そして恐怖に冷や汗が垂れる中、それは茂みの向こうから襲ってきた。

咄嗟に避けて、それと対峙する。

犬だ。

黒くて、大きい。まともにやりあって、人の身で勝てる相手ではない。

跳ね上がる心拍数に対し、冷静にその犬と向き合う。

背を向けて逃げることはしない。そんなことをすればすぐに追いつかれて食われるだけだ。

だから、目を反してはいけない。生き残るためには、攻撃を全て避ける必要がある。犬から逃げてても、死からは逃げられない。

そうして睨みあっているせいで、気付かなかった。

後ろから、2匹目に襲われる。

振り返った時には、もう遅かった。

回避不能。

大きく開いた口が、妙に瞳に焼き付いた。



「 Dankくんいた!?! 」

「 いやダメ……船中どこ探してもいない…… 」

管制室で顔を合わせたリゼとアンジュは、膝に手をつけて息を乱していた。

今は迷いの森のちょうど上空に差し掛かったところ。

上から入れば問題ないはずの迷いの森、その圏内に入った瞬間から、ダンの姿が船内から消えたのだ。

「いったい何が……今までこんなことなんて……！」

「……もしかして、初めて森に入ったら、強制的に中に閉じ込められる、とか……」

「そんな……！」

言われてみれば、2人とも初めて森に来たときは地上から森に入っていた。最初から上空から来たわけではない。

ダンのように、「初めて迷いの森に入る時、上空にいる」という状況を、2人は経験したことがない。

そもそも、自然に出来た地形で魔法が発動しているという状況が他に類を見ない。あまり調査自体も進んでおらず、迷いの森については知らないことの方が多い。

何が起きてても、不思議ではなかったのだ。

「どうしよ……こんなことなら森の外で集合すれば良かった……」

「過ぎたことは後で後悔しよ。迷いの森に行くと決めたあの時に誰も否定しなかったんだから、少なくともリゼだけのせいじゃない」

「……そう、だよな。今できることをしないと！」

「とりあえず、戌亥と合流しよう。森については戌亥の方が詳しいし、私たちが無暗に森に入って迷いでもしたらそれこそ取り返しがつかない」

「うん……！」

ヘルエスタ放浪記、その最初の1歩は、ダンの唐突な失踪に始まった。

◇◇◇◇◇

その牙が、彼を襲うことは無かった。

赤く光るカードが、彼を守ったのだ。

その摩訶不思議な出来事に、2匹の獣が距離を取る。

彼は、宙に浮くそのカードを掴もうと手を伸ばし、しかし、カードはそれから遠ざかるように森の奥へと入っていった。

こつちへ来い。

そう告げられているようだった。

彼は、駆け足でカードを追いかける。

それを、犬が追いかけることは無かった。



「いた！ 戌亥だ！」

管制室の中。その最も大きいモニターに、迷いの森の中心地、そこにある湖が映し出される。

そこで、普段着の戌亥とかが、釣りをしているとところが確認できた。

そこから船を下ろしていくと、戌亥がこちらに気付いて、大きく腕を振ってくれていた。

しかし、彼女たちはそれぞれどころではない。

垂直にゆっくりと降りていく飛行艇にイライラし、着地と同時に管制室から出て、船から降りる。

「とこちゃん！」

「戌亥！」

血相変えて走ってくる2人に、戌亥は顔をかしげるだけだった。

「どないしたん？ 2人も。なんかあつたん？」

「やばいんだって！ ダンが迷いの森で行方不明になっちゃったって！」

「全然取りが追えないの！ もう私たちじゃどうしたらいいか分かんなくて！」
「ああ、ダンはん？ 迷つとつたん？」

胸倉でも掴んでくるんじゃないかと思うくらいの勢いで迫ってくる2人を、両手の平で「まあまあ」と制する。

しかし、迷いの森で人がいなくなることの恐怖を知っている2人は、それくらいじゃ落ち着くはずもなく。

「ねえとこちゃん！ ダンくんどうやって探せばいいの!？」

「迷いの森って言ったって空間がねじ曲がってるわけじゃないから、魔術的な対策さえすればあとは痕跡をたどって探せるはずなんだ！ だから取り返しをつかなくなる前に早くみつけないと！」

「いや、あんな2人とも、とりあえず落ち着かん？」

「これが落ち着いていられるか!!」

2人に同時に叫ばれて、キーンとなつてしまった耳を思わずたたむ。

しかめっ面もしてしまい、そんな緊張感のない戌亥の様子に、2人の焦りはヒートアップしていく。

「とにかく一緒に来て戌亥！ 迷いの森なら戌亥が1番詳しいよね！」

「いや、だからな、アンジュはん」

「早くしないと！ ここにはやばい動物とかもいるらしいし、もし襲われでもしたら！」
「せやからな、リゼはん」

「はやくしないと！」

ダメだ。話が出来る状態じゃない。

そう諦めた時、その会話を水を差す人物が現れた。

その姿を確認して、戌亥の耳がピンと立ち上がる。

戌亥はその人物に大きく腕を振って。

「お！ ダンはん！ 釣り用のバケツ見っこうた!？」

「ああ。これで良かったか？」

「せやで！」

2人は盛大にずっこけた。



端的に言えば、ダンは無事だった。

アンジュの「初めて森に入ったら、強制的に中に閉じ込められる」という推測は当たっていて、迷いの森の上空に差し掛かった瞬間に、ダンは強制的に迷いの森の中に転移さ

せられた。

そこで戌亥の愛犬である「バン」と「ケン」と会ったりしたそうだが、最終的には『アポロヴルム』のカードが戌亥のところまで案内してくれたという。

それで、リゼとアンジュの乗った船よりも早く湖につき、戌亥と会ったダンは、戌亥に誘われるままに釣りにお供していたらしい。

先ほどのバケツは、釣りあげた魚を入れておくためのもの。釣りを始める時に用意し忘れていたものを、戌亥が頼んで運んでもらっていたということだった。

「はあ……なんか、どっと疲れが……」

そう言つて、その場に横たわったのはアンジュだった。リゼも疲れが顔に出ているが、さすがに外で寝そべることに抵抗があるらしい。

湖の周りは綺麗な緑色の芝生に覆われていて、そこに身を預けているアンジュはそこに心地よさそうだった。

「ああ、しばらくは動きたくない……」

「私も……まさか旅の初日からこんなアクシデントに見舞われるとは思わなかった……」

「あは、2人ともお疲れさん」

アンジュとリゼの様子を見るに、しばらく船に戻ることは無いだろう。

戌亥の荷物を船に運ぶにも、ダンと戌亥の2人だけだとかなり時間を要するかもしれない。

しばらくは暇になるかもしれないと、そう思っていたダンだったが。

「あ、せやったらダンはん！」

2人の様子を見ていた戌亥が、不意に振り返り、ダンに声をかける。

そうして、流れるような動作でポケットからそれを取り出すと、見せつけるように自らの力をの横に構え。

「せっかくやし、2人が回復するまで、バトルでもせえへん？」

「……ああ、そうだな。受けて立つ」

ダンに断る理由は、あるはずもなく。

「ゲートオープン！ 解放！」

戦う2人は、ゲートの中へと消えていった。

強奪く放たれる三つ首く

「先攻は私が貰うで。スタートステップ」

戌亥の第1ターン。

彼女はドローステップでカードを1枚引くと、そのままゆっくりとした手つきでそれを手札に収める。

そして左手に持つその手札を眺め、右の人差し指で一番左のカードに触れる。しかし、手に取ることはせず、今度は隣のカードに指をかけ、また指を離す。

「うーん……どないしようか……」

そして3枚目のカードを指で触れ、やはり離して。

「うん。やっぱ1枚目はこれやね」

2番目に触れたカードを手にとった。

「ネクサス『海帝国の秘宝』を配置！」

その宣言と共に、バトルフィールドに地響きが鳴る。それは、戌亥の後ろに建造物を作った。

水しぶきを伴って現れたそれは、三頭の竜の銅像。その3つの首が、中央の赤い〃何

か”を囲うように造られている。

その何かは赤く光っていた。宝石ではない。宝石は自ら輝くことは無い。正しく秘宝。

聳え立つ竜の銅像を背に、戌亥はさらに一枚、カードを取る。

「そんで、『バースト』セットしてターン終了やね。そっちのターンでええよ？」

「青のネクサス、しかもダブルシンボルか……スタートステップ！」

戌亥の配置したネクサス『海底国の秘宝』は、青のシンボルを2つ持っている。自分の手札を相手の効果から守る効果もあるが、やはりこのネクサスの真価はそのシンボルだろう。

スピリットではないためライフを削ることには何も関係がないが、場にシンボルが増えることは、手札のカードのコスト軽減につながる。『海底国の秘宝』は、コストを軽減することにおいて、一枚で2枚分の働きをしている。

それが、第1ターンに配置されたことは、とても幸先がいいと言える。仮にこのターンでダンがアタックしてライフを1つ削れば、次のターンに戌亥が使えるコアの数は6つ。2軽減込みで、7コストのスピリットに手が届く。

うかうかしていたら、エース級のスピリットに蹂躪されるかもしれない。

そんな状況を把握して、ダンが取ったプレイは。

「ドローステップ。メインステップ。『レイニードル(R)』をLv1で召喚。そしてこのスピリットは系統：『星竜』が召喚された時、3コストスピリットとして召喚できる。『ファルスクロス・ドラゴン』を、こちらもLv1で召喚」

赤のシンボルが2つ現れ砕ける。

出現したのは、空中を這う蒼い竜と、燃え盛るほどの赤で染まった肌の人型の竜。

フィールドに出現したそれらは咆哮を上げ、それを聞きつつ、ダンはまだ一枚カードを取る。

「【バースト】をセットして、アタックステップ！ 『レイニードル』！ 行け！」

「おお、アタックするんか」

そんな状況を把握して、ダンが取ったプレイは、攻め。

返しのターンにキースピリットを展開されるリスクを背負ってもなお、いや、早期にキースピリットされうるからこそ、攻めるなら今しかない。

その命令を受けて、『レイニードル』が宙を這う。一直線に戌亥へ向かっていき。

「うん、ライフで受けるよ！」

戌亥の前に赤いバリアが展開され、それに『レイニードル』が噛みつく。

ライフを砕くその衝撃に、戌亥はとっさに耳をたたみ片目を閉じる。

しかし、そのライフ減少で、【バースト】が開く。

「ライフ減少で【バースト】！ 『神海賊船カリユブデス号』の【バースト】効果で、ダンはんの場のスピリット全てのシンボルを0にする！」

突如、フィールドに波が押し寄せる。

戌亥の【バースト】効果によって現れたその荒波は、戌亥の元から溢れ出るようにダンのスピリットに襲い掛かる。

しかし。

『レイニードル』を守るかのように『ファルスクロス・ドラゴン』がその波に立ちはだかる。『ファルスクロス・ドラゴン』はその両腕をクロスさせて、その波を受ける。

波が『ファルスクロス・ドラゴン』を覆いつくし、その姿が見えなくなつた頃に、その波が一斉に吹き飛ばされた。そこに残るのは、力を解放し、腕を広げ微動だにしない『ファルスクロス・ドラゴン』だけだった。

「あ、ありや？」

『ファルスクロス・ドラゴン』の効果発揮。俺のアタックステップの間、系統：『星竜』を持つ自分のスピリットは、相手の【バースト】効果を受けない。『レイニードル』と『ファルスクロス・ドラゴン』はシンボルを失くすことは無い」

戌亥の【バースト】効果は、『ファルスクロス・ドラゴン』によって防がれた。

「まあええか。この【バースト】効果発揮後に、このスピリットを【バースト】召喚する

よ！『神海賊船カリユブデス号』！Lv1で召喚するよ！
波が消えたそのフィールドにそれは現れた。

海賊船を自称するそれは、巨大なクラーケン。頭部に帆のようなものがデザインされており、その額には巨大な槍のようなものが供えられた船首がある。

『神海賊船カリユブデス号』はフィールドに現れた時、その力を誇示するように咆哮を上げ、その触手でその地を踏みしめた。

「BPは7000ある。BP4000の『ファルスクロス』より高いで」
「……ターンエンドだ」



このタイミングで、観戦席に現れる人物が2人。

リゼとアンジュの様子は、もう回復できているようだった。疲れたと言っても精神的なものだったからかだろう。もうすっかり元気な様子である。

アンジュ「おお、やってんねえ。今は戌亥の第3ターン？」

リゼ『海底国の秘宝』とスピリットが一体……もう出るかな？ とこちゃんのキース
ピリット！」



「スタートステップ。コアステップと……ドローステップで1枚引いて、リフレッシュステップと……」

ゆつたりとターンを進めて、戌亥は自分の手札を見る。

前のターンはいくつかの選択肢で迷っていた彼女だったが。

「ほんで……メインステップ！」

今度は迷わず、1枚を取る。

「全てを喰らえ！ 獰猛で気まぐれな地獄の番犬！ 『戌の十二神皇グリードッグ』！
レベル2で召喚！」

それは、十二支の『戌』の化身。

地獄を守るその獣は、鎖に繋がれ、解放されることは決してない。

しかし、彼女の声に、その獣は簡単にその鎖を引き千切る。

解放されたその力は青い炎で道を作り、そこを驀進するその姿こそ。

——『戌の十二神皇グリードッグ』

フィールドに現れた『グリードッグ』の咆哮により、青い炎の道は消え去った。

「不足コストは『カリユブデス号』に乗せていたこのコアから使う。しゃーないんやけど、『カリユブデス号』は消滅やね」

炎が消えるのと同時に、それに焼かれるようにして『カリユブデス号』も姿を消す。

『グリードッグ』Lv2のBPは15000。

「第3ターンでもうキースピリットか」

「この子はせっかちやからね。はよ出んと、食べたいもんが食べられへんかもしれんからな」

三つ首の獣、その三対の瞳が、まっすぐにダンを捉える。

息を荒げるその姿は、大人しくマイペースな戌亥の正反対のように思える。しかし、不思議と並び立つその姿は、まるで最初から1つの存在であったかのように違和感がない。

「さあ行くよ！ 『グリードッグ』！ アタックスステップ！」

戌亥が盤面のカードを倒して、『グリードッグ』が走り出す。

そして、その咆哮が魂を伴って、青き波動となってソウルコアと共鳴する。

「……………！ 何が……………」

『グリードッグ』と共に光の波を放つソウルコアが浮遊を始め、それが戌亥の周りと飛び回る。

「永劫の時を生きる命の結晶……わが身に宿りて、地獄の焔を現世に解き放つ……！」

そのソウルコアは、目にもとまらぬ速さで戌亥の周りに輪を作り、次の瞬間。

『『グリードッグ』のアタック時効果！【封印】！』

ソウルコアが、戌亥の体に打ち込まれる。

一瞬、その衝撃にふらつく戌亥だが、すぐに体勢を立て直す。

打ち込まれた胸元を手で押さえる戌亥の盤面、そのライフ、ソウルコアが移動している。

「ソウルコアをライフに……！」

乗っていたソウルコアを失ったことで、『グリードッグ』はLv1にダウンする。

しかし、Lvが下がったのにも関わらず、その走る速度は衰えることなく、否、より加速する。

「ルール上、本来ソウルコアはライフには置けない。しかし、【封印】はその不可能を可能にする。そしてうちの子は、この【封印時】にのみ使える能力があるんやで」

静かに、そして不敵な笑みをもってそういった声に応えるように、『グリードッグ』がまた叫ぶ。

その咆哮が空気を震わせ、その振動がダンのもとに届いた時。

「……！」

その手札が吹き飛ぶ。

ダンの手から離れ、宙を舞った手札2枚は、ダンの目の前で静止すると、その表面を戌亥に向けた。

その2枚は、『フレイムスパーク』と『太陽皇ヘリオスファイア・ドラゴン』。

「おお、ええもん持つとるねえ。『グリードッグ』！ お待ちかねのマジックやで！」

『フレイムスパーク』が、消える。

驚くダンを置いてきぼりにして、赤い欠片となった『フレイムスパーク』は走る『グリードッグ』へと向かって良き、その欠片を『グリードッグ』が喰らう。

三つある首がそれぞれその欠片を喰らった時、その牙に、雷と炎が宿る。

直後、『グリードッグ』は咆哮とともに飛び上がると、赤い炎のブレスを吐き出す。それは瞬間間にダンのフィールドを覆い、瞬時にダンの2体のスピリットを破壊した。

「これは……まさか、俺の手札からマジックカードを使ったのか……！」

トラッシュから飛び上がった『カリユブデス号』を掴んだ戌亥が返したのは、甘い笑みだけだった。



リゼ「出た！『グリードッグ』の「強奪」！」

アンジュ「相手の手札からマジックカードを破棄して、その能力をノーコストで

使用する……いつみてもアドバンテージがえぐいんよなあ」

リゼ「しかも今回は使ったマジックがすごい噛み合ってたね……『フレイムスパーク』
って、確かルークとの戦いでもダンが使ってたよね？」

アンジュ「そうだったかな……BP5000分の相手スピリットを破壊して、しかも
トラッシュからスピリットまで回収するマジック。ダンの場合はBPの合計
が

ちようど5000だったし、戌亥のトラッシュには不足コスト確保のために
消滅した『カリユブデス号』がいた。しかも『カリユブデス号』は

ノーコストで使える「バースト」スピリットだから、単純に使えるカードが
1枚増えたことになる」

リゼ「仮に次のターンで体勢を立て直されても、防御も完璧って感じかあ」

◇◇◇◇◇

ダンは一瞬、自らが伏せた「バースト」に目をやって、しかし何もしなかった。

(破壊時【バースト】と違^{ちが}うかったか。出来ればこのターンで踏みたくはあらへんけど)
「そしてこれが『グリードッグ』のメインアタックやで！」

壮絶なアドバンテージを得た『グリードッグ』のアタックだったが、その実、このターンが終われば戌亥は無防備だ。

ブロッカーは無く、使えるコアも、【バースト】もなし。

もしも、ダンの場に伏せられた【バースト】が、起死回生の切り札級のカードならば、このターンで発動されればそのまま押し切られて負けることもある。

しかし、少なくとも【破壊時】【バースト】ではないようだ。

あとこのターンに発動させてしまう【バースト】条件は【ライフ減少時】だが。

「くっ……ライフで受ける！」

ダンの目の前に青のバリアが展開され、『グリードッグ』が良き勢いよくそこに噛みつく。

その衝撃がダンのライフを砕き、ダンには飛ばされそうになるのをフィールドに手すりにつかまって耐える。

これで、ダンのライフは4つ。そして。

(減少時【バースト】とも違^{ちが}うんか)

対する戌亥は、【封印】によりソウルコアを得て、ライフは5つ。

ライフだけでみれば、まだまだゲームは始まったばかりの互角の勝負。だが、その実
状況は圧倒的に戌亥が有利だった。

戌亥の場にはネクサスとキースピリットがあり、手札は4枚。対してダンの場には
カードはなく、「バースト」と手札が1枚ずつのみ。しかも手札は戌亥に見られている。
「ターン終了。ダンはんのターンやで」

窮地く地獄の牙は3度喰らうく

ダンは一瞬、自らが伏せた「バースト」に目をやって、しかし何もしなかった。

(破壊時「バースト」と違^{ちが}うかったか。出来ればこのターンで踏みたくはあらへんけど)
「そしてこれが『グリードッグ』のメインアタックやで！」

壮絶なアドバンテージを得た『グリードッグ』のアタックだったが、その実、このターンが終われば戌亥は無防備だ。

ブロッカーは無く、使えるコアも、「バースト」もなし。

もしも、ダンの場に伏せられた「バースト」が、起死回生の切り札級のカードならば、このターンで発動されればそのまま押し切られて負けることもある。

しかし、少なくとも破壊時「バースト」ではないようだ。

あとこのターンに発動させてしまう「バースト」条件は「ライフ減少時」だが。

「くっ……ライフで受ける！」

ダンの目の前に青のバリアが展開され、『グリードッグ』が勢いよくそこに噛みつく。その衝撃がダンのライフを砕き、ダンは飛ばされそうになるのをフィールドに手すりにつかまって耐える。

これで、ダンのライフは4つ。そして。

(減少時「バースト」とも違^{ちや}うかった……)

対する戌亥は、「封印」によりソウルコアを得て、ライフは5つ。

ライフだけでみれば、まだまだゲームは始まったばかりの互角の勝負。だが、その実状況は圧倒的に戌亥が有利だった。

戌亥の場にはネクサスとキースピリットがおり、手札は4枚。対してダンの場にはカードはなく、「バースト」と手札が1枚ずつのみ。しかも手札は戌亥に見られている。

「ターン終了。ダンはんのターンやで」
「つ……スタートステップ」

ダンの第4ターン。

(青のデッキは、数より質を重視するカードが多い。手札を増やしたり、小型を並べたりが苦手な色だが、その分1枚1枚のカードパワーは高い)

だからこそ、この状況は見かけの枚数差よりもかなりまずい。

「コアステップ……」

(青のカードはただでさえ1枚1枚のパワーが高い上に、『グリードッグ』の効果でかなりアドバンテージに差を付けられた……仮にこのターンでアドバンテージを回復できても、青のパワーを押し付けられてジリ貧になりかねない。それに)

「ドローステップ」

ダンはいいたカードを手札に加えて、思索する。

『グリードッグ』の効果……あれによって、俺の手札は毎ターンピーピングされる。手札も少ない以上、俺の手の内は全て晒されていると言つても良い)

ピーピングとは、通常は見れない相手の手札を、カードの能力によって見ること。『グリードッグ』の「強奪」の能力は、その副次的な効力としてそれを可能にしている。

手札を全て確認できるこの能力は、ダンの戦術の全てを見透かす。例えば、カウンターを構えて相手を罠に嵌めることなど不可能だ。

ただし、このピーピング能力には現状、2つの穴がある。

1つは、ピーピング後にドローしたカードは分からないこと。

そしてもう1つは、ピーピング前に伏せられた「バースト」。

つまり。

(この「バースト」は、戌亥にはまだ分からない……間違いなくこのバトルの切り札になる)

伏せた「バースト」を切り札に決め、しかしその「バースト」には一瞥もしない。

すでに状況は絶望的なピンチだ。それゆえに、どれだけ細かいものだったとしても、可能性を作り続けなければならない。そしてそれを、相手に悟らせてはいけない。

「メインステップ！ 『煌星竜コメットヴルム』をLv2で召喚！」

赤のシンボルが現れ砕ける。黄金の身に白銀のブースターを背負ったドラゴン。

フィールドに降り立ち、その足でしつかりと地面を掴んだ時、『コメットヴルム』はその『ヴルム』独特の瞳で敵を見据える。

「アタックステップ！ 『コメットヴルム』でアタック！」

その声に応え、『コメットヴルム』が地面を蹴る。

「『コメットヴルム』のアタック時効果。デッキから3枚オープンし、系統『星竜』を持つスピリットカード1枚を手札に加える」

オープンされたカードは『マグネティックフレイム』『太陽皇ヘリオスファイア・ドラゴン』『リーフジャマー』の3枚。

この中で、系統『星竜』を持つスピリットカードは『ヘリオスファイア・ドラゴン』のみ。それがダンの元へ浮遊し、ダンがそれを掴む。

そして、オープンされた『マグネティックフレイム』が、輝きを放つ。

「さらに、赤の効果でデッキからオープンされた『マグネティックフレイム』は手札に加わる。そして残りは破棄だ」

光を放つ『マグネティックフレイム』を掴み取り、残された『リーフジャマー』がトラッシュへ落ちる。

「そしてこれがメインのアタック！」

『コメットヴルム』は、もうすでに、戌亥の前まで接近していた。

その口に炎を溜めて、今にも吐き出そうとする、その瞬間だった。

「ええで！ ソウルコアで受けるよ！」

戌亥の胸元、そこへと溶け込んだソウルコアが再び姿を現す。

一瞬の輝きの後に、その輝きがバリアを展開する。

普段のドーム状のバリアではない。平らなバリアは、中央が赤く、それを白銀のエネルギーが覆っている。

そのバリアに、『コメットヴルム』がブレスを放つ。

衝撃。そして、破裂。ソウルコアによって形成されたバリアは砕かれ、しかし、その破片が戌亥の盤面、そのリザーブへ収束していく。

その破片が、リザーブでソウルコアを形成して、このアタックは終わる。

「ソウルコアか普通のライフか、受けるライフを選ぶのか……！」

「せやで。そして、こうして戻ってきたソウルコアを、『グリードッグ』はもう1度【封印】出来る」

「疑似的なライフ回復か……ターンエンド」

◇
◇
◇
◇

アンジュ「おお珍しいね。あのダンがここまで何もできないって」
リゼ「これはどこちゃん勝てそうかな？」

◇
◇
◇
◇

戌亥の第5ターン。

(まあ、普通にやったら勝てるよなあ……)

「メインステップ。『海底国の秘宝』をLv2に、そして『グリードッグ』をLv3にアツプ。んでもって、『バースト』も伏せようか」

能天気に見える素振りでも盤面を整える戌亥だが、しかしその実、油断は全くしていない。

(ゆうても、あの【バースト】がどうしてもなあ)

戌亥もまた、この勝負の行方は、ダンの伏せた【バースト】に左右されることを理解していた。

故に、その発動条件を予測する。

現状、「スピリットの破壊時」と「ライフ減少時」ではないことは分かっている。

つまりあるとすれば、有名な「バースト」条件だと「スピリットの召喚時効果発揮後」か「手札増加後」だろう。

戌亥は自分の手札に視線を向ける。

4枚ある手札のうち、目につくのは『三叉神海獣トリアイナ』と『ストロングドロー』だった。

その2枚は、前者は「スピリットの召喚時効果発揮後」、後者は「手札増加後」の「バースト」にそれぞれ引っかかる。

2枚とも、使えるならば是非とも使いたい強力なカードではあるが、使えば「バースト」を踏む可能性を孕んでいた。迂闊には使えない。

（とはいえ、尻込みしてもいつか対抗策を引かれるかもしれへん。早めに思い切りはせんとな）

思案しながら、戌亥はフィールドの『グリードッグ』に視線を向けた。
3つある首、その右の首の右目とだけ、少し目が合う。

その目には高揚。早く攻撃させてくれという思いが、戌亥に強く向けられている。

いつものようにせつかちな相棒だ。あまり人には流されないタイプの戌亥だが、そんな彼女ですら強引に連れまわそうという勢いのある、世話のかかる愛犬。

いつもなら、そんな目を向けられても気にせずマイペースにプレイしているが。

「ま、考えても埒が明かへんしな！ アタックスステップ！」

今回は、この子に好きに暴れてもらおう、と、『グリードッグ』のカードを倒す。

「『グリードッグ』！ 餌の時間やで！」

そして、見えない枷が外れたように、急加速で『グリードッグ』が駆けだす。

「【封印】を發揮！ この子のソウルコアを私のライフへ！」

再び『グリードッグ』からソウルコアが浮上し、目にもとまらぬ速さで戌亥の周りに輪を作って、そして戌亥の体内へ打ち込まれる。

少しよろける戌亥だが、それに構いもせず、

「そして【強奪】や！ 『グリードッグ』！」

直後、『グリードッグ』が咆哮し、それが衝撃波となってダンを襲う。

その衝撃が、身構えたダンを過ぎて、その手に持った手札を露わにする。

公開された手札は、前のターンにコメットヴルムで加えられた『ヘリオスファイア・ド

ラゴン』と『マグネティックフレーム』。そして、『リミテッドバリア』の3枚。

「うーん。あんま美味しくあらへんけど、まあ使われる前にこれやな」

そうして選んだカードは、『リミテッドバリア』。

指定されたそのカードは、白い破片となって『グリードッグ』に喰われる。

「つ……だが、『リミテッドバリア』の効果は、今使っても意味はない」
「せやね。けど、手札を減らしたっていうんが重要なんよ」

その白い破片を喰らった『グリードッグ』がまた、走りながら咆哮する。
力が、青い光となって『グリードッグ』を包み、

「回復や！ 『グリードッグ』！」

そして、その光は消える。

盤面では『グリードッグ』が回復し、そして、フィールドでは何事もなかったかのよう
うに『グリードッグ』が駆ける。

「つ………！ これは………！」

『グリードッグ』のLv3効果！ 相手の手札が減るたびに、ターンに3度まで回復す
るんよ！」

地獄の番犬。その牙は3度噛みつく。

1度目の牙が、ダンに迫る。

「つ！ ライフで受ける！」

青のバリアが展開され、そして衝撃がダンを襲う。

ライフのコアが碎かれる音が響き、『グリードッグ』がその場からいったん離脱する。
残りライフは3。

だが、まだ終わらない。

「うちの子はまだまだ食べ足りとらんよ！　ダンはん！」

「っ！」

離脱して、そしてすぐに駆けだす。

咆哮がダンの手札を吹き飛ばし、【強奪】の効果で『マグネティックフレイム』が赤い破片にされる。

それを喰らい、青い光を纏って、『グリードッグ』が加速する。

【強奪】でまたダンはんの手札が減ったんで、うちの子は回復するで」
猛スピードで迫ってくる三つ首の獣に対し、ダンには為す術はなく。

「それもライフだ！」

青いバリアに、2度目の牙が立てられる。

残りライフは2。

衝撃にゆらつき、ギリギリで耐えるダンに構うことは無く。

「3度目や！『グリードッグ』！」

その声を受けて、三度走り出す。

三つ首から放たれた咆哮が、ダンを襲い手札を奪おうと襲い掛かる。

しかし、今回だけは、手札が吹き飛ばされることは無かった。

「手札にもうマジックはない……【強奪】は無意味だ……！」

「せやね。【強奪】だとマジックカードしか食べられへんし。でも、ライフは貰うで！」

「っ……………」

もうすでに、『グリードッグ』はダンの目の前に迫っていた。

ダンの宣言を待つこともなく、青いバリアが展開され、その牙が食い込む。

衝撃が、体勢の維持できていないダンを襲い、そしてライフを砕く。

ライフを砕いたその衝撃で、ついにダンが膝を付いた。

「……………つさすがに、Xレアの連続アタックは効くな」

「おっと、大丈夫？ 無理そうなら休んでもええよ？」

先ほどまでの食って掛かろうとした態度とは一転して、寄り添うような声でダンを気遣う戌亥。

遣う戌亥。

だが、ダンは余計な心配だと伝えるように、ゆっくりと立ち上がって見せた。

「いや問題はない。バトルを続けてくれ」

「そっか。ならええけど。まあ、ゆうてもやることあらへんからターンエンドやね」

残りライフは、1。

アドバンテージだけを奪われた前のターンに対し、今回はライフも大量に奪われた。

逆転のカードを引く時間は、もう残されていない。

奪えないもの～未来へ仕掛けた切り札～

アンジユ「おーおー！ 今日の日亥は荒れてんねえ！」

リゼ「仮に『グリードツグ』を処理できても、手札はほとんどなくて、

ライフも1つ。とこちゃんのパーストは前のターンに回収した

『カリユブデス号』だろうから攻撃も通りにくい……アンジユなら

ここから逆転できる？」

アンジユ「いや流石にむり。もうちよつとゆっくりターンが伸びるなら

ワンチャンあるかもだけど、あんだだけ回されたらちよつとお手上げだわ」

リゼ「だよね……でも」

アンジユ「すごいよねダン。まだ諦めてない」

◇◇◇◇◇

ダンの第6ターン。

「メインステップ！ 『太陽皇ヘリオスファイア・ドラゴン』を召喚！」

赤のシンボルが現れ砕ける。現れたのは、太陽のような金色の炎。それを中心に、腕が、足が、そして翼が姿を見せる。

一見すればロボットに見違えるほどのメカメカしい武装をした『ヘリオスファイア・ドラゴン』が、咆哮と共にこの地へ降り立った。

「続いてマジック『バスタースピア（R）』！」

ダンのその手に持ったカードから、紅の矢が放たれる。

その矢は一直線に戌亥に向かい――。

「つとー あぶな!?!」

その後ろ、三つ首竜の銅像が囲う『海底国の秘宝』を貫いた。

爆発とともに破壊されるそれを流し見に、戌亥は爆風で煽られる髪や衣服を押さえながら、ダンを見る。

「ネクサス一つを破壊し、それが相手のネクサスならば2枚ドロウする」

「ええんか？　うちの子がまた食べてまうかもしれへんで」

爆風に煽られ、手でその犬耳をかばう戌亥は、しかしその表情は挑発的。

「そうかもな。だが、カードがなければバトスピは出来ない。この手に持つ手札が、フィールドのカードが、そして――このドロウが俺の可能性の全てだ」

そう、可能性。

バトスピの盤面には、計り知れないカードの情報が複雑に入り組んでいる。そして、その複雑さが新たなコンボを生み、その情報を掴み取った時、プレイという形で相手に襲い掛かる。

ダンは、少なかった手札を補充した。

それはつまり、可能性が広がったということ。

勝利のためには、勝利への可能性を掴まなければならない。その、掴む可能性が増やすために、このドローは重要だ。

しかし。

「そうか。でも、そんな可能性も、掴めへんのやら無いと変わらんで」

今、ダンの前に立ち塞がっているのは、可能性を喰らう地獄の番犬。未来への可能性を噛み砕き、我が物顔でその効果を使う獣。

「ああ。だから俺は、掴める可能性がある限り、諦めることはしない。アタックステップ
！」

そのアタックステップの開始により、『ヘリオスファイア・ドラゴン』の効果により使われたトラッシュのコアが全て『ヘリオスファイア・ドラゴン』に乗せられ、Lv3へと上昇する。

『コメットヴルム』！ 行け！

その声を受けて、『コメットヴルム』は飛翔する。

「アタック時効果。デツキの上から3枚をオープン」

捲られたカードは『ゴッドシーカー アルファレジオン』『ミラージュ・ワイバーン』『ジュライドロー』の3枚。

「『アルファレジオン』を手札に加える。行け！ 『コメットヴルム』！」

弾かれた『アルファレジオン』を手に取るダンの言葉に、『コメットヴルム』が加速する。

「ソウルコアで受けるよ！」

戌亥の目の前まで来た時に、戌亥の中からソウルコアが再び姿を現す。

それが瞬時に独自のバリアを形成し、『コメットヴルム』の吐く炎のプレスから戌亥を守る。

バリアが割れ、その破片がソウルコアへと戻る傍らで、『コメットヴルム』はダンの元へと戻っていった。

「バーストは特にあらへんよ。『ヘリオスファイア^そ・ドラゴン^子』もアタックしてみる？」

「……ターンエンドだ」

「そうかあ。ならターンは貰うよ。スタートステップ！」

そうして向かえた、戌亥の第7ターン。

メインステップに、戌亥は『巨人王子ラクシユマナ』をLv1で2体召喚する。このスピリットは手札交換を行うアクセルを持つているが、バーストを警戒してそれを使うことは無く、ダンの残ったライフ1つを奪いきるべくアタッカーとして召喚した。

そして、ソウルコアを『グリードッグ』に置き。

「アタックステップ！ 行くよ『グリードッグ』！ 【封印】と【強奪】や！」

盤面のカードを倒し、『グリードッグ』が走り出すのと同様、そのソウルコアが戌亥に取り込まれ、その咆哮がダンの手札を巻き上げる。

公開されたカードは、『ゴッドシーカー アルファレジオン』『太陽神弓サンバースト』『クエーサーレイン』の3枚。

「ブロッカーは破壊できなさそうやね。でも、アタッカーは充分！ 【強奪】の効果で『クエーサーレイン』を破棄してそのフラッシュ効果を発揮！ BP10000以下の相手スピリット1体を破壊する！ 対象はBP5000の『コメットヴルム』！」

破片へと割れた『クエーサーレイン』を『グリードッグ』が喰らい、そしてその口から炎があふれ出す。

その場から飛び上がり、『グリードッグ』がその口を開くと、そこから炎の星が矢のごとく無数に降りかかる。

その矢に抵抗することも出来ず、『コメットヴルム』は貫かれ、破壊された。

「アタックステップ中に相手の手札が減ったんで、『グリードッグ』は回復。そしてこれがメインの……なっ！」

フィールドを駆ける『グリードッグ』が、一瞬淡く光り、回復する、その向こう側。

『コメットヴルム』の破壊による爆風へのせいで見にくくなっているダンのその盤面。

——赤い稲妻が、走る。

「スピリット破壊により【バースト】発動！」

「なん……え？」

その稲妻が、ダンの声に呼応して、伏せられた【バースト】を盤面から弾く。そうして翻ったバーストは、表面を上に向けて盤面に戻る。

伏せられていたのは。

「マジック『双光気弾』のバースト効果により、カードを2枚ドローする」

「んなアホな……『双光気弾』やって？」



リゼ「嘘?! 破壊時バーストなの?! しかも『双光気弾』?!」

アンジュ「タータン目からセットしてたから、最初の【強奪】で

『フレイムスパーク』を打たれた時にも使えたはず……あの時から
ずっと温存してたってこと!？」



「【強奪】の効果を初めて受けた時から、この瞬間を待っていた」

「っ……っ！」

爆風が晴れ、そこに見えるダンは、真っ直ぐ成亥を見つめていた。

「何で最初に使わなかったん？ あの時使つとれば、ハンデスされた手札も回復して、私のネクサスも割れたやん？」

「あの時はコアも少なかったからな。ドロウしたカードを確実に使えたわけじゃない。そうして使えずに溜まってしまった手札を、【強奪】で蹂躪されてしまったらドロウした意味がなくなる」

自身の判断。その根拠を、彼は淡々と語る。

「そして何より、【強奪】は俺のマジック以上に俺の戦術を露わにされる。フラッシュイミングの1枚のマジックや、伏せられたバースト1枚で状況がひっくり返るバトルスピリッツにおいて、手札が公開されるのは致命的だ。逆転の一手が確実に潰される」

淡々と語るダンの言葉を聞いて、戌亥の頬に冷や汗が垂れる。

「だが、『グリードッグ』にも奪えないマジック—— 知ることのできない手札がある」

「そ、それは……」

「未来だ」

その手が、ドロースすべくデッキに添えられる。

「み、未来？」

『グリードッグ』は現在しか喰らえない。この瞬間、このドローに対してだけは、『グリードッグ』は無力だ。だから俺は、自分のデッキに—— 未来のドローに、切り札を託すことにしたんだ」

戌亥が無意識に1歩、後ずさる。

「……ゆうても、その手札に切り返しのカードがないのは今見たし、そのドローで何も引かんかったら意味ないんと違うの？」

「ああそうだ。だが、このタイミングで引かなければ結局『グリードッグ』の餌になるだけだ。俺はここにかけるしかない」

語られる内容のあまりの恐ろしさに、ではない。

「あとは、このデッキの調子次第さ」

「これほどの状況把握を、思考を、判断を、あの一瞬で行っていたことに、開いた口が

塞がらなかった。

「行くぞ戌亥」

「っ！」

ピクリ、と戌亥の耳が動いた。

ダンの目が閉じられ、添えた手が動き始める。

静かにダンがカードを2枚引き、それを戌亥が、そしてアンジュとリゼが固唾を飲んで待っていた。

引いたカードを目の前に目つけてきて、ゆっくりとダンが目を開く。

それは。

「——フラッシュユタイミング！」

逆転の狼煙だ。

「マジック『絶甲氷盾』を仕様！　そして『グリードッグ』のアタックは『ヘリオスファイア・ドラゴン』でブロック！」

「わーお。ホンマに引きよったよ、この子」

猛進してくる『グリードッグ』の前に、『ヘリオスファイア・ドラゴン』が立ち塞がる。

三つ首の獣はそれに構うこともなく、そのままその竜へ体当たりを決めた。両腕で左右の獣の首を掴み、地面をその両足でえぐりながらその勢いを殺していく。

そして、止まる。

猛進を食い止めることに成功した、その瞬間だった。『グリードッグ』は掴まれていない中央の首、その口を遠慮なく開くと、『ヘリオスファイア・ドラゴン』のその首へ迷わず噛みついた。

悲鳴はない。それによつて息絶えた『ヘリオスファイア・ドラゴン』は、静かにフィードルドから姿を消した。

「このバトル終了時、『絶甲氷盾』の効果でアタックステップは終わる。追撃は無しだ」「ターンエンド。いやあまさか【破壊時】バーストとはなあ。せやったら『ラクシユマナ』とかも遠慮せず使っやっつた」

「そういうった牽制もかねての見逃しだったからな。特に青の手札交換の効果は、【手札増加後】のバーストで失うアドバンテージを許容できないだろう」

「なんやもう。追い詰めてるつもりやったのに、掌の上だったんは私のほうやったん？」
「そんなことは無いさ。このターンも、結局時間稼ぎでしかない。戌亥のキースピリットはいまだ健在。ライフも残り1。『グリードッグ』に防御マジックを抜かれることを考慮すれば、このターンがラストターンだ」

「そういう割には、全然追い詰められた顔してへんよ？」

「それはそうさ。追い込まれることと、そのまま負けることは違う。俺は勝つ気さ」

戌亥のターンが終わる。

ダンの手札は回復し、コアも潤沢にある。しかし、戌亥の場には回復状態でLv3の『グリードツグ』が健在で、バーストもあり、ダンの場にカードはない。

彼の言う通り、このターンで勝負が決められないのであれば、ダンが勝つことは無いだろう。そうだというのに、バーストとして伏せられているであろう『カリユブデス号』がダンの攻撃力を削いでしまう。

絶望的な状況。並のカードバトラーなら、絶望して、勝機を探すことすらできないかもしれない。

しかし、彼にはすでに見えていた。

勝利への道筋———そのためのカードはすでにある。

「メイנסテップ！ 『ゴッドシーカー アルファレジオン』を召喚！」

ダンの第8ターン。

赤のシンボルが現れ砕ける。現れるのは、緑の鱗に紅い装甲を纏ったスピリット。

出現と共に、淡い光をまとって咆哮する。

「『アルファレジオン』の召喚時効果。デッキの上から3枚オープンし、その中の系統：

『界渡』／『化身』を持つ赤のスピリットカードを手札に加える」

その咆哮で、デッキの上から3枚が捲られる。

捲られたのは『ホワイトホール・ドラゴン』『ジュライドロー』と、そして。
「……来てくれたか」

ダンはその手に持って、そのまま。

「世界を照らせ。光を背負いし紅の龍よ！ 『太陽神星龍アポロヴルム』！ 『ゴッド
シーカー アルファレジオン』に【煌臨】!!」

ダンの背後、バトルフィールドでは何も無いはずのそこから炎が沸き上がる。

その炎が、ダンの真横を通して『アルファレジオン』に向かう。

炎を受けた『アルファレジオン』は抵抗することもなく———それどころか、身を丸
めて受け入れる。

包み込む炎の中、『アルファレジオン』はその姿を変えていく。

その瞳が輝いた時、その翼の一振りです自身を包む炎を消し去り、『太陽神星龍アポロ
ヴルム』は、けたたましい咆哮を伴ってバトルフィールドに君臨した。

『アポロヴルム』をLv3にアップ！ バーストをセットしてアタックステップ！ 切
りかかれ！ 『アポロヴルム』！」

フィールドへ着地したのと同時にLvが上がり、溢れる力を咆哮と共に発散して、そ
して地面を蹴って飛び立つ。

「Lv2以上のアタック時効果。『グリードッグ』を破壊する」

飛び立った『アポロヴルム』が、真つ直ぐ『グリードッグ』に突撃する。『グリードッグ』はそれを飛び退いてかわし、『アポロヴルム』から距離を取る。

自分から離れるその姿に、『アポロヴルム』がその背後に浮かぶ刃を無数に投げる。

『グリードッグ』は、三つ首の視界をフルに活用し、それらを完璧に避ける。

だが、その最後の刃を避けた直後。真上からその首を掴まれる。

必死に暴れる『グリードッグ』だが、その抵抗もむなしく、『アポロヴルム』がその口から放った炎に焼かれ、そのまま破壊されていった。

「さらに【界放】の効果。トラッシュのソウルコア以外のコア2つをこのスピリットに置くことで、このスピリットは回復する」

『グリードッグ』が破壊された爆風の中から、ジェット機のごとく『アポロヴルム』が飛び出す。はるか上空で静止し、その瞳が見据えるのは、戌亥のライフ。

「は!? いや、ちょ! なにその効果! コストがコストしとらんやん!」

「そしてこれがメインのアタックだ!」

そこから、急降下。

迷うことなく、一直線に戌亥へ。

「ああもうフラッシュユタイミング!マジック『スプラッシュザッパー!』! コスト7以下のスピリット3体を破壊する! 『アポロヴルム』は貫うで!」

戌亥が、そのカードを持って横に一閃。そのカードから放たれた水しぶきの斬撃が、『アポロヴルム』を両断する。

爆発し、破壊される『アポロヴルム』だったが、しかし。

「……へ？」

その爆風を、咆哮が払う。

両断されたはずの『アポロヴルム』が、傷一つない姿でそこにあった。

「バーストマジック『ライジングフレイム』だ。バースト発動時に破壊された系統：『星竜』を持つスピリットを1コストで再召喚する」

「ちよ、破壊したやん。そんなんアリ？」

「さらにコストを払ってフラッシュ効果。BP合計8000分の相手スピリットを破壊する」

復活した『アポロヴルム』の背後。そこから2つの炎の渦が巻き起こる。それは素早くフィールドへと向かい、そして戌亥の場の『ラクシユマナ』2体を焼き殺した。

これで、戌亥の場からブロッカーは消えた。

「『アポロヴルム』！ もう1度アタック！」

しばらく空中に滞在した『アポロヴルム』が、急降下を再開する。

「【界放】の効果。『アポロヴルム』を回復させる」

「ライフで受けるよー！」

戌亥の前に、ソウルコアで出来たものとは違う、通常の赤のバリアが展開され、そこに、『アポロヴルム』が爪を立てる。

衝撃が、戌亥のライフを砕く。

「つ……！　ライフ減少でバースト！　『カリユブデス号』のバースト効果で、『アポロヴルム』のシンボルは無くなるよー！」

突如、再びフィールドに波が押し寄せる。

戌亥のバースト効果によって現れたその荒波は、『アポロヴルム』を押し返し、その力を奪っていく。

その力を奪い切り、波が消えたそのフィールドにそれは現れた。

再び現れた『神海賊船カリユブデス号』はフィールドに現れた時、その力を誇示するように咆哮を上げ、その触手でその地を踏みしめる。

「何度アタックできても、シンボルがなければダメージはあらへん。ダンはんのバーストも無くなったし、次のターンで」

「いいや。次のターンは渡さない。『アポロヴルム』！」

「なっ!?!」

シンボルという力を吸われ、よろける『アポロヴルム』だったが、ダンの言葉に再び

飛翔する。

「アタック時効果。『カリユブデス号』を破壊する」

飛翔した『アポロヴルム』が『カリユブデス号』に突撃し、その両手に一つの刃を握る。

そして、すれ違い様で一閃。『カリユブデス号』はそのまま破壊される。

ターンを渡さないというこのアタックに、『アポロヴルム』はその「界放」の効果は使わなかった。しかし、ダンは攻撃を緩めるつもりは微塵もない

ダンに残り手札2枚を全て手に取り。

「フラッシュタイミング！ マジック『バーニングサン』を仕様！ 不足コスト確保のため、『アポロヴルム』をLv2にダウン！」

そして、最後の1枚が炎に包まれる。

「手札のブレイヴ1枚を、名称・『アポロ』を含むスピリット1体にノーコストで直接合体させて回復させる」

炎に包まれたそのカードは、ダンの手から自発的に離れ、盤面の『アポロヴルム』の上に重なる。

『太陽神弓サンバースト』を『アポロヴルム』に合体。^{ブレイヴ}そして回復「『カリユブデス号』の効果で『アポロヴルム』のコストが0になってるので、ここでは本来『サンバースト』

は『アポロヴルム』に合体出来ません。また、この状況で合体できるシンボル付ブレイヴが見つからなかったので、修整が不可能でした。間違った処理で進めてしまい、申し訳ありません。

破壊し、爆風を避けた『アポロヴルム』は、今度はフィールド中央、その上空へ向かい、その場に止まる。

俯きその左手を開いて上にかぎす。

直後、そこへ星が降ってきた。

その光を掴むとともに、バトルフィールドが光に包まれる。その場にいる全員の視界を奪い、その光が晴れた時、『アポロヴルム』のその左手に、弓が握られていた。

「ブレイヴ……ってことはシンボルが!？」

「ああ。奪われたシンボルは、これで帳消しになりません。『カリュプデス号』のシンボルを0に固定化する能力は、合体やシンボルを増減する効果を受けても変わることはありません。

その弓が、戌亥に向けられる。

かなり距離はあった。しかし、ここにいる誰もが、この攻撃を外すとは思えなかった。合体スピリットは回復した。このアタックが終わっても、次にまたアタックできる。そして、『アポロヴルム』の【界放】の効果に使うためのコアは、トラッシュにソウルコ

アを抜きにでも8個ある。つまりこのアタックと次のアタックの後に、さらに4回、『アポロヴルム』はアタック可能だ」

右手をはらい、『アポロヴルム』はそこに背後の刃をいくつか集めた。

その数は、6本。

すなわち、6撃。

残りライフ4つの戌亥のライフを砕くのに、充分過ぎていた。

「お前のフラッシュシユタイミングだ。何かあるか？」

6本あるその刃から1本だけを手に取り、『アポロヴルム』はそれを弓へとはめる。

それは、このアタックだけのことを指して言っていない。

この連続アタック。その最中に、カウンターはあるのかという、つまり、負けを認めないかという語りかけ。

戌亥はその言葉に、自身の手札を見た。

手札にあるのは、使うことを渋っていた『三叉神海獣トリアイナ』と『ストロングドロ』、そして出すタイミングのなかった2枚目『海底国の秘宝』だった。

防御札は、さっきの『スプラッシュザッパー』で使い切ったのだ。もう、この攻撃を防ぐ手段は、戌亥にない。

それを理解し、戌亥はそつと、手札を盤面においた。

「なーんもあらへん！ 私の負けやー！」

そうして、大きく手を広げて放った戌亥の言葉の先にいる『アポロヴルム』は、すでに弓を引いていた。

そしてその周りには、先ほど集められた残り5本の刃が、刃先を戌亥に向けている。

「そうか……ならこれで終わりだ。穿て！ 合体スピリット！」

その声に応え、『アポロヴルム』が引いていた弓を、放つ。

その突いていくように、周りの5本の刃も同時に戌亥へ放たれた。

「全部受けるよー！」

戌亥の前には、ソウルコアのバリアが展開され、さらにそれを囲うように、三重の赤いのバリアが形成される。

そこに、放たれた矢——否、6本の刃突が刺さる。

その衝撃は、1つ、また1つとバリアを破り、あつという間に刃がソウルコアのバリアにたどり着く。

しかし、それも同じく破壊された。

「っ——！」

その衝撃で吹っ飛び、バトルフィールドから戌亥が消える。

こうして、このバトルフィールドは、その役割を終えた。



「いたた……いやあ負けた負けたあ」

尻餅をついた体勢で頭をさする戌亥は、しかしあまり痛そうには見えなかった。

「大丈夫か？」

そんな戌亥に、ダンが手を差し出す。

「ん？ ああ、おおきにな」

その手を取って、戌亥が起き上がる。そして、起き上がった後もしばらく手をつないで、その瞳でダンを見つめる。

「……？ どうした？」

「……いや、悪い子やなさそうやなって」

そういつて、手を離す。

全く納得していなさそうなダンのことは気にもせず、服に付いた土埃を払い始める。

そんな2人に割って入るように、アンジュとリゼがバトルフィールドから帰ってくる。

「よつと、2人ともお疲れ様〜」

「すごかったね！ まさかあそこからワンキルするなんて！」

そのままダンとリゼとアンジュで会話が盛り上がっているところを見て、戌亥は1歩引くように。

「んじや、荷物取ってくるわ。ちよい待っててな？」

3人の返事を聞いて、そのままその場から離れる。

この湖から、少し歩いたところに、戌亥の家がある。

木造建築で、典型的な山小屋と言ったその家に向かって歩きながら、戌亥は自分の胸元を押さえていた。

(なんやったんやろ……あれ……)

痛みは残っていない。だが、その衝撃は強く記憶に残っている。

最後の攻撃。『アポロヴルム』の合体アタックフレイクを受けた時の衝撃は、明らかに異常だった。通常、バトルフィールドで起こる衝撃の何倍の痛みを伴ったその衝撃の原因はおそらく。

『アポロヴルム』かあ。悪い子やなさそうやけど……」

ダンの事情は、この間届いたリゼからの手紙で大体は把握している。

異世界からの迷い人に、不思議な力をもつカード。

正直に思うなら厄ネタだ。リゼとアンジュが何故肩入れするのか、正直バトルするま

では全く理解できなかつたが。

だが、バトルを通して、彼の人となりを知った今なら、その気持ちがかかる。

あの少年に、この厄ネタを押し付けてしまうのは、あまりに忍びない。

助けられることがあるかどうかは分からないが、アンジユを助けてもらった恩もある。

「ま、折角の旅やし、楽しまないと損やね」

それに、リゼとアンジユと出会って1年、初めての旅行だ。

さすがにもう、行かない選択肢はない。

少し足取りが軽くなった戌亥に気付いたのは、バンとケンだけだった。

第4話「古からの復活！ 燃え上れ！ ジークフリード・

リバイバル！」

錬金く再誕する紅の瞳く

ボン、という軽い爆発にも、ダンはもう聞きなれてしまっていた。

ダンの歩いている廊下の先、アンジュの部屋から出る煙が出ているのも、もはやちよつとした日常的と感じるのだから、慣れというのは恐ろしいものである。

「なんかすごい音したけど大丈夫？」

「ああ、またアンジュだ」

「ああ……じゃあ平気かな」

最も親しい間柄のリゼがこの対応なので、ダンも心配は特にしていなかった。

食事はいつも同じ部屋で4人集まって食べているのだが、その時見るたびに顔色が悪くなっているのはきつと気のせいだろう。

「今更聞くのも遅いかも shouldn't ないが、アンジュはあれで大丈夫なのか？」

「もう10年は言い続けてるけど無駄よ無駄。研究に没頭すると何言っても目を離れた

隙にああなるからもう諦めてる」

「……そうか」

「それで研究が終わると数日寝込むんだからホント大変なのよ。まったく……心配することこの身にもなつて欲しいんだけど」

なんだか不思議な関係だなあと、ダンはある。

年齢は直接聞いてはいないが、リゼとアンジュはぱつと見で年齢は近くない。アンジュの方が一回りも二回りも年上だろう。

だが、彼女たちの会話から察するに、迷惑をかけているのはいつも年上のアンジュのほうで、気に欠けているのは年下のリゼのようだった。

「リゼはんだんはん！ すごい音しとつたけど平気？」

後ろから、戌亥から呼ばれて2人とも振り返る。

小走りにやってくる戌亥は、メイド姿になっている。彼女曰くお給仕先の制服らしいそれは、とても戌亥に似合っていて、違和感を感じない。

「またアンジュだから、私たちは大丈夫だけど」

「ああ、せやつたか。ならええか」

2人の前で立ち止まって、服の埃を払う戌亥の反応も、これまた心配はしてなさそうだった。

戌亥もまた振り返ると、来た道に戻るように歩き、2人もそれについていくようにこの場を後にした。

「それよりとこちゃん！ 今日のディナーは何かな!？」

「ん〜。今日は肉じゃがかな〜。お肉も消費しないとアカンし」

「お！ いいね！ とこちゃんの肉じゃが美味しいからな〜」

「リゼはん、私が何作ってもそれ言つとるやん」

「ええ、だつてとこちゃんの料理美味しいし……ねえダンくん!」

「ああ、そうだな。俺はカレーくらいしか作れないし尊敬するよ」

——そんな会話を遮つたのは、2度目の爆発だった。

目を見開いて、3人とも音の発信源を見やる。

1度目よりも大きな音を伴った爆発は、しかし特に扉や壁を壊したりなどはしていないようだった。だが、心なしか扉の隙間から湧いている煙が、さつきより多くなっているように見える。

冷や汗を流して、3人がそれぞれ、他の2人と目を合わせた。

「なあ、本当に大丈夫なのか?」

「いや、これはちよつと……」

「アカンかもなあ」

リゼが管理しているマスターキーでアンジュの部屋に入り、そこから気絶しているアンジュが救出されたのは、それから数分後のことだった。



ゆらり、と揺らぐ。

ふわ、と漂う。

夢心地の中、アンジュの思考は鈍っていた。

これまで何をやっていて、これから何をやりたくて、どうしてこうなったのか。

そういったことを思い出す気力も、思考する力もなく、ただただそこにいた。

まるで、海の中にうつ伏せで潜ってるかのように、腕や足には力がなく、背筋は丸く、

その姿からは活力を見いだせない。

漂う闇の中——それを見る瞳が、光る。

「——っ!?!」

咆哮。

それに伴って起きた衝撃がアンジュを襲い、その衣服を、髪を煽る。

両腕で顔を覆ってそれに耐えるアンジュは、その両腕の隙間から咆哮の主を見た。

紅い、ドラゴンだった。

その姿にはとても見覚えがある。アンジュがバトスピを始めた時に初めて出会ったカードであり、そして今回の実験の対象だったスピリット。

(そうだ、実験だ……。私は、自分の部屋にこもって研究してたんだ)

そうして彼女は思い出す。これまでと、そしてこれからを。自分の思考が戻っていくのを、アンジュは自覚していく。

故に、ここが現実でないことはすぐに理解した。

バトルスピリッツのカードには、時たま意思のあるカードが存在する。

その意思が、持ち主の精神世界でコミュニケーションを計ることを、アンジュは知識として知っていた。初経験ではあったが、しかし、自分のやっていた研究の事を考えれば、このスピリットに意思が宿ったことは想像に難くなかった。

「で、こんなところに呼んでなんの用な訳？」

自らの相棒たる、そのスピリットに問う。

返ってきたのは——威嚇の咆哮だった。

衝撃がまたアンジュを襲う。

敵対的だ。少なくとも今は向かい合っていて、同じ方向を見ようとは思えない。

随分と嫌われてしまったものだ、両腕に隠れて呆れた笑いが出た。

「そんな怒らんでも良くない？ 初めて話すんだからもう少しこう、ね？」

両腕を崩して、スピリットとの会話を試みる。

視線が交わる紅の瞳は……無反応。

どうやら、取り付く島もないようだった。

「なあ、特に用事がないなら帰してくんない？」

やはり、回答はない。

面と向かってここまで嫌われるのも中々ないなあと思いながら、打開策を思案する。

(ここが精神世界であるのなら、ここは私の思考の中だよね……だったら、自力で抜け出せないということはないよなあ。一方的に呼ばれて、一生抜け出せないなんてことは無いはず……)

そんなアンジュの様子に、紅の瞳がまた光る。

相手にしようとしな、そんな態度が逆鱗に触れたか、再び咆哮を放つて――。

「うるせええええええ!!!」

それよりも大きいアンジュの声が、空間を覆った。

アンジュからは良く見えていないが、瞳の主が思わず口を閉じた気配だけは感じて取れた。

「さっきから煩いんだけど！ 用事があるならちゃんと言いなよ！ 用事がないなら帰してほしいって言ったよね!? スピリットでも言葉は伝わるでしょ!!」

まくしたてるように放たれる言葉に、瞳の光がハの字に曇る。

「ていうか何でそっちが偉そうなの!? 私がカードの持ち主で、ここは私の精神世界でしようが！ 土足で入り込んでいて偉そうに吠えるんじゃないやなああああ!!!」

言いたいことを言いきって、アンジュは肩で息をしていた。

!!!

ハの字に揺らぐ瞳は、アンジュのその喧騒に1歩距離を置いてしまっている。

「はあ……で、何の用?」

直後、暗闇の世界が照らされ始める。

紅の瞳は瞼の中に隠れ、その全身がハッキリと見えてくる。

アンジュは、それに手を伸ばした。

触れることは叶わない。

光が満ちて、暗闇が消えるのと同様に、瞳の主が消えていく。

その瞳が、どことなくシユンとしていたように見えたのは、アンジュの気のせいだろうか。

アンジュがその姿に触れる直前に、その姿が完全に消える。

その手に残ったのは、1枚のカード。

見慣れたそのカードを視認したところに、世界は光で完全に染まった。
「いや——」



「——結局なんの用だったの!!!!!!」

「おー、おはようアンジユはん!! 案外元気そうやね」

「……え？」

気付けばそこは、いつもみんなで食事をとっている船内の食事処だった。

キッチンから連なるこの部屋は、ここ数日ですっかり4人の共有スペースとして馴染んできていた。

「アンジユが研究してたっていうこのリバイバルカードってなんだ？」

「カードが新しい効果になって生まれ変わる現象がリバイバルで、リバイバルしたカードがリバイバルカード。基本的には使用者の強い心に反応して起こるんだけど、人工的にリバイバルしようって技術もあってね」

「俺が持つてる『レイニードル』や『バスタースピア』とかはその類か」

「そうそう。一部のカードは安価でリバイバル出来たりするから、市場に出回ってるこ

とは珍しくはないかな」

部屋の中央にはテーブルと椅子が4つあり、アンジュは部屋の隅に置いてあるソファーにいた。声をかけた戌亥は同じソファーに座っていて、リゼとダンは中央のテーブルでカードを待ちながら何やら話し込んでいた。

そんな2人も、アンジュに気付いて、彼女の方へ体を向ける。

「あ！ アンジュ！ 大丈夫なの!？」

「まあ、目が覚めたか。よかった」

リゼはそこから立ち上がって、アンジュの元へと小走りで駆けよる。

状況を掴んでるような、掴んでないような。ちよつとしたパニックで冷や汗を流しながら、みんなへ返したアンジュの第一声は……。

「えーつと……お、おはよう?」

再誕く原初の炎く

乾いた風が、バトルフィールドに静かに流れる。

向かい合うアンジユとダンは、すでにデツキとコアと、そして手札4枚を引いて、準備は整っている。

「アンジユ、起きたばかりで大丈夫かな。ここ数日まともに寝てなかったっぽいし」

「まあええんやない？ 下手に寝るより起きてた方が頭が冴えることもあるやろうし」

「そういうもんかなあ」

「それに、ダンはんのバトルを外から見てもみたかったんよね。がんばれふたりともー！」
観客席のそんな喧騒も、今の2人には届かない。

「そんじゃ！ 行くよダン！」

「ああ………来い！」

アンジユがダンにバトルを挑んだのは、アンジユが起きてからすぐの事だった。



「そういえばアンジュ、その手に持つてるカードは結局なんなんだ？」

「え？」

言われて、アンジュは初めて自分がカードを握ってることを自覚した。

「気を失ってるアンジュを部屋から運ぼうとした時から、ずっと握ってたよ。離そうとしても強く握ってるから、相当大事だったんじゃない？」

「……そっか」

その手に握るカードは、夢の中で出会った、そのスピリット。

アンジュがバトスピを始めた時からずっと使っており、今回の研究でなんとしてもしりバイバルさせようと孤軍奮闘していたカード。そのカードのイラストは見慣れたものであったが、効果は様変わりしており、そのイラストの右下に大きく『REVIEWAL』と綴られている。

研究は、成功したのだ。

ここにあるのは、自らの手で手繰り寄せた努力の結晶であり、その証。

その実感が、じわじわと心を、身体全体を満たしていくのを、アンジュはじつくりと感じていた。

そして、意を決して立ち上がる。

まだ疲れの残る体に力を込めて、その視線の向ける先は——ダン。

「バトルしよう！ ダン！」

その表情は、自信と好奇心で、笑みが作られている。

急なアンジュの言葉に、ダンは少しだけ呆けてから返した。

「まあ、別に構わないが、体調は平気なのか？ さつきまで気絶してたんだぞアンジュ」
「ふっふーん！ これを見てもそんなことが言えるかなー！」

バン！ という擬音が聞こえそうな勢いで見せつけたのは、その手に握るカード。

アンジュの相棒であり、研究成果でもある、そのカードの名は――。

「『龍皇ジークフリード』の……リバイバル……！」

それを見て、ダンの目付きが変わる。

「やっぱり、ダンの世界でも『ジークフリード』はあつたんだ。でもリバイバルは見たことがない……そうでしょ？」

「ああ、全くその通りだ」

そう、ここには新しいカードがある。

それをいち早く実戦で使ってみたいアンジュと、それといち早く対峙してみたいダン。

そんなカードバトルが向き合ってしまったならば。

「え？ ちょっと2人とも！」

「ゲートオープン！ 解放！」

このバトルは、止められない。

「あー、行っちゃった……」

リゼの、アンジュとダンに伸ばしたその腕が空を掴む。

代わりに、その手を優しく包むように、戌亥が握る。

「まあ、とりあえず観戦には行く。何かあつても大丈夫なように見とかんとな」

リゼはそれに渋々といった感じの返事を返して、2人も後を追ってバトルフィールドに入った。

◇◇◇◇◇

先攻はアンジュからだった。

「スタートステップ！」

ドローステップを重ね、そしてメインステップ。

「まずはこの子から。『ゴラドン（R）』をLv1で召喚！」

赤のシンボルが現れ砕ける。

召喚されたのは、巨大な2つの角を携えた、4つ足の竜。翼は持たず、その後ろ脚で

強く地面を掴み、前足を上げて立ち上がる。

「そしてマジック！ 『ダブルドロウ（R）』！ ソウルコアをコストに使ってデッキからカードを2枚ドロウする！」

『ゴラドン』に『ダブルドロウ』か……なんだか、昔のバトスピを思い出すな」

アンジュの使った2枚のカード。これらは、バトスピの誕生と共に存在する、最も古いカードたちだった。

今となつては多種多様に存在する0コストスピリットや2枚ドロウマジックだが、その基盤となつた原初のカードたち。

しかし、その力は、すでに生まれ変わっている。

「だが、リバイバルということは……」

「そう！ 『ダブルドロウ』のさらなる効果！」

アンジュのトラッシュで、ソウルコアが輝きを放った。

それに呼応して、アンジュの手札の1枚が——燃える。

「ソウルコアを使用してこのマジックを使つたなら、更にこのスピリットをノーコストで召喚する！」

アンジュが、その燃えるカードを手に取り——直後、地面が割れる。

「原初の炎よ！ 紅き闘志をその身に宿し、今ここに甦れ！ 『龍皇 ジークフリード』

リバイバル』！ L v 1 で召喚！」

維持コスト確保のため『ゴラドン』は消滅し、その横で、割れた地面から荒ぶる炎が吹き荒れる。——否、炎だけではない。

深紅の巨体が、その炎から生まれるように、ゆっくりと姿を現す。

その翼が、炎を払った時、『龍皇ジークフリード』は自らの再誕を吠えた。

「これが……！ 生まれ変わった『ジークフリード』……!?!」

「アンジュはん……！ 最初から気合入つとるねえ……!?!」

その咆哮が、観客席を含めバトルフィールドの全てを揺らす。

ここが、彼の龍の独壇場であるかのように、『ジークフリード』は、そこにいる唯一のスピリットとして、バトルフィールドを陣取っていた。

第1ターンから、Xレアの召喚。

バトルの主導権は、完全にアンジュが握っていた。

——はずだった。

「っ!?!」

バトルフィールドに、炎の雨が降り注ぐ。

いや、バトルフィールドではない——『ジークフリード』に目掛けて、複数の炎が飛ばされている。

『ジークフリード』は咄嗟に回避を試みるが、呆気なく複数の炎に貫かれ、破壊された。「うっそお!」

アンジュの視線の先。『ジークフリード』の爆発の向こう側で、ダンが1枚のカードを構えていた。

「マジック『クエーサーレイン』。相手が効果でスピリットを召喚した時、BP1000以下のスピリット1体を破壊する」

——焦るなよ。バトルはまだ始まったばかりだ。

そう語るダンを、アンジュはただ見ていることしかできなかった。

Lv1で召喚された『ジークフリード』はBP4000のスピリットだった。つまり、『クエーサーレイン』のその効果によつて、『ジークフリード』の速攻召喚が対処されてしまったということだった。

「……バーストをセットしてターンエンド」

結果だけを見れば、バースト伏せたのみという、平凡なターンと言えるだろう。

劇的な変化の末に更地となった盤面を見て、アンジュは。

(……いや、先攻1ターン目から妨害されることつてある?)

困惑と、動揺と、それと少しふてくされていた。

激動～交錯する炎～

それからしばらく、バトルは動かなかった。

第2ターン。ダンは『ゴッドシーカー アルファレジオン』を召喚。『太陽皇ヘリオスファイアドラゴン』を手札に加えてターン終了。

第3ターン。アンジユは『征矢龍ビヨウハ』を召喚しターンを終える。

第4ターン。ダンは『太陽皇ヘリオスファイアドラゴン』を召喚し、コスト確保確保のために『アルファレジオン』を消滅させる。

アタックステップに入り、『ヘリオスファイアドラゴン』の効果によりトラッシュのコアを全て回収。追加効果により『征矢龍ビヨウハ』を破壊するが、アンジユは破壊後【バースト】『鋭守氷槍牙』を使用。その【バースト】効果で『ヘリオスファイアドラゴン』が手札に戻る。

勝負が動いたのは、第5ターン。

「メインステップ！ 『ゴラドン』をLv1、『セクスタダント六分儀剣のルリ・オーサ』をLv2で召喚！」

赤と緑のシンボルが現れ砕ける。

『ゴラドン』と共にフィールドに現れたのは深緑の剣士。鎧と見違わんばかりの緑の甲殻に覆われた全身。4本ある腕は、1つが腰に当てられ、1つは剣を持ち地面に突き立て、そして残る2つを胸元で組んでいる。

『ルリ・オーサ』の召喚時効果！ 赤のスピリット2体にまで、ボイドからコアを1つずつ追加するよ！」

その効果の発揮を主張するように、バトルフィールドで『ルリ・オーサ』が緑に輝き、そして背中に生える2対の翅を解放した。

さらに、『ルリ・オーサ』にはその緑の光とは別に、赤い光もまた纏っている。

「Lv2の『ルリ・オーサ』は赤のスピリットとしても扱う。したがって、その効果で『ゴラドン』と『ルリ・オーサ』にコアを1つずつ追加！」

「コアブーストか……」

「さらに増えたコアで、『炎楯の守護者コロナ・ドラゴン』を召喚！」

赤のシンボルが現れ砕ける。現れたものは、二足歩行の赤い竜。その右手には紅き槍を握り、その左手には身を覆うほどの白銀の盾が構えられている。

召喚コスト確保のため、『ルリ・オーサ』がLv1に下がる。

「【バースト】をセットしてアタックステップ！」

手札をすべて吐き出し、アンジユがその手で盤面のカードに力を込める。

『ルリ・オーサ』！ 行ってこい！」

半透明の4枚の翅が空気を震わせ、2本の腕で剣を取った『ルリ・オーサ』が飛び出した。

「フラッシュタイミング！ マジック『フレイムスパーク』を使用！」

ダンが1枚のカードをかざし、そこから、電撃を伴った炎があふれ出す。

「合計BP5000分の相手スピリットを破壊する。BP2000の『ゴラドン』と『コロナ・ドラゴン』を指定」

その炎が、一直線に進む『ルリ・オーサ』に迫ってくる。『ルリ・オーサ』は、その翅をはためかせすれ違うようにかわす。

炎ちすれ違いダンに向かう『ルリ・オーサ』を余所に、『フレイムスパーク』の炎が後ろにいた2体のスピリットを襲った。

直撃の寸前、『コロナ・ドラゴン』が『ゴラドン』を庇うよう前に出る。

そして、その白銀の盾で、その炎を受けた。

「この効果でスピリットを破壊したことにより、トラッシュよりスピリットカード1枚を手札に戻す」

炎が、完全に2体のスピリットを覆う。

しかし、『アルファレジオン』を回収するダンの視線の先、『フレイムスパーク』の炎

が衝撃で消えた。

その盾で耐えきった『コロナ・ドラゴン』が、炎を払ったのだ。

『『コロナ・ドラゴン』のLv1からの効果で、コスト3以下の私のスピリットは破壊されても疲労状態でフィールドに戻ってこれる！』

「だが疲労状態だ。追撃はない」

「でも『ルリ・オーサ』のアタックは終わってないよ！ ダン！」

アンジュがそれを言葉にしたときにはすでに、『ルリ・オーサ』は弾の目の前に来ていた。

2本の腕で扱われるその剣は、すでに上に振りかぶられている。

「ライフで受ける！」

緑のバリアが展開され、そこに剣が振り下ろされる。

衝撃が、バリアを通してダンのライフを砕く。

「うっし！ まず1点！ ターンエンド！」



戌亥「おお、手札もブロッカーも0なんは思い切りええねえ」

リゼ「第1ターンの時もそうだったけど、今日のアンジュは攻めつ気強いね」
戌亥「ゆうても『ジークフリード』は破壊されてもうてるからなあ。

「このまま押し切れるとは思えへんけど」



「メインステップ。『ミラーージュ・ワイバーン』をLv2、『太陽皇ヘリオスファイアドラゴン』を再びLv1で召喚」

赤のシンボルが2つ現れ砕ける。

先に現れたのは翡翠の翼を持った翼竜のような竜『ミラーージュ・ワイバーン』。それに続いて、『ヘリオスファイアドラゴン』もまた現れる。

「アタックステップ。『ヘリオスファイアドラゴン』の効果発揮、トラッシュのコア5個をこのスピリットに置き、BP10000以下のスピリットを破壊する」

Lv3BP12000に上昇したその力を余すことなく込めて、その手に集めた炎を『ヘリオスファイアドラゴン』が即座に放つ。その先にいた『ルリ・オーサ』は、抵抗する間もなく炎の中へと消えた。

「『ミラーージュ・ワイバーン』！ 行け！」

その炎を追うように、『ミラーージュ・ワイバーン』が飛翔する。

『ミラーージュ・ワイバーン』Lv2のアタック時効果により、デッキから1枚ドロ―
「ライフで受けるよ！」

空中でさらに加速し、『ミラーージュ・ワイバーン』の突進がアンジュの前に展開された
バリアと衝突し、それがライフを砕く。

そしてそれが、『バースト』を開く。

「っ！……ライフ減少で『バースト』発動！マジック『ダイナバースト』の『バースト』
効果で、BP10000以下の相手スピリット1体を破壊する！ BP3000の『ミ
ラーージュ・ワイバーン』を破壊！」

アンジュが手に取ったカードから、炎が走る。地面から湧き上がるように現れた炎
は、ダンの場に戻らんとする『ミラーージュ・ワイバーン』を下から焼却する。

「さらにコストを払って追加効果を発揮。カードを2枚ドロ―する」

「ターンエンドだ」

「ありや……アタックしないの？」

「攻撃するだけが赤属性のデッキじゃないさ。それは、同じ赤デッキ使いのアンジュが
1番分かっているだろ？」

「あはは……別に『赤使い』っていうほど得意でも強くないけどね……」

対話しながら、アンジュはドロートしたカードを確認する。

悪くない。

第1ターンで『ジークフリード』を破壊された時の精神的ショックは中々のものだったが、バトル自体は何とか立て直せている。

現状、盤面の質も手札の量も負けてはいるが、『ルリ・オーサ』で稼いだコアと赤属性のドロロー力や除去能力があれば、充分巻き返しが可能な範囲だ。

「そんなことはないさ。攻める時と攻めない時の緩急がしっかりついている。リソースや防御を吐き出しているようで、しっかりケアも出来ている。中々厄介だよ」

「……そ、そうかな？」

普段、あまり聞きなれない、自分をほめる言葉に、“アンジュの視線が泳ぐ？”

思っていたのとは違う反応が来たのか、ダンはそれに首をかしげており、そんな様子を見て、リゼと戌亥は目を合わせて笑いあっていた。

（あくダメダメ！ 今はバトル中！）

手札を置いて、両手でパシン！ とほほを叩く。

心なしか、思考がクリアになるのを自覚した。

そんなアンジュの、第7ターン。

「メインステップ！ マジック『コールオブロスト（R）』を使用！」

アンジュが握る一枚のカードが、光を放ち炎に包まれていく

「さらなるリバイバルカードか……!」

「トラッシュにあるスピリットカード一枚を手札に戻す。対象はもちろん!」

その炎が完全にカードを覆うと、それと同時にカードの放つ輝きが増す。太陽のごとく金色の輝きが収まった時、そこにあつたのは『コールオプロスト』のカードではなく。

「原初の炎よ! 紅き闘志をその身に宿し、今ここに甦れ! 『龍皇 ジークフリード・リバイバル』! L V Iで召喚!」

アンジュが、その燃えるカードをその手に掴み——直後、地面が割れる。

割れた地面から荒ぶる炎と共に、深紅の巨体がその炎から生まれるように、ゆっくりと姿を現す。

その翼で炎を払いい、『龍皇ジークフリード』が、バトルフィールドに足を付けた。

「おまたせ……待った?」

俯かせ、顔を上げない『ジークフリード』に、そつと語り掛ける。

紅の瞳、その片目が一瞬だけアンジュと視線を合わせた。

その一瞬の直後、『ジークフリード』の翼が風を起こす。

俯かせた顔を上げ、その風に乗せて自らの降臨を叫ぶ。

ダンや、観客席のリゼや戌亥が、そのあまりの暴風と爆音に身を構え、バトルフィー

ルドを咆哮の渦に包み込まんとするその返事に、アンジユの口角が無意識に上がる。

「じゃあ行くよ！ 初陣だ『ジークフリード』！ 『ゴラドン』にソウルコアを置いて、【バースト】をセット！」

「……来い！」

「アタックステップ！」

アンジユが盤面のカードを倒し、『ジークフリード』がその翼で羽ばたく。

向かう先は言うまでもなく、ダンへと迷わず突き進む。

だが。

「『ヘリオスファイアドラゴン』でブロック！」

その行方を、『ヘリオスファイアドラゴン』の炎のブレスが遮る。

その炎を避けて、『ジークフリード』は距離を取るべく真上へ上がり、それを『ヘリオスファイアドラゴン』も追いかける。

下から迫りくる『ヘリオスファイアドラゴン』に、『ジークフリード』もまた炎を吐き出すが、それをかわされ、負けじと『ヘリオスファイアドラゴン』もまた炎を放つ。『ジークフリード』もまたそれを避け、2体のドラゴンが、炎と共に宙に螺旋を描く。

「フラッシュタイミング！ 『龍皇ジークフリード』の【覚醒】の効果！ 『ゴラドン』に置いたソウルコアを『ジークフリード』へ！」

はるか上空で戦う2体に、地上の『ゴラドン』が吠えた。体から光が——ソウルコアが現れ、『ジークフリード』のところへ昇っていく。

その光を、『ジークフリード』が喰らう。

ソウルコアの輝きが『ジークフリード』の内より溢れ出し、その光を発散するように吠えた時、『ジークフリード』はLv3へと上昇した。

「なに……?」

「『ジークフリード』は、ソウルコアを持っている時、最大レベルになる効果を持つてるのよ!」

「だが、BPは10000。BPは12000の『ヘリオスファイアドラゴン』の方が上だ!」

あふれ出る力に任せて突進してきた『ジークフリード』の頭を掴み、『ヘリオスファイアドラゴン』が急降下を始める。掴んでいる腕を引きはがそうとする『ジークフリード』の抵抗の意味をなさず、『ヘリオスファイアドラゴン』は、その頭部をバトルフィールドへと叩きつけた。

爆発する。破壊された『ジークフリード』を見届けつつ、『ヘリオスファイアドラゴン』がダンの元へ戻って膝を付く。

だが。

「——『ジークフリード』！」

「っ！」

その爆風が、内側から吹き飛ぶ。その中心に、『ジークフリード』は未だに健在だった。

「これは……」

「『ジークフリード』Lv3の破壊時効果！ ライフが5以下の時、ライフ2つを回復しつつフィールドに残ることが出来る！」

そう叫ぶアンジュの体が、ほんのり赤く光る。『ジークフリード』のその効果で、ライフが6まで回復したのだ。

「これが、生まれ変わった『ジークフリード』の力か……！」

「そしてこれでプロッカードは消えた！ 『コロナ・ドラゴン』でアタック！」

その場に盾を突き立てて、『コロナ・ドラゴン』は両の手に槍を持って地面を蹴る。

「フラッシュタイミング！ 『アクセル』 『煌星第一使徒アスガルディア』を使用！」

『ヘリオスファイアドラゴン』のLvが3から1へ急激に下がる。膝を付いていた『ヘリオスファイアドラゴン』が力を失い両手を付いてへたり込むその横を、炎が走る。

炎が象る『アスガルディア』が、その刃を構えている。

「BP12000以下の相手スピリットを破壊する。攻撃は通さない」

最初の一振りで、『コロナ・ドラゴン』が引き裂かれる。その破壊を見届けることなく、

『アスガルディア』はその炎で出来た手を地面へ叩きつける。『アスガルディア』は姿を崩し、そこから炎が沸いた炎が血を駆ける。二手に分かれた炎は、『ゴラドン』と『ジークフリード』を焼き尽くした。

「それは第三皇子の……!?!」

『アスガルディア』で破壊したスピリットの効果は発揮しない。『コロナ・ドラゴン』の仲間を守る効果は無効だ」

「全滅かあ……ターンエンド!」

このバトルは、まだまだ終わらない。

攻防～龍皇の魂は潰えない～

「メインステップ。『アルファレジオン』を再び召喚」

ダンの第8ターン。召喚された『アルファレジオン』は即座に光を放ち効果が発揮される。

捲られたカードは『レイニードル（R）』『煌星竜コメットヴルム』『ゴッドシーカー』『アルファレジオン』の3枚。回収できるカードは無かった。

しかも、その召喚時効果でアンジュの「バースト」に電流が走る。

「召喚時発揮で『バースト』発動！マジック『双翼乱舞』の「バースト」効果……と、ついでにコストを払ったメインの効果で、合計4枚引かせてもらおうよ！」

デッキから浮かび上がった4枚を、アンジュがガサツに掴む。

一気に補充された手札は5枚。枚数だけで言えばダンの4枚を超えた。第1ターンに奪われたアドバンテージを、盛り返しつつある。しかも、『ジークフリード』の効果でライフは6つにまで回復している。引かれた手札を使う暇もなくライフを削り切る“というのは無理そうだった。

（それに、前のターンの『コールオプロスト』……アンジュの『ジークフリード』は、ま

だ死んではないか)

『ヘリオスファイアドラゴン』をLv1にダウンし、『レイニードル(R)』を召喚。さらにネクサス『墜ちる煌星』を配置」

力を失い姿勢が悪くなる『ヘリオスファイアドラゴン』と、召喚される『レイニードル』の後ろ、そこにいるダンのさらに背後、大きつく光る赤い恒星が現れる。

その内に建物のような文化的な影を覗かせる光、バトルフィールドを照らす。

『続いてマジック『ジュライドロー』。場に赤のシンボルが4つあるので、3枚ドロー。『バースト』をセットしてアタックステップ」

ステップ開始により『ヘリオスファイアドラゴン』の効果が発揮。トラッシュのコアを全て回収し、そのLvが3へと戻る。

「ターンエンド」

「え？ またアタックしないの？ 今プロッカーいないよ？」

「そう言つてライフを削られるのが狙いだろ？ アンジュの『ジークフリード』はまだ生きてるからな」

「げっ。バレてるし……じゃあしやらないかあ」



戌亥「へえ……ダンはん、アンジュはんのデッキをもう読めてるんやね」

リゼ「『ジークフリード』は生きている……アンジュのデッキには、トラッシュからスピリットを回収するカードが多く入ってるのを、ダンくんはもう気付いてるんだ」

戌亥「『ジークフリード』はまだまだ何度でも蘇りうる。せやから、ライフを5以下にすれば

ら 『ジークフリード』の破壊時効果でせつかく減らしたライフを回復されてまうか

無暗に攻撃できひんのやな」

リゼ「無駄にコアを与えてしまうことにもなるしね。でも、攻撃しないと勝てないしこれじゃいつかダンくんが押し切られるかも？」

戌亥「そうでもないんやない？ ダンはんのキーズスピリットは『アポロヴルム』やし、ワンショットキルも充分狙えるやろうし」

リゼ「そつか。じゃあダンくん的には『アポロヴルム』を引いてからが勝負って感じか」

戌亥「まあそれまでに押し切られんとも限らんけどねえ」



「メインステップ！ 『ライト・ブレイドラ』『ロクケラトプス』『アイバーン』を召喚！
アンジュの第9ターン。」

召喚された3体の小型スピリットが、順に現れ砕けたシンボルから姿を現す。

「さらに召喚！ 『焰竜魔皇マ・グー』！ この大地を炎で染めろ！」

赤のシンボルが現れ砕け、地面からマグマがあふれ出す。

地が割れ、捲れ、その中央で瞳が光る。

その大鎌を振るい、『マ・グー』が咆哮でもって自らの存在を示す。

「さあ！ 行くよダン！ アタックステップ！」

その声と共に、『マ・グー』の体が赤く光る。

『『焰竜魔皇マ・グー』の効果！ アタックステップ開始時に、トラッシュのコアを全てこのスピリットに乗せる！』

『『ヘリオスフィアドラゴン』と同レベルのコア回収か……！』

「コアが増えた結果、『マ・グー』はLv3にアップ！ 『バースト』をセットしてまアタックステップ！」

ほのかに光る赤いオーラから力を受けて、『マ・グー』がその力を発散するように腕を振るう。そのまま地面を蹴り、その無骨な翼で飛ばたきダンへと迫る。

『マ・グー』はLv2以上の時、系統：『古竜』を持つ自分のスピリットに、BP+3000と赤のシンボル一つを追加する！」

飛翔する『マ・グー』の目の前で赤のシンボルが出現し、それを『マ・グー』が掴み握りつづす。BPは13000まで上がり、ダンの操る場のスピリット全てのBPを超えた。

『レイニードル（R）』でブロック！」

前進する『マ・グー』に『レイニードル』が立ちはだかるが、その大鎌で顔から真つ二つに引き裂かれる。

「チャンスを待ってアタックしないのは勝手だけど、そんな悠長なことしてたら私の攻撃に耐えられないんじゃない？ ターンエンド！」

「つ……スタートステップ」

ダンの、第10ターン。



少年よ。

私の元へ来い。

私はここで待っている。

急がなければならない。

私は……。



「……っ！」

ドローステップ、引いたそのカードを見て、ダンは何かを感じ取っていた。

ドクン、と、鼓動を感じて、思わず固まってしまう。

(『アポロヴルム』……お前はいつたい……)

ダンは、引いた『アポロヴルム』のカードを手中に収め。

「メイנסテップ。『ヘリオスファイアドラゴン』Lv2にダウンし、『アルファレジオン』をLv2にアップ。続いて、『太陽神弓サンバースト』を召喚」

レベルが変動する2体のドラゴンの目の前に——星が落ちてくる。

バトルフィールドのはるか上空、この場を照らす太陽から、それは落ちてきた。

地に突き刺さるそれは、取っ手を金色のリングが囲んでおり、そのリングから十字状に金色の刃が伸びている。

『サンバースト』を『ヘリオスファイアドラゴン』に合体！^{ブレィム}

突き刺さった『サンバースト』を、『ヘリオスファイアドラゴン』が乱暴に引き抜く。そのままある程度上へ上昇し、その弓を構えた。

『アタックステップ。』ヘリオスファイアドラゴン』の効果によりコアを回収し、合体スピリットをLv3にアップする。合体スピリットでアタック！^{ブレィム}

紅いオーラが『ヘリオスファイアドラゴン』を包み、その力が『サンバースト』に集まって炎の矢を形成する。『ヘリオスファイアドラゴン』がそれを掴み、次の瞬間には放たれた。

『ヘリオスファイアドラゴン』のアタック時効果。このスピリットよりBPが低い相手スピリット1体を破壊する」

合体した^{ブレィム}『ヘリオスファイアドラゴン』のBPは現在17000。

「BP10000の『マ・グー』を指定」

放たれた弓は、『マ・グー』へと向かいそれを『マ・グー』が切り伏せる。そして、反撃とばかりに上空にいる『ヘリオスファイアドラゴン』目掛けて羽ばたき距離を詰める。

迎え撃つ『ヘリオスファイアドラゴン』は『サンバースト』を構えて弓を乱射する。し

かし、その悉くを紙一重で躲し、『マ・グー』がその鎌を振り上げた。
しかし。

構えていた『サンバースト』を横一線。寸でのところで『ヘリオスファイアドラゴン』が『マ・グー』を切り裂いた。

「続いてフラッシュタイミング。マジック『ライジングフレイム』を使用。不足コストは『アルファレジオン』をLv1にダウンして確保する」

力を失い背筋が曲がる『アルファレジオン』の後ろで、ダンの構えた『ライジングフレイム』のカードから炎が2つ放たれる。

「合計BP8000分、相手スピリットを好きな数破壊する。BP3000の『ロクケラトプス』及びBP5000の『アイバーン』を指定」

その炎が、アンジュの2体のスピリットを破壊し、その炎をかき分けて『ヘリオスファイアドラゴン』がアンジュの目の前に現れる。

「ライフで受ける！」

振り下ろされた『サンバースト』が、赤いバリアを斬りつける合体スピリットは、その衝撃がアンジュのライフを2つ砕く。

バリアに攻撃を弾かれた『ヘリオスファイアドラゴン』は、その反動を利用してアンジュから距離を取るように下がり、歪な体勢のまま『サンバースト』を構えた。

『太陽神弓サンバースト』の合体アタック時効果。アタック中に相手のBP6000以下スピリットを破壊したバトル終了時、相手のライフのコア1つをリザーブに送る」このバトル中に、『ライジングフレイム』の効果によってアンジュのスピリットを破壊したことにより、その条件を満たしている。

構えた『サンバースト』の中心に炎の矢が形成され、歪な体勢のまま『ヘリオスファイアドラゴン』がその矢を放つ。その矢がまだ消えていないアンジュのバリアに当たり、さらにライフを砕いた。

「いつつ……一撃で3点とか、さらつとえぐいことするじゃんね！」

「続いて『アルファレジオン』でアタック」

言葉を受けて、『アルファレジオン』が地面を蹴る。

だが、行き先はアンジュではなく——空。

「フラッシュタイミング。『墮ちる恒星』の効果により『アスガルディア』の【煌臨】条件を系統：『星竜』に変更する」

そう言つて、ダンは盤面に手元として置いてあつた『アスガルディア』のカードを掴む。

「さらに『アスガルディア』は、手元からの【煌臨】が可能だ。『アルファレジオン』に【煌臨】せよ！　そして勝利の剣を振るえ！　『煌星第一使徒アスガルディア』！」

そのカードから炎の竜巻が沸き起こり、瞬く間に空へと上がる。

そうして、上空で滞空していた『アルファレジオン』に、炎の竜巻がまとわりつき、炎の球体を作り上げる。

その球体が徐々に小さくなっていき、そして、明らかにそこにいるはずの『アルファレジオン』より小さくなった時、その炎が急激な膨張を起こし、爆発する。

吹き飛ばされた炎の向こう、そこにいたのは、人型の竜。

白いメカメカしい装甲に身を包み、右手に赤い両刃剣を携え、『煌星第一使徒アスガルディア』はフィールドに「煌臨」した。

「アタック中のスピリットに「煌臨」したことにより、このアタックは『アスガルディア』が引きつぐ。そして『アスガルディア』はダブルシンボルだ」

両刃剣を両手で持ち、『アスガルディア』がその翼で空気を蹴る。

一直線に向かい、次の瞬間にはアンジュの前に現れた。

「ライフで受ける！」

その刃を振り下ろし、アンジュのライフがまた2つ碎かれる。

痛みに盤面にへたり込んでしまうアンジュだったが、その口は——笑っていた。

「つ———」 「ライフ減少」で「バースト」発動！」

紫色の電流が盤面を走り、伏せた「バースト」が翻る。

「マジック『ラウンドテーブルナイト（R）』の「バースト」効果により、トラッシュからコスト6以下のスピリット1体をノーコストで復活させる！」

アンジュのトラッシュ。そこにいるコスト6以下のスピリットで、この場で呼び出すスピリットなど、1つ体しか存在しない。

トラッシュから浮かび上がるそれを掴み、掲げた。

「甦れ！ 私の永遠の相棒！ 『龍皇ジークフリード・リバイバル』！ Lv3で召喚！」
紫のオーラを放つ、漆黒の穴が空中に空く。光さえも届かない深淵の穴から、這い出るように腕が現れる。その赤い腕が穴の淵を掴み、力を込めたその瞬間に、その姿が穴から露わになった。

三度、^{みたび}『ジークフリード』が、アンジュの元へ降り立った。

「さらに！ コストを払ってフラッシュ効果！ 相手スピリットのコア1つをリザーブへ送る！ 『アスガルディア』を指定！」

まだアンジュの近くから離れられないでいた『アスガルディア』が、徐々に、少しずつ穴へと吸い込まれていく。腕をクロスさせ、必死に耐える『アスガルディア』だったが、コア1つのみスピリットがこの効果に耐えられるわけもなく、抵抗虚しく穴へと囚われ、そして穴は閉じた。

「……ターンエンド」

アンジュのライフは残り一つ。しかし、その闘志も、キースピリットも、いまだ健在。追い込まれているのはむしろ、ブロッカーのいないダンの方だった。

絆～それが彼女たちのありかた～

「メインステップ！ 『ジークフリード』をLv1にダウン！ ソウルコアを使い『ドラグノ祈祷師』をLv2で召喚！」

アンジュの第1ターン。

赤のシンボルが現れ砕け、召喚されたのは、立派な角の生えた竜人。

赤い鱗の素肌にボロボロのローブを身にまとい、左手に数珠を持つ賢人かのような『ドラグノ祈祷師』は、手を合わせ、何かを祈っているようだった。

「『ドラグノ祈祷師』の召喚時効果！ 召喚コストにソウルコアを使っていることにより、トラッシュから系統：『古竜』を持つスピリット1体をノーコストで召喚する！」

トラッシュに送られたソウルコアが光り、トラッシュからカードが浮き上がっていく。

「甦れ！ 『焰竜魔皇マ・グー』！」

それを乱暴に掴み、盤面に投げる。

祈りを捧げる『ドラグの祈祷師』の背後で地面が割れ、マグマがあふれ出る。

漆黒の翼でもってそのマグマを払い、その大鎌を振るって『焰竜魔皇マ・グー』が吠

えた。

「さらにマジック『フォースドロワー（R）』を使用！ 手札が4枚になるまでドロワーできる！ 私の手札は0！ つまり4枚ドロワー！」

引いた4枚を見て、アンジュがニヤリと笑う。前のターンに削られたライフ5つ分、まだまだコアは潤沢にある。

使うと決めたカードは、引いた4枚のうち、3枚。

まず1枚。

「マジック『シンクロニシティ』！ このターン、【覚醒】を持つ『ジークフリード』は、BP4000以上の相手スピリットに指定アタックできる！」

赤のオーラを纏い、『ジークフリード』が吠える。

そして2枚目。

「『武槍鳥スピニード・ハヤト』を召喚！ 『ジークフリード』に直接合体！」

緑のシンボルが現れ砕け、召喚されたのは凜猛な鷹。

尾に刃を携え、頭部には首をも覆うほどの深緑の兜を付けている。

召喚されるのと同時に、『武槍鳥スピニード・ハヤト』は上空へと羽ばたき、それを追って『ジークフリード』も地面を蹴る。

空中で2体が姿を重ねた時、赤と緑の光が溢れ、バトルフィールドを覆った。

光が晴れ、そこにいたのは、深緑の龍皇。

その両手に簡素な槍を携えて、赤かった体表を緑に染めた『ジークフリード』が、力を鼓舞すべく空へ叫ぶ。

「指定アタックと『スピニード・ハヤト』……これは……!？」

そして最後の3枚目。

「マジック! 『メロディアスハープ(R)』! 『ヘリオスファイアドラゴン』を指定!

このターン、ダンの合体スピリットの効果を全て無効にする!」

「……で黄色のマジックか……!」

不思議な音波がアンジュの持つカードから発せられ、それが『ヘリオスファイアドラゴン』を包み込む。それを受けて、『ヘリオスファイアドラゴン』は必至に腕を振り音波を払おうとするが、そんなことをしても音をかき消せるわけもなく、一瞬赤のオーラが現れたかと思うと、それは四散するように消えてしまった。

『ライト・ブレイドラ』をLv2アップしてアタックステップ! 『マ・グー』の効果でトラッシュのコアを全て『マ・グー』へ! さらに『スピニード・ハヤト』の合体時効果で『赤』を指定!」

コアが増えた結果、『マ・グー』はLv3にアップ。そのLv2, 3の効果により、『ジークフリード』と『マ・グー』自身のBPとシンボルが加算される。

「覚悟しなよダン！ 『龍皇ジークフリード』で合体アタック！ 『シンクロニシティ』の効果で、ダンの合体スピリットに指定アタック！」

その槍を構え、『ジークフリード』が地面を蹴る。

『合体スピリットでブロック』

それを受けて、『ヘリオスファイアドラゴン』もまた空へ駆ける。

「フラッシュタイミング！ 『ジークフリード』の『覚醒』の効果により、『マ・グー』のコアを1つ残し全てを『ジークフリード』へ！」

空中で静止し、何かを呼ぶように叫ぶ『ジークフリード』の後ろで、『マ・グー』の体内から無数のコアが抜き取られるように具現化する。レベルが下がったことにより、『マ・グー』の効果で増えたBPとシンボルが消失した。

その数は、ソウルコアを含めて7個。『マ・グー』から離れたコアたちは、『ジークフリード』の元へ飛来して、その体内へ入り込んだ。

レベルが上がる。Lv3まで上昇した『ジークフリード』のBPは、『スピニード・ハヤト』の合体時BPを加算して15000。



戌亥「あれ？『マ・グー』のレベル下げてまうん？

Lv2をキープしとったならシンボルも増えてBPも18000になる。

BP17000のダンの合体スピリットフレイヤを超えられるんちゃうの？」

リゼ「違うよとこちゃん……これは……」

◇◇◇◇◇

「破壊時効果が狙いか……！」

「すでにバトルは成立してる！今気づいても手遅れなんじゃない!？」

空中で、2体の竜が火花を上げて斬りあう。

2本の槍で刺突する『ジークフリード』の攻撃を、『ヘリオスファイアドラゴン』が『サンバースト』を使って器用にかわしていく。

そして、僅かに出来た『ジークフリード』の隙に、蹴りを入れて距離を取った『ヘリオスファイアドラゴン』が、『サンバースト』を構えて矢を生成する。

その直後。

矢が『ジークフリード』を貫き爆発し、『ヘリオスファイアドラゴン』はその構えた『サンバースト』を下げて力を抜く。

しかし。

「『ジークフリード』の破壊時効果！ ライフが5以下の時、ライフを2つ回復してフィールドに復活する！」

その爆風を、深緑の翼が薙ぎ払う。

その様相にダンの顔が引きつった。

「しかも、『スピニード・ハヤト』の合体アタック時効果で、このターン赤のスピリットにブロックされるたびに、合体スピリットは回復する。これは……」

『スピニード・ハヤト』の合体時効果。それは「ステップ開始時に色1色を指定し、このターンの間、指定した色のスピリットにブロックされたとき回復する」というもの。

アンジュはステップ開始時に「赤」を指定している。つまり、赤のスピリットにブロックされる限りは、何度でも再アタックが可能ということ。

そして『ジークフリード』は、ライフが5以下である限り何度でも蘇り、破壊されないことにより『スピニード・ハヤト』や『シンクロニシティ』の効果は消えることはない。

すなわち。

「そう！ つまり連続して自爆攻撃が可能ってことよ！」

確かにその心臓を射抜かれたはずの『ジークフリード』は、油断していた『ヘリオス

ファイアドラゴン』へ持っていた槍を投擲し、それを『ヘリオスファイアドラゴン』はギリギリのところで咄嗟に弾いた。

その一瞬で、『ジークフリード』が『ヘリオスファイアドラゴン』の懐に入る。すでに振りかぶっているもう一本の槍を振り下ろし——その腕を、『ヘリオスファイアドラゴン』が掴む。

回避不能。その状況で『ヘリオスファイアドラゴン』のブレスを受けた『ジークフリード』は、再び爆風を上げて破壊され、『ヘリオスファイアドラゴン』が距離を取る。

だがやはり、『ジークフリード』はいまだ健在。

爆風を払い、雄叫びと共に姿を現した『ジークフリード』の瞳は、今もなお『ヘリオスファイアドラゴン』を捉えている。

『合体スピリット^{ブレイヴ}！ もう一度アタック！』 『シンクロニシティ』の効果で、ダン^{ブレイヴ}の合体スピリットに指定アタック！』

今度は先ほどの意趣返しともいわんばかりに、炎のブレスを放った。

しかし、『ヘリオスファイアドラゴン』はその手に持つ『サンバースト』に力を込めると、『サンバースト』の十字に付いた刃が回転を始め、バリアとなつてその炎を防いだ。

そのバリアを利用し、『ヘリオスファイアドラゴン』が正面から徐々に『ジークフリード』へ距離を詰めていく。

「フラッシュタイミング！マジック『ソウルリツパー』！相手の合体スピリットのブレイヴ一つを破壊し、一枚ドロウできる！」

だが、突如として『サンバースト』にひびが入る。そのひびは瞬く間に全体へ広がり、『サンバースト』は破壊された。

バリアを失い、『ヘリオスファイアドラゴン』が炎のプレスに直撃する。

そこから逃れようともがくが時すでに遅く、全身が焼かれそのまま爆風を伴って破壊された。

「ここで破壊してくるか」

「まだ攻撃は始まったばかりだよ！合体スピリットでアタック！」

「ライフで受ける！」

『ジークフリード』が、間髪入れずにダンへ2本の槍を投擲する。

ダンの前に展開された赤のバリアがその槍を受け止め、ダンのライフがその衝撃で2つ砕かれる。

残りライフ2つ。

対してアンジュのスピリットは、残り3体。

『焰竜魔皇マ・グー』でアタック！」

その大鎌を構え、『マ・グー』が地面を蹴り前へ出る。

しかし。

「フラッシュタイミング。マジック『バインディングホルス』を使用」

「げ!? 緑のマジック!？」

「相手スピリット三体を疲労させる。『ドラグノ祈禱師』と『ライト・ブレイドラ』を指定」

魔方阵が——否、瞳のような不思議な文様が、回復状態の『ドラグノ祈禱師』と『ライト・ブレイドラ』に足元に現れる。

その文様が光った時、強力な重力が2体のスピリットを襲う。膝を付かざるを得なく、この場から動くことも封じられ、アンジュの後続のアタッカーは全て疲労した。

『『マ・グー』のアタックはライフで受ける!』

振り下ろされた大鎌が、ダンの前に張られたバリアに当たる。

残りライフ一つ。ギリギリのところまで耐えきった。

「もう! ……ここで緑のマジックとか来る普通!？」

「トラッシュから回収したコアで多種多様な色のマジックを使いカウンターを狙う。アンジュも似たようなことをしてるだろ?」

「そうだけどきさ……そうじゃないじゃん! ターンエンド!」



リゼ「ふう……なんだか見てるこつちが疲れてくるわ……」

戌亥「アンジュはんが基本的にフルアタックを狙つとるからねえ。

ド派手なバトルになつとるよねえ」

リゼ「アンジュのライフは、残り1つのところから『ジークフリード』の効果を2回使つて

5つまで回復してる……受けも万全つて感じかな」

戌亥「そうか？ 『アポロヴルム』とかあつたらアカンのやない？ いくらライフがあつても

あの連続アタックは受けきれへんやろ？」

リゼ「そうかもだけど、アンジュの『ジークフリード』はまだまだ戦えるんじゃない？」

戌亥「????？」

リゼ「ライフの回復を5つで止めたのも、『ジークフリード』の

破壊時効果をダンクんのターンでも生かすためだと思ふしね」

戌亥「そやろうけど……『ジークフリード』は疲労してるで？」

リゼ「まあ見てみなつて」



ダンの第12ターン。

（『ジークフリード・リバイバル』……他のリバイバルしたカードも含めて、俺が知っているカードよりも見違えるほど強くなっている……。これが、この世界のバトルスピリッツ……）

実感する。本当に異世界に来たのだと。

そしてこの世界には、まだまだダンの知らないカードがたくさんある。

アルティメットや、創界神にミラージュ。テキストでその言葉だけは見たが、未だにこの目で見ていないカードは山ほどにある。

気の遠くなるような話だ。情報がものをいうバトルスピリッツというゲームで、この世界でのダンは圧倒的なデイスアドバンテージを背負っている。

だが、それでも。

（負けるつもりは……毛頭ない……！）

「メインステップ！ 『星渡竜コロニックドラゴン』をLv2で召喚！」

赤のシンボルが現れ砕け、炎が竜の姿を象った。四枚の翼で滞空する『コロニックド
ラゴン』は、その全身を炎で包み、その炎を自ら燃やし続けることで、その力強さを示
していた。

「召喚時効果。トラツシユにある系統：『神話』^{サーガ}を持つブレイヴ1枚を手札に戻す」

トラツシユから浮き上がったカードを掴んだダンは、そのカードをそのまま盤面に投
げる。

『太陽神弓サンバースト』を再び召喚」

再び、『サンバースト』が太陽から降ってきた。

地面に突き刺さる『サンバースト』を横目に、ダンはさらに、勝負の1枚を掴む。

「世界を照らせ。光を背負いし紅の龍よ！ 『太陽神星龍アポロヴルム』！ L V I で召
喚！」

少年の背後、バトルフィールドでは何も無いはずのそこから炎が沸き上がる。

その炎を背に、這い上がる龍が1体。

その翼の一振りですべての炎を消し去り、『太陽神星龍アポロヴルム』は、けたたましい
咆哮を伴ってバトルフィールドに君臨した。

「来たね『アポロヴルム』！ 初めて見た時から戦ってみたんだよね！」

「ふ……なら俺も遠慮はしない。『太陽神弓サンバースト』を『太陽神星龍アポロヴルム』

に合体！」
フレイヴ

突き刺さった『サンバースト』を、『アポロヴルム』がその手に取る。

まるでそれが体の一部であるかのように、『アポロヴルム』は綺麗な動作で弓を構え、そして背後に翼のごとく無数にある刃の1つを、矢として『サンバースト』にセットした。

「アタックステップ！ 射貫け！ 合体スピリット！」
フレイヴ

矢を向けた標的は……『ジークフリード』。

『アポロヴルム』のアタック時効果「解放」を發揮。トラツシユのコアを2つこのスピリットに戻すことで、合体スピリットは回復する。コアが増え、Lv2になったことでLv2のアタック時効果も發揮する。アンジュの合体スピリットを指定」

その矢を放たれた『ジークフリード』は、その手に持つ2本の槍でそれを受け止める。

しかし、それはただの矢ではなく、『アポロヴルム』の体の一部。それ程度で勢いが収まることはなく、そのまま槍ごと『ジークフリード』を貫通し、『ジークフリード』を破壊した。

だが、龍皇の魂は不滅。

その爆風を薙ぎ払い、『ジークフリード』がまたフィールドに吠える。

「……っ！」

「何度やっても同じき！ そのアタックはライフで受ける！」

爆風の余波が、アンジュを襲い、そのライフを砕く。

合体した『アポロヴルム』のシンボルは2つあるが、『ジークフリード』の効果でライフを回復したアンジュのライフは、未だ5つ。

『合体スピリット！ もう一度アタック！』

構えた『サンバースト』を下げて、今度は地面を蹴つてアンジュへと向かう。

「【界放】の効果。合体スピリットをLv3にアップし回復させる」

「破壊効果は使わないか……でも、何度やっても同じだよダン！ 『アポロヴルム』が何回アタックしても、うちの『ジークフリード』が全て受け止める！」

「それはどうかな」

「へ？」

「フラッシュタイミング！ 『コロニックドラゴン』Lv2の効果を発揮！ 2コスト支払うことで、BP6000以下のスピリット1体を破壊する！ BP5000の『マ・グー』を破壊！」

地面すれすれを飛行する『アポロヴルム』の一方で、『コロニックドラゴン』がその姿を形のない炎に変える。その炎は瞬く間にフィールドを駆け、次の瞬間には『マ・グー』の元へとたどり着いていた。

それが、『マ・グー』に絡みつく。

必死に振り払おうと体をよじる『マ・グー』だったが、その炎を引き離す事は叶わず、その間に徐々に体を焼かれ、ついにはそのまま破壊されてしまった。

その爆風から、竜の姿に戻った『コロニックドラゴン』がダンの元へと戻っていく。

「それもライフだ！」

近づいた『アポロヴルム』が『サンバースト』を赤のバリアに叩きつけ、アンジュのライフを2つ砕く。

バリアに攻撃を弾かれた『アポロヴルム』だったが、その反動を利用して今度は宙へと距離を取り、その『サンバースト』に刃を添えて弓を構える。

『太陽神弓サンバースト』の合体アタック時効果！ B P 6 0 0 0 以下のスピリットを破壊したことによりライフを1つりザーブへ送る！」

そのまま、宙にピタリと止まった『アポロヴルム』が矢を放ち、再びバリアに衝撃を与えた。

「っ！」

これで、アンジュのライフは2つ。——ズレた

「合体スピリット！」

さらなるアタック宣言により、【界放】の効果でさらなるコアを得て回復する。

その増幅した力を込めて、『アポロヴルム』がさらなる矢を放った。
しかし、アンジユも黙ってはいない。

「フラッシュタイミング！ マジック『光翼之太刀』！ 私のスピリット1体はこのターン、BPを+3000し、疲労状態でブロックできるようになる。合体スピリットを指定！」

その矢を、『ジークフリード』が横から蹴って弾く。

それを見た『アポロヴルム』が間髪入れずに『ジークフリード』との距離を詰める。

「BPは18000。ダンの合体スピリットと同じだ！」

「ならばフラッシュタイミング！ マジック『双光気弾』を使用！」

「うげっ!」

「相手の合体スピリットのブレイヴ1つを破壊する。『スピニード・ハヤト』を破壊だ！」

斬り合い、防ぎ合っていた2体の合体スピリットだったが、『アポロヴルム』がその隙を突き、『ジークフリード』の懐に自らの手に平を押し付けた。

そして、何かを掴んだかのように腕を一気に引くと、それにつられて『スピニード・ハヤト』が分離した。

急激に主から引き離された『スピニード・ハヤト』が『アポロヴルム』の背後で爆発し、急激に力を失った『ジークフリード』が体勢を崩す。

その隙を逃さない『アポロヴルム』ではない。背後に携えた刃を一つその手に持ち、『ジークフリード』の心臓を貫いて破壊した。

「つ……！ でも、まだ『ジークフリード』は死んでいない！」

爆風を払い、なおも『ジークフリード』はそこに健在。

これでアンジュのライフは4までに回復する。そして、『光翼之太刀』の効果も消えていない。アンジュのライフが5以下である限り、『ジークフリード』はアンジュを守り続ける壁となる。

だが、ダンには止まらない。

「まだ行くぞ！ 合体アタックー！」

【界放】の効果で回復し、アンジュのところへ飛翔する『アポロヴルム』だったが、それを『ジークフリード』が横からタックルを決めて阻止する。

不格好に絡み合い、宙を数回転した後に、2体の竜が地面に激突する。

砂塵が舞い、轟音が鳴り爆発する。だが、それでもなお『ジークフリード』は折れることなく食らいつき、轟音が響くその中心で、2体の竜が炎のブレスを吐き合っ合せめぎ合う。

だが、2体の竜の力の差は、明確だった。

純粋な威力で負けた『ジークフリード』が炎に焼かれ破壊される。

だが、その炎を払い、『ジークフリード』はまた甦る。
アンジュのライフは、残り6。

「なっ?! ライフが!?!」

「この瞬間を待ってんだ。合体スピリット!」

炎を払い、雄叫びを上げる『ジークフリード』の懐に、すでに『アポロヴルム』はい
た。

そうこの瞬間。アンジュのライフが6以上になるこの瞬間だけは、『ジークフリード』
の不死性は失われる。

『アポロヴルム』のアタック時効果。『ジークフリード』を破壊する」

そして、縦に一閃。

その瞳で『アポロヴルム』を捉えるも、反応は間に合わず、『サンバースト』によつて
真つ二つに切り裂かれた『ジークフリード』はついに爆発し、真に破壊された。

『ジークフリード』!!」

「フラッシュタイミング。『コロニックドラゴン』の効果により、『ドラグノ祈禱師』を破
壊する」

その爆発の一方で、『コロニックドラゴン』がまた炎へと変わり、今度は『ドラグの祈
禱師』を焼き殺す。

そして、爆発を背に、『アポロヴルム』は2つの刃を弓に添え構える。

「っ！ーら、ライフで——」

アンジュの言葉を遮るように赤いバリアが展開され、すでに放たれた刃がそのバリアに当たり、衝撃でアンジュのライフを破壊する。

うわつと声を上げ後退するアンジュだったが、かろうじて踏みとどまり姿勢を正す。

だが、そこで正面を見た時。

「あつ——」

すでにアタック宣言をした『アポロヴルム』がそのアタック時効果で『ライト・ブレイドラ』を破壊し、『界放』の効果で回復して、アンジュの目の前に立っていた。

盤面は0。手札も0。バーストもなし。ライフは4つあるが、ダブルシンボルの『アポロヴルム』の攻撃を、2度受けることすらも出来ない。そしてダンのトラッシュにはまだ【界放】2回分のコアが残っている。

——詰みだ。

「もおおおお！ ライフで受ける！」

このアタックと、次のアタックでもって、アンジュのライフは全て砕かれた。



「『アポロヴルム』と『サンバースト』と『コロニックドラゴン』 噛み合い過ぎじゃない!? そんなことある!?!」

バトルフィールドから出て、第一声がそれだった。

「バトスピには無数にカードがある。そういうこともあるさ!」

「いやいや! 『サンバースト』は『アポロヴルム』が渡したデッキの中に最初からあつたカードなんでしょ!?! 絶対狙って作ってんじゃん! スピリットが自分に都合のいいカードを作っているわけえ!?!」

「いや、狙って作ったにしても『コロニックドラゴン』に合わせて効果を作るのは流石にニツチすぎでしょ」

うぎやー! つと不満が次々と出てくるアンジュを、リゼが押さえて止める。

最近では自室にこもりっきりのアンジュの元気な姿を見れていなかったが、この調子なら問題ないだろうと、ダンはある思う。

「お疲れダンはん。お茶いる?」

「ああ、ありがとう。貰うよ」

「おおきに〜」

一口すすったそのお茶は、戌亥が茶葉から選んだという彼女なりのこだわりの逸品ら

しい。飲んだ瞬間から香るその風味は、飲むたびに心が落ち着くので疲れた時によく効く。

「バトルに勝ったし、ダンはん今日は何食べたい？」

「……？ 今日肉じゃがじゃなかったのか？」

「せっかく勝ったんやし、ちよつとしたご褒美があつてもええやん？」

「ええ!? 嘘!? そういうの先に言つてよ戌亥！」

不満を吐ききつたのだろうアンジュが、2人に近づく。

アンジュの講義にケロつと受け流す戌亥を見ながら、ふと、ダンが呟いた。

「カレー……かな……」

本当に、自然に口からこぼれた言葉だった。

彼の好物でもあるし、彼女らのやり取りを見て昔の仲間を思い出したのかもしれないし、はたまた、彼女の作ったカレーが食べられなかったことが、未だに引きずつてるのかもしれない。

そんなことを思つたダンの心境を知る由もなく。

「ええ。ダンくんが当番になったらどうせカレー作るんでしょ？ じゃあもつと違うのにしない？」

「良いじゃんカレー！ 私も食べたい！ 肉じゃがと大して材料変わらないし良いよね

戌亥！」

「なんでアンジュはんが喜んでんねん……ああもうしゃーないなあ」

三者三様の反応を見せる彼女たちだが、不思議とそれが様になっている。

お互いがお互いに価値観が違うことを理解していて、そしてそれを受け入れ、とても深い絆で結ばれていることが、見ているだけで良く分かる。

それを見て、ダンは一瞬再認識する。

(やっぱり、仲間は良いな)

少なくともこの世界にいる間は、彼女たちのことは自分が守るんだと、そう決意を固めたのは、彼の内にしまわれた。

——で、結局私は何で『ジークフリード』と呼ばれたの!?